

まる の  
丸 野 第 2 遺 跡

県営農地保全整備事業七野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

宮 崎 県 宮 崎 郡  
田 野 町 教 育 委 員 会

## 丸野第2遺跡正誤表

### (図版目次)

図版15 S I 11・13検出状況 → (削除)  
 図版16 S I 11・13検出状況 → (挿入)

### (本文)

- 2 ページ 10行 2軒検出された → 2軒が検出された
- 4 ページ 6行 灰ヶ野・1基 → 灰ヶ野・2基
- 〃 " 高野原・2 → 高野原・1
- 11~12ページ
  - II b層の2行 大きは破片は → 大きな破片は
  - III 層の3行 黄褐色破質土層も → 黄褐色砂質土層も
  - V 層 暗褐色色シルト質土。 → 暗褐色シルト質土。
  - VI 層 シルト土質 → シルト質土
- 23 ページ 10行 61は57とは異り → 61は57とは異なり
- 53 ページ 12行 南西105cm離れて → 南西に105cm離れて
- 61 ページ 17行 弧状の2条 → 弧状の2条
- 94 ページ 11行 1条に沈線を → 1条の沈線を
- 109 ページ 第79図
  - 2 → 3
  - 3 → 2
- 〃 " S I 1 → S I 1 (第70図)
- 112 ページ 4行 S I 2 (第70図) → S I 2 (第84図)
- 〃 8行 S I 3 (第70図) → S I 3 (第84図)
- 〃 12行 遺物は伴わない。 → (削除)
- 116 ページ 4行 遺物は伴なっていない。 → 遺物は伴っていない。
- 119 ページ 7行 遺物は伴なっていない。 → 遺物は伴っていない。
- 166 ページ 10行 1 石皿 (第130・131図1~4)  
 → 1 石皿 (第130~132図1~6)
- 〃 25行 2 台石 (第132図5~8)  
 → 2 台石 (第132図7~8)
- 181 ページ 22行 厚み3.0cm → 厚み0.3cm
- 183 ページ 6行 第141図199・200 → (削除)
- 〃 表7 打製石器 L…6、M…4、N…1、O…1
- 186 ページ 第141図 石器のスケール 20cm → 10cm
- 194 ページ 11~17行 191~197の最大厚  
 4.7→0.47、3.5→0.35、3.7→0.37、5.2→0.52、  
 2.5→0.25、3.5→0.35、3.0→0.3
- 〃 19行 のみ状石斧 → のみ状石器
- 198 ページ 5行 15・16の → 14・15の
- 207~210ページ 第145図~第148図 坪穴住居変遷図 → 穴住居変遷図

田野町文化財調査報告書第11集

まる の  
丸 野 第 2 遺 跡

県営農地保全整備事業七野地区に  
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1990

宮 崎 県 宮 崎 郡  
田 野 町 教 育 委 員 会

## 序

田野町は現在、113ヶ所もの遺跡が確認されており、自然の豊さはもとより、歴史的環境にも恵まれた町であります。しかし、近年、開発行為等の増加に伴い、徐々に消滅しつつあります。教育委員会では文化財保護に努力しているところであります。工事の都合上、やむをえず消滅する部分については発掘調査による記録保存の措置をとっております。

このたび刊行しました「丸野第2遺跡」は県営農地保全整備事業に伴い実施した発掘調査の記録を報告するものです。

丸野第2遺跡は縄文時代早期から弥生時代後期にかけての複合遺跡で、宮崎県の歴史を解明する上でも、欠くことのできない貴重な資料が多数発掘されました。

本書の刊行を機に、皆様の埋蔵文化財に対する一層のご理解をいただければと願うものであります。

発掘調査並びに本書作成に際し、並々ならぬご理解とご協力をたまわりました関係者各位には、ここに記して感謝の意を申し上げる次第であります。

平成2年3月31日

田野町教育委員会

教育長 鍋 倉 政 信

## 例　　言

- 1 本書は田野町七野地区の県営農地保全整備事業に伴ない、昭和61・62年度に実施した丸野第2遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、田野町教育委員会が主体となり、一次調査を県文化課主任主事長津宗重が、二次調査を主任主事菅付和樹が担当した。
- 3 調査組織は次の通りである。

### 調査主体 田野町教育委員会

教育長 種子田栄幸（昭和61年度～平成元年度）  
鍋倉 政信（平成元年度）  
社会教育課長 妹尾 博（昭和61年度）・川口昭七（昭和62年度）  
北尾光雄（平成元年度）  
補佐兼  
社会教育係長 新坂政光（昭和61年度～63年度）  
社会教育係長 長友啓泰（平成元年度）  
主任主事 後藤哲男（昭和61年度～63年度・調査事務担当）  
櫛間泰子（平成元年度・調査事務担当）  
調査員 県文化課主任主事 長津宗重（一次調査）  
主任主事 菅付和樹（二次調査）  
調査補助員 寺師雄二（現山田町教育委員会）  
調査協力 県文化課 面高哲郎・永友良典・北郷泰道・近藤 協・谷山武範

- 4 遺物の復元・実測図作成・拓本・トレースは、

に協力を頂いた。

- 5 本書の執筆は、後藤・長津・菅付が分担し、文責については目次に明記している。
- 6 本書の編集は長津・菅付が担当した。
- 7 石器の石材は文化課主任宍戸 章の鑑定による。遺物の実測で県文化課主事長友郁子の協力を頂いた。
- 8 土器の色調は農林省農林水産技術会事務局監修の標準土色帖による。本報告の方位は磁北である。またレベルは海拔絶対高である。

## 本文目次

第Ⅰ章 序 説 .....	1	
第1節 発掘調査に至る経緯 .....	(後藤).....	1
第2節 丸野第2遺跡周辺の歴史的環境 .....	(長津).....	1
第Ⅱ章 遺構と遺物 .....	6	
第1節 調査区の設定と概要 .....	(長津).....	6
第2節 包含層の状態 .....	(長津).....	6
第3節 縄文時代早期の遺構と遺物 .....	(長津).....	13
第4節 縄文時代前期の遺構と遺物 .....	(菅付).....	13
第5節 縄文時代後期の遺構と遺物 .....	.....	14
(1) 積穴住居 .....	(長津).....	14
(2) 土坑 .....	(長津・菅付).....	94
(3) 集石遺構 .....	(長津・菅付).....	112
(4) 土器密集区 .....	(菅付).....	121
(5) 縄文土器 .....	(菅付).....	122
(6) 土器片錐 .....	(菅付).....	151
(7) 土器片加工円盤 .....	(長津).....	160
(8) 石器 .....	(長津).....	160
第6節 弥生時代の遺構と遺物 .....	(長津).....	195
(1) 積穴住居 .....	.....	195
(2) 弥生土器 .....	.....	195
第Ⅲ章 まとめ .....	(長津).....	200

## 挿 図 目 次

第 1 図	丸野第 2 遺跡及び周辺遺跡分布図	3
第 2 図	A～C 地区遺構分布図	7～8
第 3 図	丸野第 2 遺跡周辺地形図	9
第 4 図	A 地区第 3 トレンチ西壁上層断面図	10
第 5 図	E 地区 A～A' 地点七層断面図	11～12
第 6 図	A 地区遺構分布図	15～16
第 7 図	A 地区 SA 1・SA 2 実測図	17
第 8 図	A 地区 SA 1・SA 2 遺物出土状況図	18
第 9 図	A 地区 SA 1～SA 3 土層断面図	20
第 10 図	縄文土器実測図(1)	21
第 11 図	縄文土器実測図(2)	22
第 12 図	A 地区 SA 3・SC 1・SC 2 実測図	24
第 13 図	A 地区 SA 3 遺物出土状況図	25
第 14 図	縄文土器実測図(3)	26
第 15 図	縄文土器実測図(4)	27
第 16 図	縄文土器実測図(5)	28
第 17 図	縄文土器実測図(6)	29
第 18 図	縄文土器実測図(7)	30
第 19 図	縄文土器実測図(8)	31
第 20 図	B 地区遺構分布図	33～34
第 21 図	B 地区竪穴住居分布図	35～36
第 22 図	B 地区 SA 1・SA 4 実測図	37
第 23 図	B 地区 SA 2・SA 3 実測図	39～40
第 24 図	縄文土器実測図(9)	41
第 25 図	B 地区 SA 3 遺物出土状況図	43～44
第 26 図	B 地区 SA 3 土層断面図	45
第 27 図	縄文土器実測図(10)	46
第 28 図	縄文土器実測図(11)	47
第 29 図	縄文土器実測図(12)	48
第 30 図	縄文土器実測図(13)	49

第3 1図	縄文土器実測図(14) .....	50
第3 2図	B地区SA2・SA4遺物出土状況図 .....	51
第3 3図	縄文土器実測図(15) .....	52
第3 4図	B地区SA5・SA6実測図 .....	54
第3 5図	B地区SA5遺物出土状況図 .....	55
第3 6図	B地区SA4～SA6土層断面図 .....	56
第3 7図	縄文土器実測図(16) .....	57
第3 8図	縄文土器実測図(17) .....	58
第3 9図	縄文土器実測図(18) .....	59
第4 0図	縄文土器実測図(19) .....	60
第4 1図	B地区SA6遺物出土状況図 .....	62
第4 2図	縄文土器実測図(20) .....	63
第4 3図	縄文土器実測図(21) .....	64
第4 4図	縄文土器実測図(22) .....	65
第4 5図	B地区SA7・SA9実測図 .....	67
第4 6図	B地区SA7遺物出土状況図 .....	68
第4 7図	B地区SA6～SA9上層断面図 .....	69
第4 8図	縄文土器実測図(23) .....	70
第4 9図	縄文土器実測図(24) .....	71
第5 0図	B地区SA8・SA10実測図 .....	73
第5 1図	B地区SA8遺物出土状況図 .....	74
第5 2図	B地区SA6・SA8上層断面図 .....	75
第5 3図	縄文土器実測図(25) .....	76
第5 4図	縄文土器実測図(26) .....	77
第5 5図	縄文土器実測図(27) .....	78
第5 6図	B地区SA9, C地区SA2・SA3遺物出土状況図 .....	79
第5 7図	縄文土器実測図(28) .....	80
第5 8図	縄文土器実測図(29) .....	81
第5 9図	C地区遺構分布図 .....	83～84
第6 0図	C地区SA1実測図 .....	85
第6 1図	C地区SA1遺物出土状況図 .....	86
第6 2図	縄文土器実測図(30) .....	87

第63図	縄文土器実測図(31)	88
第64図	C地区SA2・SA3実測図	90
第65図	C地区SA2・SA3土層断面図、SC1実測図	91
第66図	縄文土器実測図(32)	92
第67図	C地区SA4・SA5実測図	93
第68図	C地区SA6・SA7実測図	95
第69図	A地区南東部遺構分布図	97
第70図	A地区SC3・SC10・SC11・SC17・SI1実測図	98
第71図	A地SC12・SC13実測図	99
第72図	A地SC14実測図	100
第73図	A地区SC15・SC16・SC18・SC19・SC20実測図	102
第74図	B地区SC1実測図、SA2土層断面図	104
第75図	E地区遺構配置図及び遺物分布図	105～106
第76図	E地区SC4遺物出土状況及び構造実測図	107
第77図	E地区SC4出土遺物実測図	108
第78図	E地SC5遺構実測図	108
第79図	E地区SC5出土遺物実測図	109
第80図	E地区SC8遺物出土状況及び遺構実測図	109
第81図	E地区SC8出土遺物実測図	110
第82図	E地SC10遺構実測図	111
第83図	E地SC10出土遺物実測図	111
第84図	A地SC21・SI2・SI3実測図	113
第85図	E地区SI1～6遺構実測図	114
第86図	E地区SI7～10・12遺構実測図	115
第87図	E地区SI11・13～16遺構実測図	117
第88図	E地区SI17～21遺構実測図	118
第89図	E地区SI22～25遺構実測図	119
第90図	E地区SI26～27遺構実測図	120
第91図	E地区集石遺構出土土器実測図	120
第92図	E地区土器密集区下部半完形土器出土状況実測図	121
第93図	縄文土器実測図(33)	123
第94図	縄文土器実測図(34)	124

第 95 図	縄文土器実測図 (35) .....	125
第 96 図	縄文土器実測図 (36) .....	127
第 97 図	縄文土器実測図 (37) .....	128
第 98 図	縄文土器実測図 (38) .....	129
第 99 図	縄文土器実測図 (39) .....	130
第100 図	縄文土器実測図 (40) .....	132
第101 図	縄文土器実測図 (41) .....	133
第102 図	縄文土器実測図 (42) .....	134
第103 図	縄文土器実測図 (43) .....	135
第104 図	縄文土器実測図 (44) .....	136
第105 図	縄文土器実測図 (45) .....	137
第106 図	縄文土器実測図 (46) .....	138
第107 図	縄文土器実測図 (47) .....	139
第108 図	縄文土器実測図 (48) .....	141
第109 図	縄文土器実測図 (49) .....	142
第110 図	縄文土器実測図 (50) .....	143
第111 図	縄文土器実測図 (51) .....	144
第112 図	縄文土器実測図 (52) .....	145
第113 図	縄文土器実測図 (53) .....	146
第114 図	縄文土器実測図 (54) .....	147
第115 図	縄文土器実測図 (55) .....	148
第116 図	縄文土器実測図 (56) .....	149
第117 図	縄文土器実測図 (57) .....	150
第118 図	縄文土器実測図 (58) .....	152
第119 図	縄文土器実測図 (59) .....	153
第120 図	縄文土器実測図 (60) .....	154
第121 図	縄文土器実測図 (61) .....	155
第122 図	縄文土器実測図 (62) .....	156
第123 図	縄文土器実測図 (63) .....	157
第124 図	縄文土器実測図 (64) .....	158
第125 図	縄文土器実測図 (65) .....	159
第126 図	土器片加工品実測図 (1) .....	161

第127図	上器片加工品実測図(2) .....	162
第128図	土器片加工円盤分布図 .....	163
第129図	石器分布図 .....	169
第130図	石器実測図(1) .....	170
第131図	石器実測図(2) .....	171
第132図	石器実測図(3) .....	172
第133図	石器実測図(4) .....	174
第134図	石器実測図(5) .....	175
第135図	石器実測図(6) .....	177
第136図	石器実測図(7) .....	179
第137図	石器実測図(8) .....	180
第138図	石器実測図(9) .....	182
第139図	石器実測図(10) .....	184
第140図	石器実測図(11) .....	185
第141図	石器実測図(12) .....	186
第142図	A地区弥生S A 1実測図 .....	196
第143図	弥生S A 1内S H 1実測図、弥生S A 1土層断面図、弥生遺物実測図 .....	197
第144図	弥生上器実測図 .....	199
第145図	竪穴住居変遷図(Ⅰ期) .....	207
第146図	竪穴住居変遷図(Ⅱ期) .....	208
第147図	竪穴住居変遷図(Ⅲ期) .....	209
第148図	竪穴住居変遷図(Ⅳ期) .....	210

## 表 目 次

表 1	縫穴住居観察表	103
表 2	土器片鑿計測表	160
表 3	土器片加工円盤計測表	162
表 4-1	土器片加工円盤重量表（1）	164
表 4-2	土器片加工円盤重量表（2）	165
表 5	土器片加工円盤重量グラフ	167～168
表 6	石器組成表	166
表 7	石器石材組成表	183
表 8	石器観察表	188
表 9	丸野第2遺跡縫穴住居変遷表	204
表 10	縄文土器観察表	215

## 図 版 目 次

図版 1	A地区遠景，A地区SA1 .....	247
図版 2	A地区SA2，A地区SA3遺物出土状況 .....	248
図版 3	A地区SA3，A地区SC15 .....	249
図版 4	A地区SI3，A地区i-8グリッド遺物出土状況 .....	250
図版 5	A地区SA1(弥生)，B地区窪穴住居検出状況 .....	251
図版 6	B地区窪穴住居群 .....	252
図版 7	B地区SA2，B地区SA3 .....	253
図版 8	B地区SA4，B地区SA5 .....	254
図版 9	B地区SA7，B地区SA8 .....	255
図版 10	B地区SA9，B地区SA10 .....	256
図版 11	C地区窪穴住居検出状況，C地区窪穴住居群 .....	257
図版 12	C地区SA1，C地区SA2・SA3 .....	258
図版 13	E地区遠景，E地区遺構検出状況，土器密集区出土状況，土器密集区上層断面，土器密集区包含層下部及び集石遺構の検出状況 ..	259
図版 14	土器密集区下部の半完成土器出土状況，集石遺構及び精製鉢形土器等の検出状況，精製鉢形土器及び市来式系土器の出土状況，土器密集区最下部の曾根式土器出土状況，E地区SC4完掘状況 ..	260
図版 15	E地区SC5完掘状況，E地区SC8完掘状況，E地区SC10完掘状況，E地区中央部集石遺構検出状況，SI1・SI2検出状況，SI11・13検出状況，SI3検出状況 .....	261
図版 16	SI4・6・7検出状況，SI8・9・10検出状況，SI12検出状況，SI14検出状況，SI15検出状況 .....	262
図版 17	SI16検出状況，SI17検出状況，SI18検出状況，SI19検出状況，SI20検出状況，SI21検出状況 .....	263
図版 18	SI22検出状況，SI23検出状況，SI24検出状況，SI25検出状況，SI26検出状況，SI27検出状況 .....	264

図版 1 9	A地区 S A 1 出土土器, S A 2 出土土器, S A 3 出土土器 .....	265
図版 2 0	A地区 S A 3 出土土器 .....	266
図版 2 1	A地区 S C 2 出土土器, S C 16 出土土器, S C 15 出土土器, B地区 S A 1 出土土器 .....	267
図版 2 2	B地区 S A 2 出土土器, S A 3 出土土器 .....	268
図版 2 3	B地区 S A 3 出土土器 .....	269
図版 2 4	B地区 S A 3 出土土器, S A 4 出土土器, S A 5 出土土器 .....	270
図版 2 5	B地区 S A 5 出土土器, S A 6 出土土器 .....	271
図版 2 6	B地区 S A 6 出土土器, S A 7 出土土器 .....	272
図版 2 7	B地区 S A 7 出土土器, S A 8 出土土器 .....	273
図版 2 8	B地区 S A 8 出土土器, S A 9 出土土器, S A 10 · S C 1 出土土器 .....	274
図版 2 9	B地区 S C 1 出土土器, C地区 S A 1 出土土器, S A 2 · S A 3 · S A 4 · S A 5 · S A 6 · S A 7 · S C 1 出土土器 .....	275
図版 3 0	A地区 S C 15 · S C 17 出土土器, E地区 S C 4 · 5 · 8 · 10 · S I 5 · 8 · 9 · 20 · 24 出土土器, E地区 S C 8 出土土器, 縄文時代早期 · 前期土器 .....	276
図版 3 1	I · II a · II b · III a · III b 類土器, III b · II 類土器, III b 類土器, IV a, IV b 類土器 .....	277
図版 3 2	V a · V b 類土器, V b · V c 類土器, V c 類土器, V 類土器 ..	278
図版 3 3	V a 類土器(内面 · 外面), V b · V c · V d · V d 1 · V d 2 · VI a 類土器(内面 · 外面) .....	279
図版 3 4	VI a 類土器, VI a · VI b 類土器, VI a 類土器, VI b 類土器 .....	280
図版 3 5	VI b 類土器 .....	281
図版 3 6	VI b 類土器, VI b · VI c 類土器, VI c 類土器 .....	282
図版 3 7	VI c 類土器 .....	283
図版 3 8	VI d 類土器 .....	284
図版 3 9	VI a 類土器, VI b 類土器 .....	285
図版 4 0	VI b 類土器 .....	286
図版 4 1	VI b 類土器, IX 類土器, IX a · IX b 類土器 .....	287

図版 4 2	N a 類土器, N c 類土器, N 類土器, X 類土器	288
図版 4 3	X・N 類土器, N 類土器	289
図版 4 4	VII a 類土器, VII c 類土器, VII a 類土器, VII b 類土器	290
図版 4 5	N 類土器, 脚台付浅鉢(外面・内面)	291
図版 4 6	脚台付浅鉢(脚台), 脚台付浅鉢	292
図版 4 7	底部	293
図版 4 8	土器片鍤・土器片加工円盤	294
図版 4 9	石皿	295
図版 5 0	台石, 磨石, 敲石, 磨製石斧	296
図版 5 1	磨製石斧, 打ち欠き石鍤, 切目石鍤, 打製石鐵・石刀	297
図版 5 2	石刀・有孔輕石加工品・スクレイバー・鑿状石器・円盤形石器・ 黒耀石・石皿	298
図版 5 3	石皿	299
図版 5 4	台石, 磨石	300
図版 5 5	磨石, 敲石, 磨製石斧	301
図版 5 6	磨製石斧, 磨製石斧, 鑿状石斧, 磨石(住居出土), 弥生時代	
S A 1	出土磨製石鐵	302

# 第 I 章 序 説

## 第1節 発掘調査に至る経緯

宮崎県宮崎郡田野町において、昭和61年度から、七野地区の県営農地保全事業が行われている。それに先立ち、事業区内の埋蔵文化財の発掘調査として昭和60年12月に田野町教育委員会が分布調査を行い、遺跡の存在が確認され、更に県教育委員会文化課によって再確認が行われた。調査により事業区内に遺跡の存在が判明したため、宮崎県中部農林振興局と埋蔵文化財の保護についての協議が行われたが、事業施行上、保存が困難な部分が多くとりわけA～D地区は、高台にあり、事業との並行発掘が困難だということで、昭和61年度に記録保存の措置をとることになった。昭和61年3月に地元との協議も終わり、同年5月6日～9月30日まで一次調査が行われた。

また一次調査の北側斜面（農道を含む）の保護について、中部農林振興局と協議を行ったが、事業施行上、保存が困難な地区であり、高台のため農地保全事業との並行発掘が難しいということで、62年度に記録保存の措置をとることとなった。62年8月に地元との協議も終わり、同年8月25日～10月29日まで二次調査が行われた。

## 第2節 丸野第2遺跡周辺の歴史的環境

田野町は宮崎県の中南部の宮崎市より南西約20kmに位置する。田野盆地は南那珂山地に属し、標高120～140mの台地を形成している。田野盆地の北西部の山地が標高200～280mと低いのに対して、南部の山地は標高600m級である。盆地の北部の山地麓を清武川が南北方向から北東方向へ流れている。

丸野第2遺跡は田野盆地の北西部の南に伸びる台地の最高位（標高220m）に位置する。当遺跡の北北西約1.5kmには丸野第1遺跡があり、縄文時代後・晚期の土器が出土している。丸野第2遺跡の歴史的環境を知るために、町内の遺跡を時代順に概観する（第1図）。

### 旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては萩ヶ瀬第2遺跡（人字三角寺字萩ヶ瀬・旧名称萩ヶ瀬遺跡）と町内でナイフ形石器<sup>①</sup>、沓掛<sup>②</sup>で細石核<sup>③</sup>が表採されていたが、昭和58・59年に前平地区の芳ヶ迫第1・3遺跡<sup>④</sup>（大字前平字芳ヶ迫）、札ノ元遺跡<sup>⑤</sup>（大字前平字札ノ元）で調査が行われた。芳ヶ迫第1遺跡では、2基の集石遺構間の径5mの範囲にナイフ形石器3・剥片・尖頭器1・三稜尖頭器1・彫器1・搔器1などが出土している。芳ヶ迫第3遺跡では石核2・剥片を伴った集石遺構1基と剥片・尖頭器1が出土している。札ノ元遺跡では1基の集石遺構を中心として径3m程度の範囲で石核2・ナイフ形石器1・剥片などが出土している。

3遺跡とも姶良丹沢火山灰直上から旧石器が出土しており、札ノ元遺跡の焼石の熱ルミネッセンス法による年代測定法によれば20920年B.P.の年代が得られている。長蔵遺跡<sup>(5)</sup>（大字七野字長蔵）ではA地区南端のトレンチのⅦ層（褐色ローム層）から石核・剥片などが約80点出土している。

### 縄文時代

縄文時代の早期の遺跡としては、貝殻条痕文土器の前畠第4遺跡<sup>(6)</sup>（大字八重字前田・旧名称前畠遺跡）が知られていたが、前平遺跡群の万ヶ迫第1・3遺跡・札ノ元遺跡・又五郎遺跡<sup>(7)</sup>（大字前平字又五郎）、長蔵遺跡、権現谷遺跡<sup>(8)</sup>（大字八重字権現谷・旧名称八重地内遺跡）で発掘調査が行われた。その結果、万ヶ迫第1遺跡で集石遺構54基、同第3遺跡で集石遺構104基、札ノ元遺跡で集石遺構84基・堅穴住居2軒検出された。札ノ元遺跡の堅穴住居は2m×3mの隅丸長方形プランと2.5m×2.5mの隅丸方形プランであり、小型の堅穴住居である。又五郎遺跡でも堅穴住居が検出されており、早期の堅穴住居としては県内に検出例がないので注目される。また集石遺構は計242基も調査されており、県内では最大規模であり、タイプも多種多様である。前平地区遺跡群の4遺跡とも押型文土器が出土しているが、吉田式・前平式土器は万ヶ迫第3遺跡では全く出土していない。また手向山式・半裕式土器は札ノ元遺跡だけで、寒ノ神式土器は又五郎遺跡だけで出土している。以上のように遺跡間の距離が180～300mと近距離でありながらそれぞれ土器群の様相を異にしている。石器の組成としては打製石器の割合が高く、特に万ヶ迫第1遺跡からは磨製の環状石斧が出土しており、発掘調査例としては小山尻東遺跡<sup>(9)</sup>（清武町）に次いで2例目である。長蔵遺跡では山形文の押型文土器が出土している。権現谷遺跡では山形と裕円形の押型文土器・貝殻条痕文土器・燃糸文土器・前平式土器が出土している。

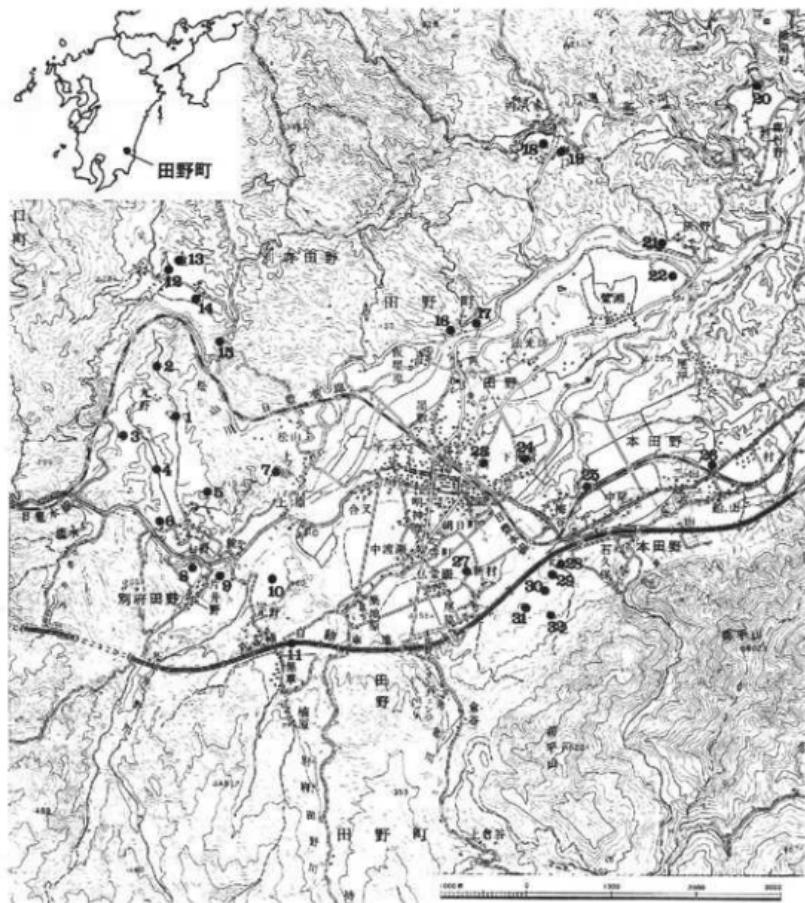
前期の遺跡としては、丸野第2遺跡・長蔵遺跡・権現谷遺跡が調査され、曾畠式土器が出土した。長蔵遺跡では100基の土坑が検出され、共伴土器は全くなかったが、埋土の御池ボラと遺構検出状況から前期を中心とする時期に比定されている。権現谷遺跡でも土坑が検出されており、そのうちのSK53は御池ボラが埋土に含まれ、曾畠式土器が出土している。

中期は県内全域的に非常に少なく、当地域においても発見されていない。

後期になると、遺跡が急激に増え、後期初頭～中頃の指宿式・綾式・下弓田式などが出上した青木遺跡<sup>(10)</sup>（大字新村字青木）では、配石遺構や貯藏穴が検出された。また黒草第1遺跡<sup>(11)</sup>（大字黒草字黒草・旧名称黒草遺跡）でも同時期の土器が出土している。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、黒草第1遺跡で終末期の土器が出土しているだけであったが、権現谷第1遺跡と当遺跡が調査された。権現谷第1遺跡では3軒の後期初頭の堅穴住居が検出され、そのうちのSB45は長さ4.7m、幅3.0mの規模で長方形プランであり、壁際に柱穴



第1図 丸野第2遺跡及び周辺遺跡分布図

- |           |               |               |             |
|-----------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 丸野第2遺跡 | 9. ヒダカン城址     | 17. 萩ヶ瀬遺跡     | 25. 梅谷城址    |
| 2. 丸野第1遺跡 | 10. 高野原地下式横穴墓 | 18. 堀口A遺跡     | 26. 船ヶ山遺跡   |
| 3. 長森遺跡   | 11. 黒草遺跡      | 19. 堀口B遺跡     | 27. 青木遺跡    |
| 4. 七野第1遺跡 | 12. 八重B遺跡     | 20. ズクノ山遺跡    | 28. 又五郎遺跡   |
| 5. 七野第2遺跡 | 13. 八重C遺跡     | 21. 灰ヶ野地下式横穴墓 | 29. 札ノ元遺跡   |
| 6. 七野第3遺跡 | 14. 八重A遺跡     | 22. 灰ヶ野遺跡     | 30. 芳ヶ迫第1遺跡 |
| 7. 天建神社址  | 15. 前畑遺跡      | 23. 桜町遺跡      | 31. 芳ヶ迫第3遺跡 |
| 8. 片井野遺跡  | 16. 田野城址      | 24. 井倉洞穴遺跡    | 32. 芳ヶ迫第2遺跡 |

を持つ2本柱である。SB45からはくの字口縁部の下位に一条の刻目突帯を有する中溝式の要形土器が出土している。今回の調査で後期前半の方形プランの堅穴住居が検出され、石器製作の工房の性格が想定されるのは注目される。

### 古墳時代

古墳時代の前方後円墳も円墳も確認されておらず、集落も調査されていない。しかし、地下式横穴墓は灰ヶ野<sup>(12)</sup>（大字灰ヶ野字灰ヶ野・1基）と高野原<sup>(13)</sup>（大字元野字高野原・2基）が調査されている。灰ヶ野地下式横穴墓群は清武川の支流である松山川と井倉川が合流する地点を南に臨む標高約90mの丘陵の舌状部に立地し、昭和47年に畑の整地作業中に2基発見された。1号地下式横穴墓は平入り隅丸方形プランで、アーチ型の天井である。人骨は1体で、副葬品は蛇行剣1・鉄斧1・鉄鎌10・刀子1である。2号地下式横穴墓は羨門石閉塞の平入り不定形プランである。人骨は痕跡を残す程度で、副葬品は刀子1・鉄鎌8である。1号地下式横穴墓と2号地下式横穴墓との距離は約10mである。高野原地下式横穴墓群は片井野川と井倉川に挟まれた標高約170mの舌状台地東端に立地し、昭和15年4年に耕作中に1基発見された。1号地下式横穴墓は羨門石閉塞の平入り長方形プランである。副葬品としては鹿角製刀装具付き剣1のみである。

当地域の地下式横穴墓の特徴は平入り長方形プランで、堅坑は長方形である。6世紀代の地下式横穴墓である。

### 歴史時代

平安時代の遺跡としては布痕土器が表採された合子ヶ谷第1遺跡（人字合子ヶ谷・旧名称合子ヶ谷遺跡）が知られているのみである。中世の遺跡としては遺構は検出されなかったが、東播系の片口鉢・備前焼きの甕を出土した芳ヶ迫第2遺跡<sup>(14)</sup>がある。

以上のように当地域は旧石器時代から繩文時代後期に多くの遺跡が存在すると共に、各時代各時期のうねりを受けながら独自の対応を行っている。

### 註

- (1) 二宮忠司 「九州におけるナイフ形石器」『考古学論叢』1 1973
- (2) 茂山 譲・大野寅夫 「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』3号  
宮崎考古学会 1977
- (3) 面高哲郎・寺師雄二 「芳ヶ迫第1～3遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集  
田野町教育委員会 1986
- (4) 寺師雄二 「札ノ元遺跡」『田野町文化財調査報告書』第3集  
田野町教育委員会 1986
- (5) 森田浩史 「長蔵遺跡」『田野町文化財調査報告書』第6集  
田野町教育委員会 1989

- (6) 茂山 譲 「宮崎郡田野町採集の貝殻条痕文土器」『宮崎考古』第4号  
宮崎考古学会 1978
- (7) 昭和15年度 田野町教育委員会が調査を行った。伊東 但氏の御教示による。
- (8) 森田浩史 「八重地区遺跡」『田野町文化財調査報告書』第7集  
田野町教育委員会 1989
- (9) 近藤 協 「小山尻東遺跡」『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第3集  
宮崎県教育委員会 1985
- (10) 鈴木重治 「宮崎郡田野町青木遺跡の調査」『日本考古学協会第28回大会発表要旨』  
日本考古学協会 1963
- (11) 岩永哲夫・北郷泰道 「黒草遺跡」『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』(3)  
宮崎県教育委員会 1979
- (12) 田中 茂 「宮崎郡田野町灰ヶ野地下式横穴」『宮崎県総合博物館研究紀要』1  
宮崎県総合博物館 1972  
石川恒太郎「田野町灰ヶ野地下式古墳調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第17集  
宮崎県教育委員会 1973
- (13) 日高正晴 「高野原地下式1号墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集  
宮崎県教育委員会 1981
- (14) 註8の文献より

## 第Ⅱ章 遺構と遺物

### 第1節 調査区の設定と概要

丸野第2遺跡（田野町赤松乙）は、宮崎市の南西約20kmにある田野盆地の北西部の南に伸びる標高220mの台地上に位置する（第3図）。当遺跡の北北西約1.5kmには周知の遺跡である丸野遺跡があり、縄文時代後・晩期の土器が出土している。

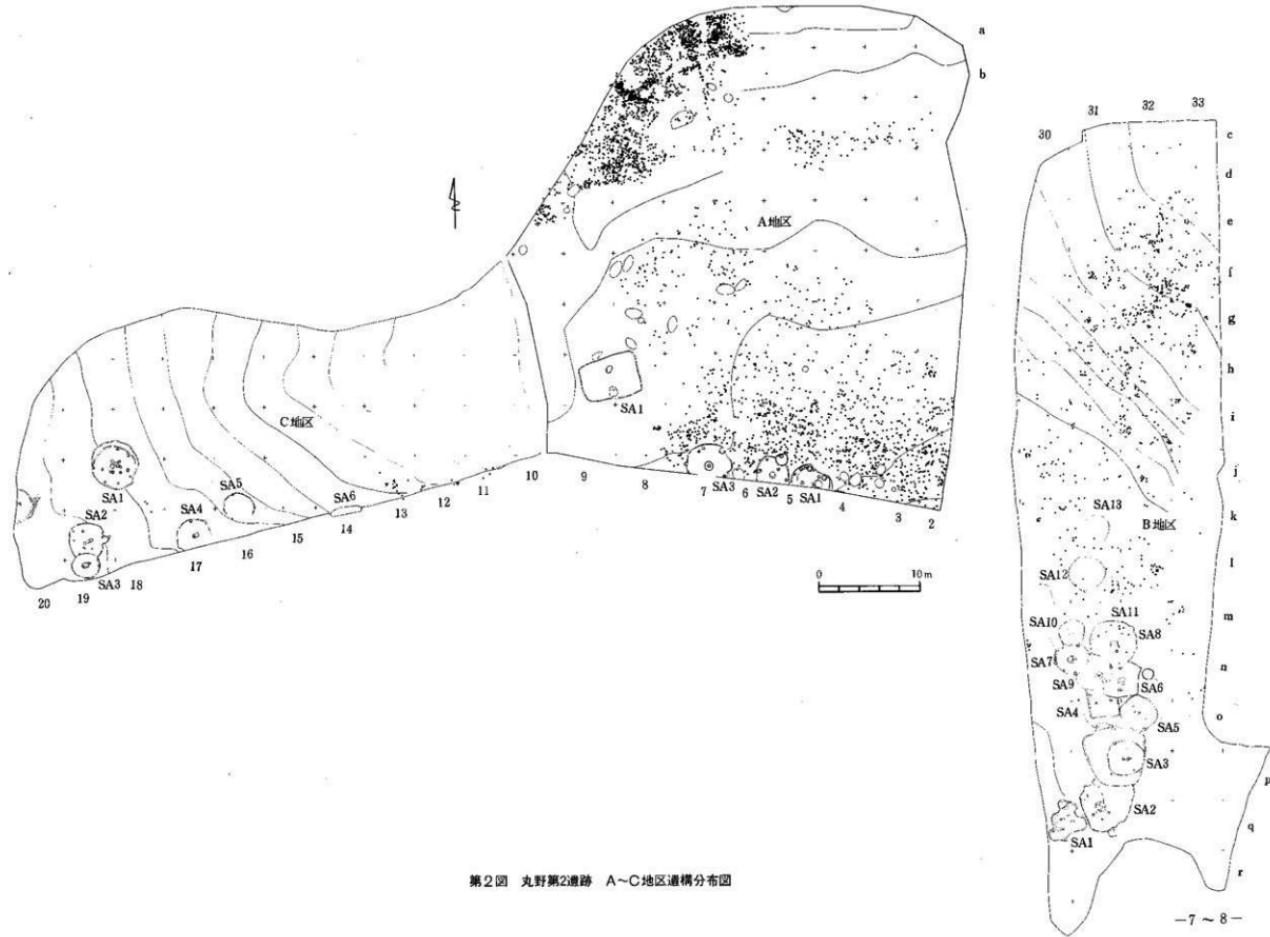
七野地区の県営農地保全整備事業に伴って一次調査が昭和61年5月6日～9月30日まで5,600m<sup>2</sup>の調査が田野町教育委員会によって行われた。南北方向に5m方眼のグリッドを設定し、調査した順番で東からB・A・C地区とした。縄文早期の土器としてはA地区で口縁部直下にヘラ状施文具による押印文を有する貝殻条痕文土器が、B地区で山形押型文土器が若干出土している。縄文時代後期の窑穴住居がA地区で4軒、B地区で15軒、C地区で7軒検出された。また、A地区の北端部の土器密集区のD地区から同時期の土器がかなりの量出土し、南東部ではピット群と土坑群が検出された。縄文時代後期の土器群としては指宿式・松山式・市来式・草野式・小池原上層式・鎌崎式などが出土し、石器としては磨製石斧・切目石錐・打製石錐・石刀などが出土した（第2図）。

昭和62年8月25日～10月29日まで行われた二次調査では1,060m<sup>2</sup>が調査された（E地区）。一次調査のD地区の北側に続く畠地の土手と農道になっている部分を中心にも量の土器を集中して包含する層と、その北西側下位において焼跡を集積あるいは配石した遺構が27基検出された。そのほかに、土器包含層の下層や斜面側から土坑も検出している。遺物としては、縄文時代後期前葉を中心に一部中期に遡る可能性のある土器や前期・弥生時代中期後半の土器などが出土地してい。また一次調査と同様に石器の出土量は極端に少ない。土器片軸用加工品では円盤が多く出土し、土器片錐はわずかに1点確認したにすぎない。前期の曾畠式土器も出土している。

### 第2節 包含層の状態

当遺跡では、アカホヤ層はA地区の南端部、B地区の南半分、C地区の南半分、E地区の北西斜面の一部で残存していた。

当遺跡の基本層序は、I層が暗褐色土層（Hue 7.5YR 3/4・耕作土・粘性が弱い）、II層が黒褐色土層（Hue 7.5YR 2/2・I層より粘性があり、固くしまっている。）、III層が黄褐色土層（Hue 10YR 5/6・アカホヤ層）、IV層が褐色土層（Hue 7.5YR 4/3・粘性が強く、1～3cmの小礫をわずかに含む）、V層が黄褐色土層（Hue 10YR 5/8・粘性は中程度、3～5cmの細礫を多量に含む）、VI層が暗褐色土層（Hue 10YR



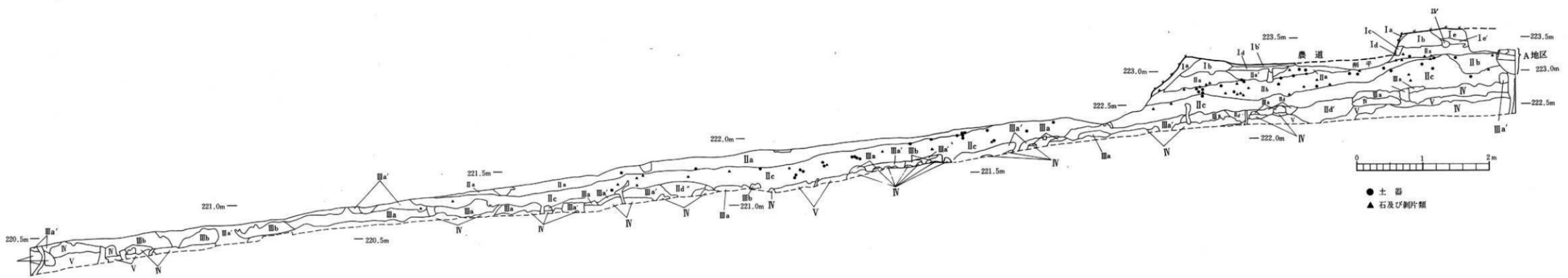


第3図 九野第2遺跡周辺地形図



第4図 A地区第3トレーンチ西壁土層断面図

- I 暗褐色土層 (7.5 YR 7/8) 褐橙色 (7.5 YR 7/8) のバニスを多く含み粘性は弱くカフカしている。  
耕作土  
「層より粘性があり固くしまつていて。バニスを確かに含み、3~5mmの小礫も含む。また、土器も包含している。  
暗褐色土層の粘土粒を含む。
- II 黑褐色土層 (7.5 YR 2/2) 褐橙色 (7.5 YR 7/8) のバニスを多量に含む。アカホヤ層に比定される。  
炭化粒を確かに含む。
- III 黄褐色土層 (10 YR 5/6) 褐橙色 (7.5 YR 7/8) のバニスを多く含む。粘性弱く、乾燥するととろくす。
- IV 鹽色土層 (7.5 YR 4/3) 粘性強く、乾燥すると固くしまる。1~3cm程度の小礫を確かに含む。土器は包含せず。
- V 黄褐色土層 (10 YR 5/8) 粘性は中程度、3~5mmの細砂を多量に含む。表面よりしまりが強い。土器は包含せず。手ざわりがザラザラしている。
- VI 明黄褐色土層 (10 YR 6/6)  
a 明褐色土 (7.5 YR 5/6) 粘性強く固くしまる。1~3cmの小礫を含み白い粒子が多い。黄褐色のプロックを確かに含み細粒を多く含む。  
後回土器を包含する。炭化物を確かに含む。
- b にぶい黄褐色土 (10 YR 5/3) 黄褐色の細粒を確かに含むのがプロックは含まない。粘性強いが乾燥すると崩れ。土器は出土せず。
- c 褐色土 (10 YR 4/4) 粘性は中程度で固くしまる。黄褐色のプロック及び細粒を多く含む。3~5mmの細礫も多い。後期の上部が出土。



第5図 E地区 A-A' 地点土層断面図

0層…農道。砂利を含む暗黄褐色砂質土層。バサバサしている。

Ia層…表土。斜面にのみ残る。黒褐色砂質土。バサバサしている。I bよりやや明るく粘性は弱い。

Ib層…表土。黒褐色砂質土。やや粘性を有し、1mm前後の黒っぽい砂粒を含む。最も黒い。

II層…耕作(または擾乱)土。I bとI eの混在した層。I eよりやや黒っぽい。

IIc層…表土。黒褐色シルト質土。粘りがありやや締まっている。I aより黒くI bより明るい。

Id層…農道。暗褐色砂質土。粘性はないがかたく締まっていて白い砂粒が見られる。0層より黒っぽい。

Ie層…耕作土。黒褐色砂質土。やや粘性を有し砂粒が多い。I a、I bより明るい。

Ie層…擾乱土。前年度の発掘による擾乱土(表土)が残ったものと思われ、暗黃褐色の小ブロックや砂粒が多い。やや明るい黒褐色砂質土。I eとほぼ同色。

IIa層…0層に近い色でやや暗い黄褐色砂質土。粘性をおびる。II b層より少ないが遺物や山礫を包含する。

IIa層…II a層とほぼ同色。シルト質土層でやや暗褐色の擾乱が見られる。土器の色に近い赤褐色の1mm前後の粒が見られるが、土器片粒かアカホヤ粒かは不明。堅く締まる。Id同様に水の作用を受けているものと思われ、農道の歴の跡かもしれない。

IIb層…暗褐色砂質土。主包含層。多くの遺物や礫を含む。I eより明るく II aより暗い。II cよりも農道の影響を受けているものと思われる。遺物のうち比較的大きな礫はこの層の下部か II cの上部で出土している。

IIc層…黒褐色シルト質土。強い粘性あり。この層の上部にまで遺物が含まれている。下部にはアカホヤから浮いた状態がもしくは接して配石遺構が検出される。II bよりやや黒っぽい。

比較的安定した層と思われる。

Id層…暗褐色シルト質土。遺物を含む。アカホヤに似て粒のきめが細かい。

IId層…暗褐色シルト質土。白色や黄色の細かな粒が見られる。堅く締まる。II cの色に近い。

IId層…暗褐色シルト質土。1mm以下の黄色っぽい細砂粒を含む。II dよりやや明るい。

III層… 黄褐色砂質土層(アカホヤ層)。標高の高い方のアカホヤはアカホヤ層の下部に近いと思われ、かなり擾乱(風化か)の多い混在層(=II a)である。下部はやや粒が大きくなり、バミスとIV層のブロックが混じる。また、比較的純粋な黄褐色破質土層も残っており(=II b)、これはII aより明るい黄色である。II a層全体としては傾斜面上に堆積した状況を残している。

IIIa層…暗褐色砂質土。II dに色が近い。III aがさらに風化されたものと思われる。II dとIII aはアカホヤ層に交互に割り込むことから、形成過程を同じくするものと思われる。

IV層…暗褐色砂質土。弱い粘性あり。灰色をおびた堅い砂質のブロックを含む。自然層と思われる。

V層…暗褐色シルト質土。自然層。

VI層…暗褐色シルト土質。強粘性。V層より明るく柔らかい。自然層。

6/6・粘性が強く、数mmの細砂粒を多く含む)である(第4図)。

なお縄文時代後期の土器包含層はⅡ層である。

### 第3節 縄文時代早期の遺構と遺物

アカホヤ層まで削平されたA地区の北側で縄文早期の土器、B地区北側で山形押型文土器が出土した。遺構としてはA地区で集石遺構が1基検出された。アカホヤ層が残存していたA～C地区の南側は、作物作付の関係で早期の包含層の調査は残念ながら断念せざるを得なかった。

#### (1) 集石遺構

S I 1 (第70図)

S I 1は長径70cm、短径65cm、深さ14cmの不定形プランの土坑に、長さ65cm、幅45cmの範囲に小礫が集石している。

#### (2) 縄文土器 (第93図)

A地区から前平式土器が、B地区から押型文土器と撚糸文土器が出土している。

ℓ-32出土の727は一つの山形の幅が1.1cm、高さが0.4cmの山形押型文土器である。

b-7出土の728とi-5出土の729は口縁部の外面にヘラ状施文具で2段に押升或は刺突し、その下位に貝殻条痕文を施した前平式土器である。土器密集区出土の730は口唇部に刻みを施している。

E地区出土の731は口縁部が斜め上方に伸び、内外面を横・斜日方向の粗い貝殻条痕を施している。口径20.0cm。

ℓ-31出土の732とj-30出土の733は2～3条の沈線の下位に撚糸文を施しており、塞ノ神式土器である。

### 第4節 縄文時代前期の遺構と遺物

この時期の確実な遺構は検出されていないが、E地区において曾煙式土器片が25点出土している。これらの殆どは、土器密集区包含層の北西よりの最下部において出土したものである。そのほか、試掘や表土除去の際に、二次堆積のアカホヤ層の中や表土の中からも出土している。このうち、口縁部から胴部下半まで接合できた734など数点を図化した(第93図734～737)。

734は、土器密集区包含層の最下部から出土した。ほかの土器片も、殆どこれと同一個体と思われる。ただ、735は、口縁部外面の2条の横向方向の沈線文の下にも短沈線文が施されている点、734とは別個体である可能性がある。736～737は、あまり曲面をなさないことやほかの土器片と文様が異なることから、ここでは底部として掲載した。これらの土器には、九州北部で通常みられる滑石は、全く含まれない。また、734のように口縁部と胴部では沈線文の太さや深さに違いが見られるなど、全体的に施文の粗雑さが目立っている。

## 第5節 繩文時代後期の遺構と遺物

後期の遺構はA～C地区の南側に竪穴住居がA地区で4軒、B地区で15軒、C地区で7軒の計26軒検出され、特にB地区では方形プランと円形プランが切りあっているのは注目される。A地区の北端部のa・b-6～9、c・d-8・9、e-9の土器密集区から同時期の土器が多量に出土し、南東部ではピット群と土坑群が検出された。土器密集区の北側斜面のE地区からは27基の集石遺構が検出されている。縄文後期の土器群としては指宿式・松山式・市来式・小池原上層式・鐘崎式・草野式などが、石器としては磨製石斧・石錐・打製石錐・石皿・絆石製石製品・石刀などが出土している。遺構出土の土器分類は後述する(5)縄文土器の分類による。

### (1) 竪穴住居

竪穴住居は、A地区的j-4～7に4軒、B地区的l～q-30～32に17軒、C地区的i～l-14～21に8軒分布しており、南部は削平されているが、3グループに分かれ、ドーナツ状に分布していた可能性もある。C地区がすべて円形プランであるのに対してA地区とB地区は方形プランと円形プランが混在している。

#### A地区(第6図)

A地区の竪穴住居はj-4～7区に4軒分布しており、SA1は建て替えを行っている。住居群の南側は宅地で削平されている。

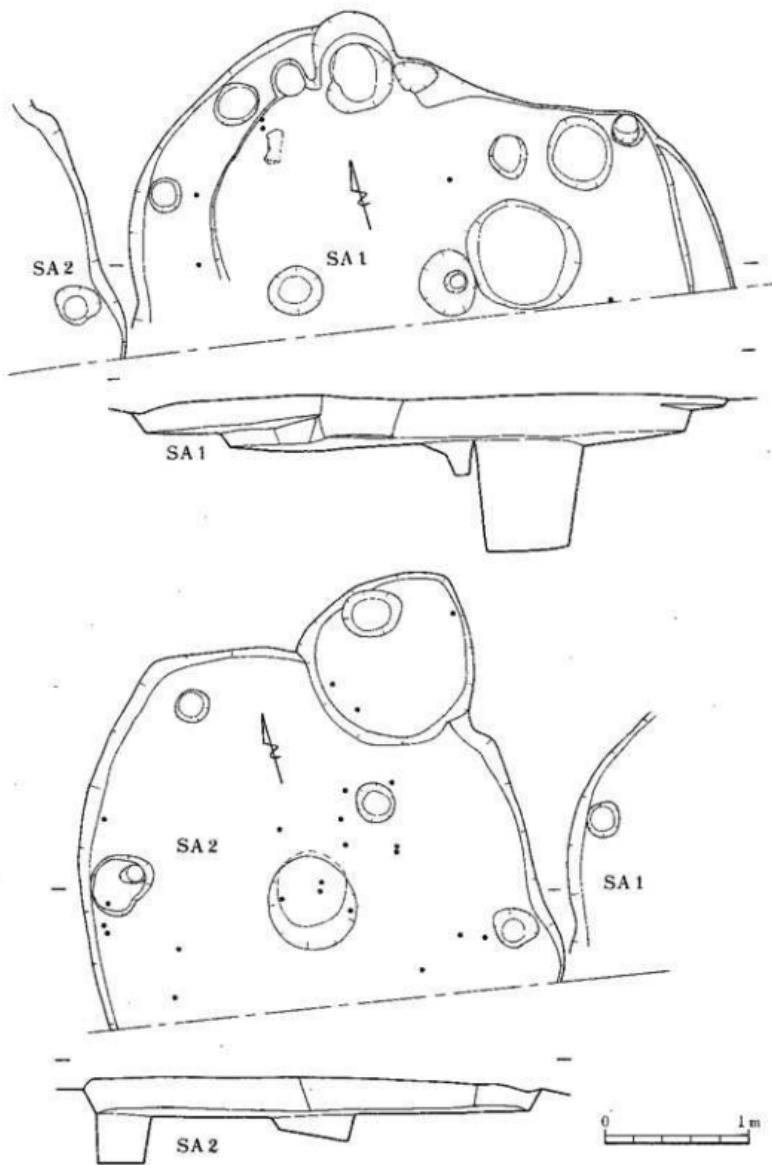
#### SA1(第7～10図)

SA1はj-4・5に位置し、南側が削平されている。この住居は七層断面によれば建て替えを行っている。焼土が西側の壁際にある。古段階の住居(SA1A)は長径330cm、短径185cm+α、深さ28cmの隅丸方形プランである。この住居の真ん中には長径45cm、短径40cm、深さ24cmのピットがあり、このピットを中心として西に115cm離れて、長径40cm、短径35cm、深さ24cmのピットがある。この住居は北部を長径70cm、短径55cm、深さ84cmの土坑が、真ん中のピットの東の際に長径80cm、短径70cm、深さ78cmの土坑が切っている。新段階の住居(SA1B)は長径415cm、短径210cm+α、深さ18cmの円形プランである。壁際に径25cm、深さ30cmのピットが3個巡る。SA1の埋土は2～5cmの大アカホヤブロックを含む暗褐色土層(Hue 7.5YR 3/3)である。

遺物の出土量は非常に少ない。2は波状口縁の波頂部に刻みを有し、平行沈線文を施しており、Vc類に相当する。4は口縁部がやや外反する平口縁のVc類である。6・7は口縁端部が肥厚し、口唇部に縄文と沈線を施しており、Na類に相当する。5は2本の沈線文間の幅が狭く、縄文帶の幅も狭く、Nb類に相当する。9・10は沈線文間に貝殻刺突文を施している。11は口縁部文様帶幅の比較的狭いもので、一条のD字形連続刺突文を施しており、M a類に相当する。13は口縁部に縦方向に貝殻刺突文を施しており、Mb類かVa類であ

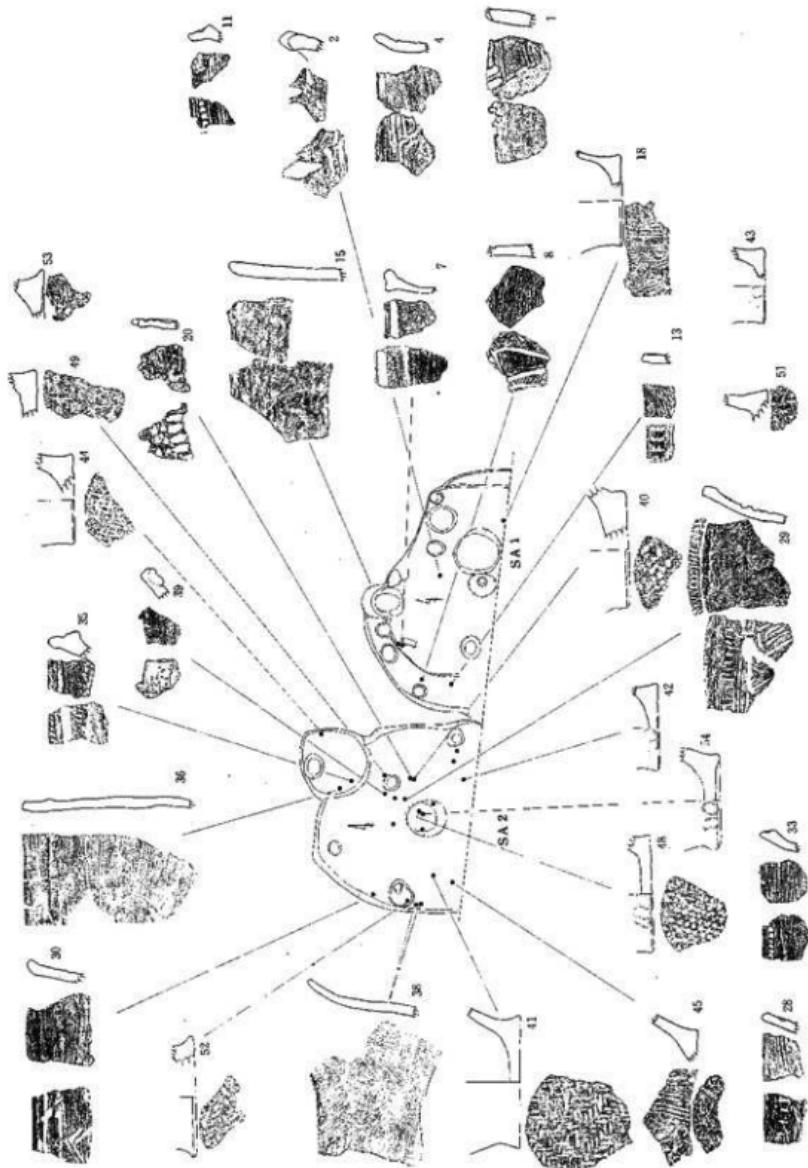
第6図 A地区漁場分布図





第7図 A地区 SA1・SA2実測図

第8圖 A地區 SA1・SA2遺物出土狀況圖



る。15は無文土器で、口縁部がほぼ真直に伸びており、内外面ともナデを施している。底部は3点出土しているが、網代底はない。底部の形態は18・19のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの2点、17のように底面から真直に立ち上がるるもの1点である。18は底径が8.4cmである。

土器片加工円盤は31.8gが1点出土している。

S A 1 A の時期は2のV c類の時期で、II b期である。磨消繩文のIK類もこれに伴う。S A 1 Bは11のVII a類の時期で、II a期である。

#### S A 2 (第7~11・14図)

S A 2はj-5・6に位置し、長径320cm、短径250cm+α、深さ21cmの隅丸方形プランである。南側が削平されている。この住居の真ん中には径60cm、深さ20cmのピットがあり、このピットを中心として東西に140cmと120cm離れて、径35cm、深さ50cmの2本のピットが壁際に配置されている。住居の埋土は2~5cmの大アカホヤブロックを含む暗褐色土層(Hue 7.5 YR 3/3)である。北東部は長径130cm、短径125cmの土坑に切られている。

遺物は住居の中央部と西端部に集中して出土している。20は口唇部に指で押えたような押正刻みを持ち、口縁部は竹管状工具による太めの連続刺突文、その下に一条の沈線を施しており、II a類に相当する。21は波状口縁の波頂部に5個の刻みを入れている。23は口唇部に斜め方向の刻みを入れている。29は口縁部が緩やかに外反し、口縁部上部に連続刺突文を、その下に沈線文を施と共に、口唇部にX字状の刻みを施しており、V b類に相当する。30は口唇部で若干外反し、沈線文だけを施しており、V c類に相当する。33は口縁部文様帶幅の比較的狭いもので、一条のD字形連続刺突文を施しており、VII a類に相当する。39は口縁部外面にこぶ状の突起があり、外面全面に刺突文を施している。38は無文土器で口縁部が途中で緩やかに外反している。13点の底部のうち10点が網代底である。底部の形態は41のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているものが8点、45のように底面から真直に立ち上がるものが4点、54のように明瞭な上げ底が1点である。底径は6.8cmが1点、7.9cmが1点、8.6cmが1点、10.7~10.9cmが3点、12.2cmが1点である。

土器片加工円盤は6.0~39.8gが22点出土している。

石器としては磨石2点(81・82)が出土している。

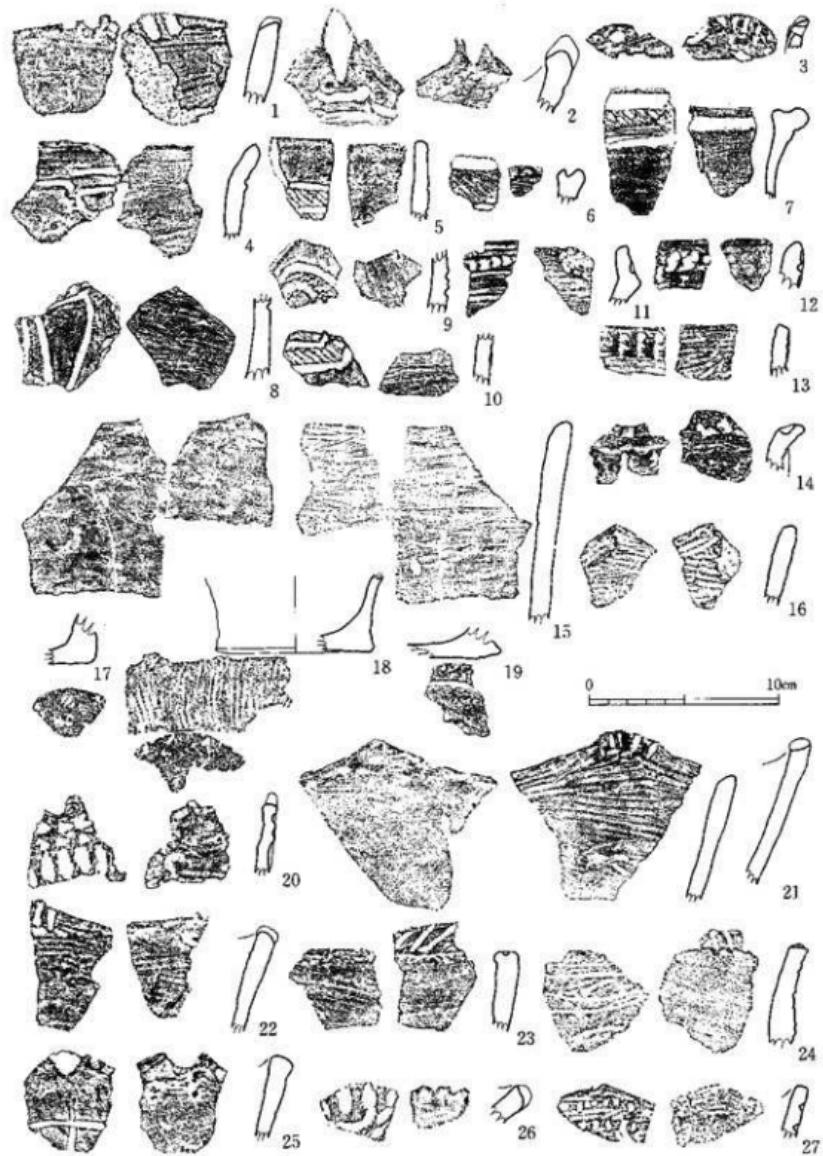
この住居を切っている土坑からは35・36・44が出土している。35は口縁部の断面が三角形で、一条の沈線の上下にヘラと貝殻腹縁による刺突文を施しており、VII b類に相当する。36は無文の「く」字状口縁部で内外面とも貝殻条痕を施し、VII b類である。44は底径8.3cmの網代底である。

S A 2の時期は29のV b類の時期で、II a期である。土坑の時期は35のVII b類の時期で、II a期である。

0 1m

第9図 A地区 SA1~SA3 土層断面図

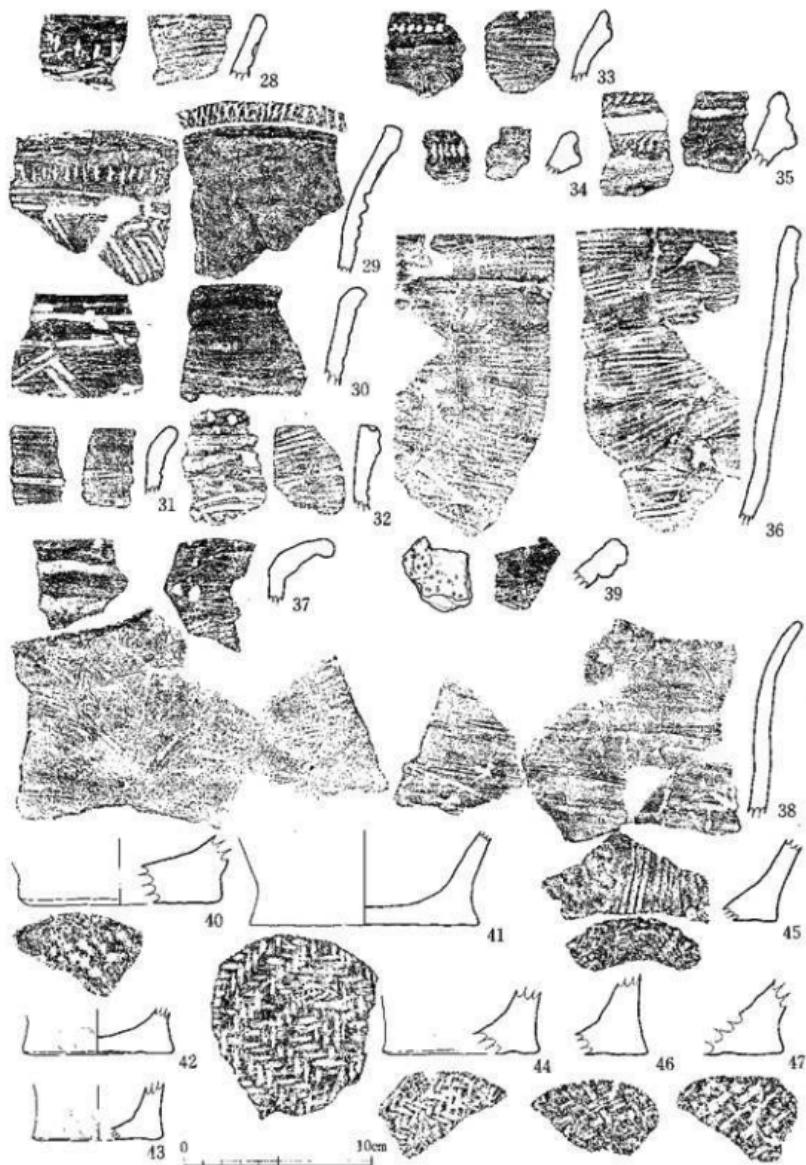
- I. 黒色土 (7.5YR 2/1) 耕土・砂粒を多く含み、砂質。上部細片を含む。
- II. 黑褐色土 (7.5YR 3/1) III層への漸移層・シルト質で少量の砂粒を含む。
- III. 咸褐色土 (7.5YR 3/3) 遺物包含層・シルト質で少量の褐色土粒を含む。  
(アカホヤか?) 壤石質の粒を含む。
- IV. 咸褐色土 (7.5YR 3/3) アカホヤプロック (2~3cmから5cm大) を含む。



第10図 捕文土器実測図 (1)

1~19 A地区 SA 1

20~27 A地区 SA 2



第11図 縄文土器実測図 (2)

28~47 A地区 SA2

### S A 3 (第9・12~17図)

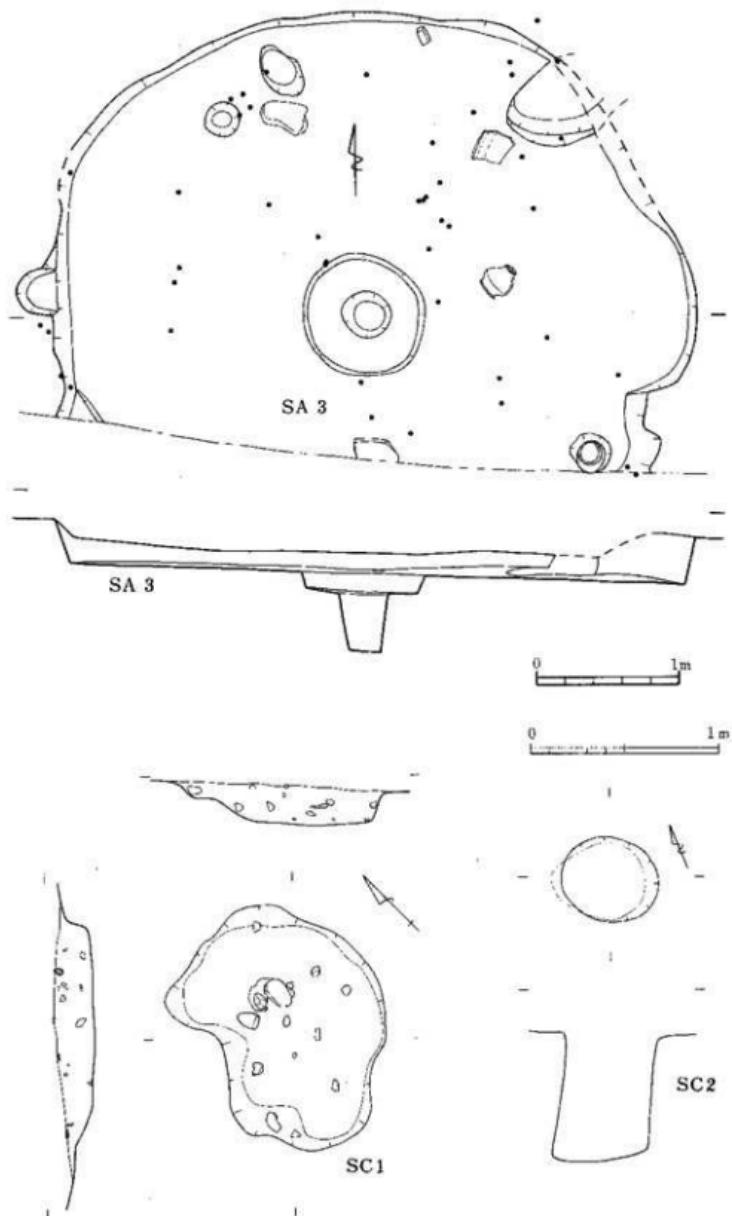
S A 3 は i · j - 6 · 7 に位置し、長径455cm、短径320cm + α、深さ33cmの凹形プランである。南側は削平されている。住居の真ん中に二段掘りのピットがあり、一段目が径85cm、深さ11cm、二段目が径35cm、深さ41cmである。真ん中のピットから南東へ180cm 離れて径25cm、深さ31cmのピットが、北西へ175cm 離れて径25cm、深さ45cmのピットが壁際に配置されている。住居の埋土は2~5cm大のアカホヤブロックを含む暗褐色土層 (Hue 7.5 Y R 3/3) である。北東部の壁際を径60cm、深さ46cmのピットで切られており、埋土には焼土を含んでいる。北西部には長さ30cm、幅20cmの台石が出土している。

遺物は全体的に出土している。57は波頂部に刻みを有する波状口縁がやや外反し、沈線文と平行沈線文を施しており、V c 類に相当する。61は57とは異り平口縁部で平行沈線文を施しており、V c 類に相当する。63は沈線文間に小さい連続刺突文を施した擬似繩文で、V a 類に相当する。66は比較的に狭い口縁部文様帶にD字形の連続刺突文を施しており、V a 類に相当する。このタイプの破片が多く出土している。82は住居の中央ピットの東側で横位の状態ではほぼ完形で出土した脚台付深鉢である。比較的に狭い口縁部文様帶に二段の凹形刺突文を、脚台の脚端部外面に一段の凹形刺突文を施している。胸部上半部は横方向の貝殻条痕を、同下半部には縦方向の貝殻条痕を、底部はナデを施している。胸部上半部には煤が付着している。口径15.5cm、頸部径14.4cm、胸部径15.9cm、底径7.4cm、器高18.0cmであり、V a 類に相当する。83は口唇部をわずかに拡張させたような、比較的幅の狭い口縁部文様帶に円形の連続刺突文を施しており、V a 類に相当する。84は口縁部文様帶がやや広くなり、沈線の上下にD字形の連続刺突文を施しており、V b 類に相当する。92は口縁部断面が顕著な「く」字形を呈し、口縁部下に貝殻腹縁による刺突文を一条施しており、V c 類に相当する。95は波状口縁の波頂部に沈線を、2条の沈線間に刺突文を施している。105は口縁端部が肥厚し、口唇部に一条の沈線を施している。106は口縁部内面上部及び外面口唇部に列点文と貝殻刺突文を施した内面施文土器でV b 類に相当する。64は沈線文間の幅が狭く、繩文帯も幅が狭く、X b 類に相当する。無文土器には口縁部が大きく外反する116とは直に伸びる117がある。14点の底部のうち網代底は8点である。底部の形態は118·122のように底面から直立に立ち上がるものがほとんどであり、131のみが底面が外へ張り出してその上部が若干くびれている。内外面とも貝殻条痕とナデを施している。122の底面には白色物の付着が見られる。底径は7.4cmと7.9cmが各1点、8.7cmと9.0cmが各1点、10.0~10.4cmが5点、12.6cmが2点である。

土器片加工円盤は6.2~39.8gが17点出土している。

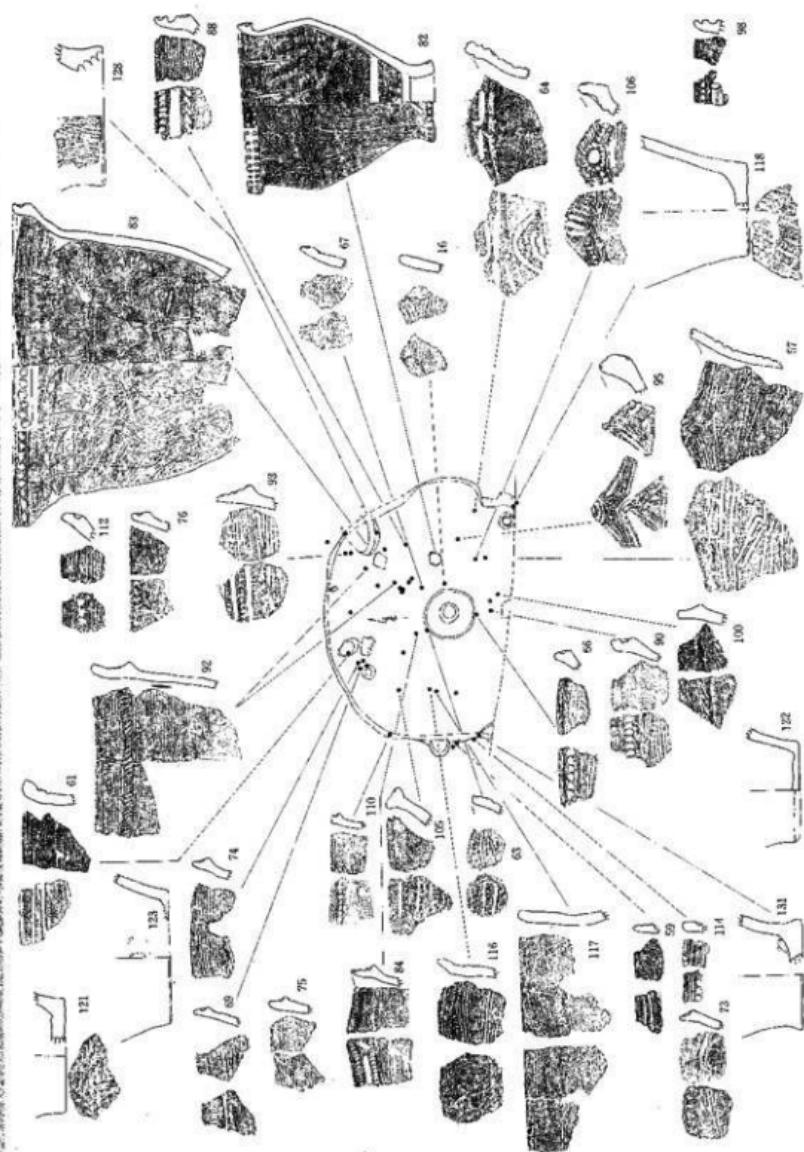
石器としては北部の壁際で磨製石斧1点(139)が出土している。

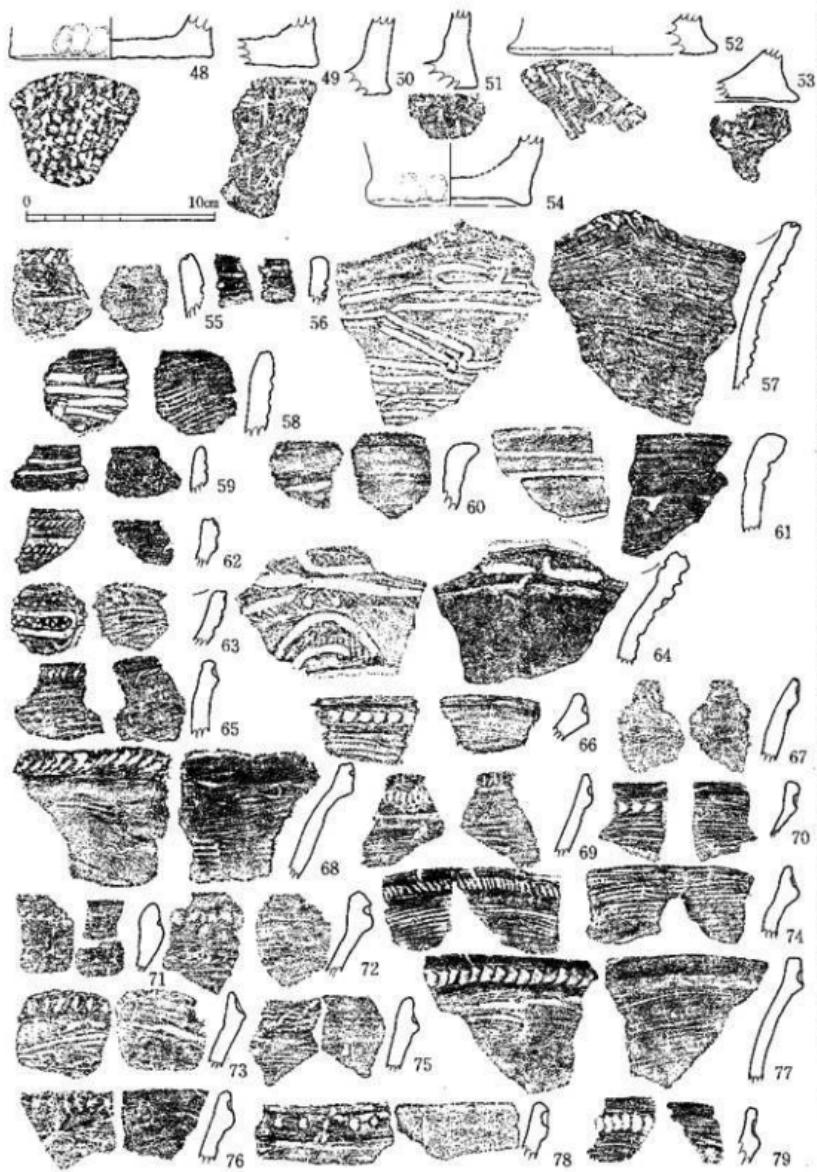
S A 3 の時期は83のV a 類の時期で、II a 期である。



第12図 A地区 SA3・SC1・SC2 実測図

第13图 A地区 SA3 遗址出土状况图



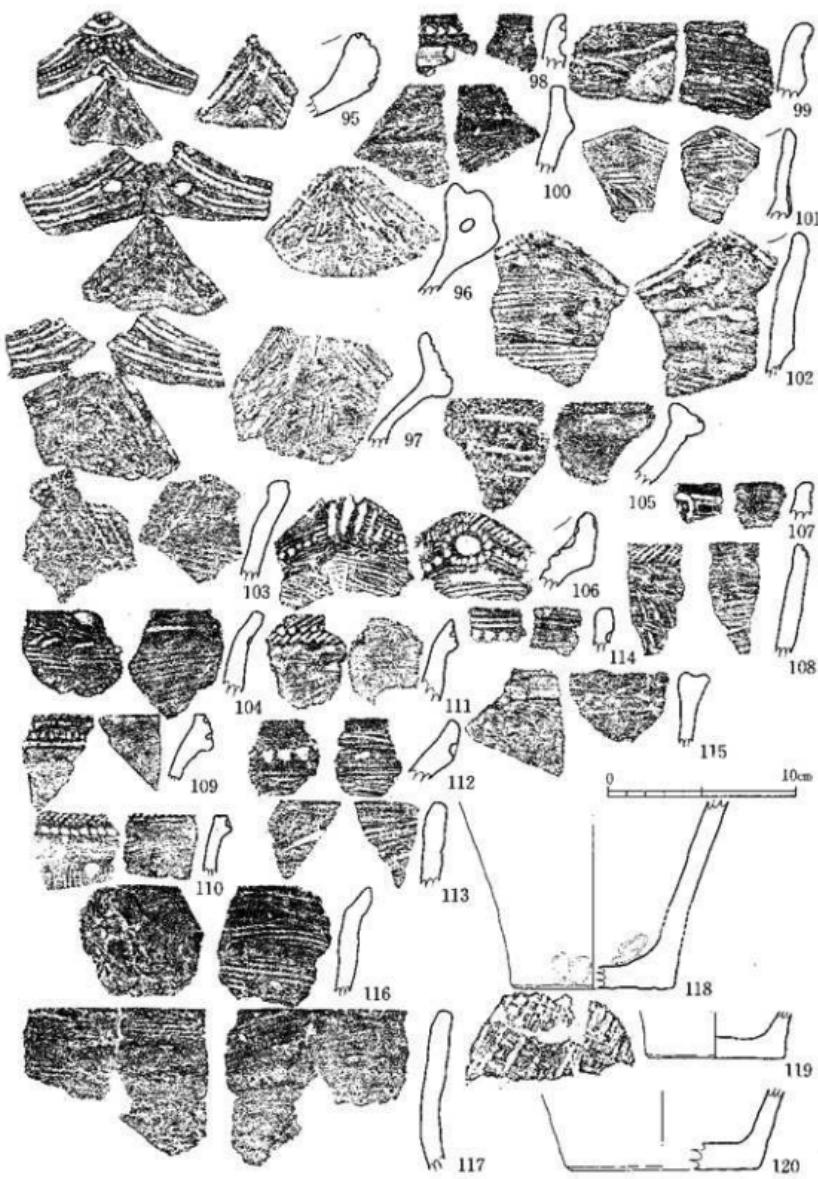


第14図 繪文土器実測図（3） 48~54 A地区 SA2 55~79 A地区 SA3



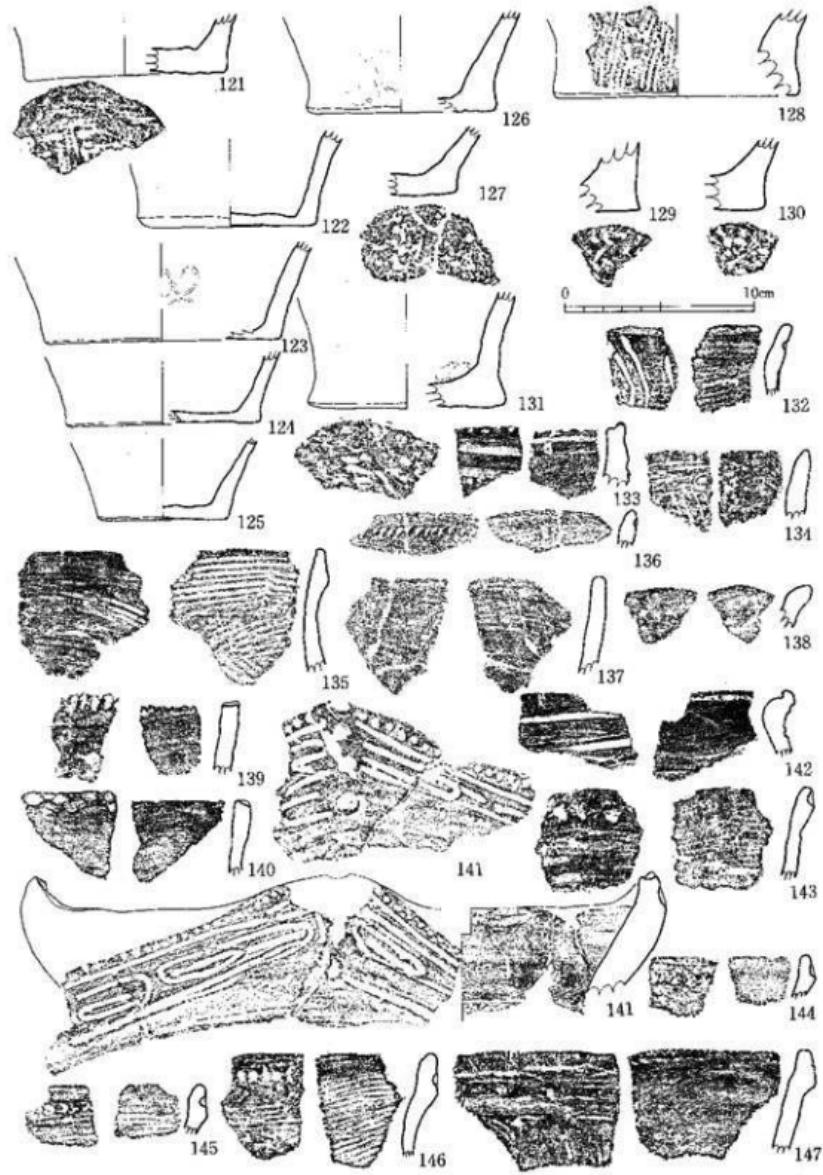
第15図 縄文土器実測図（4）

80~94 A地区 SA 3



第16図 繩文土器実測図（5）

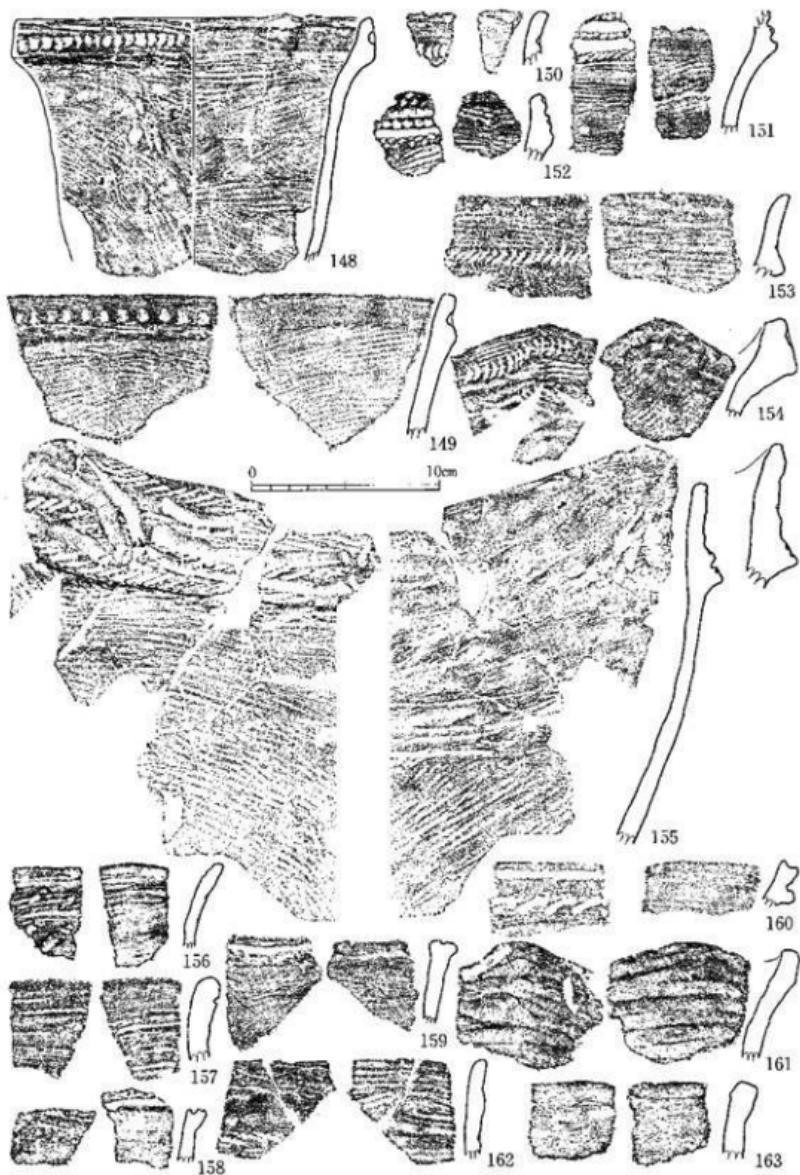
95~120 A地区 SA 3



第17図 縄文土器実測図 (6)

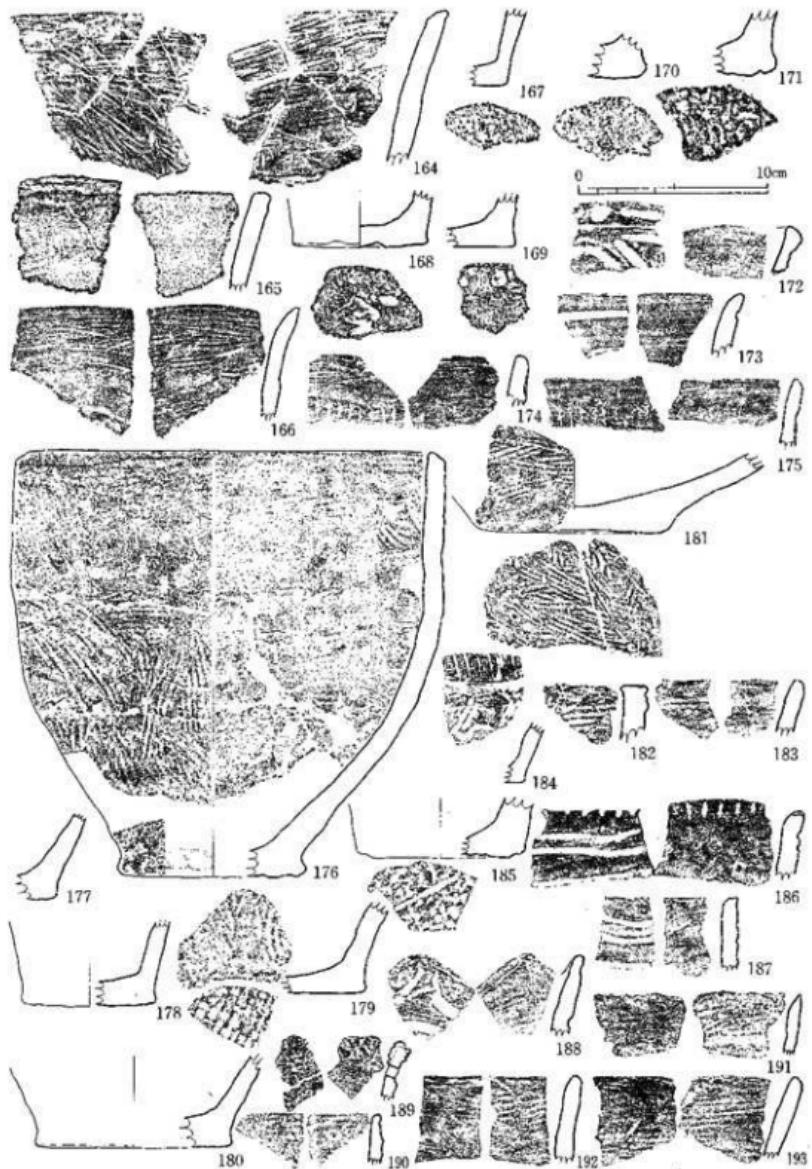
121~131 A地区 SA3  
139~147 A地区 SC4

132~138 A地区 SC2



第18図 縄文土器実測図 (7)

148~163 A地区 SC 4

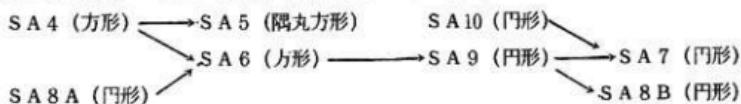


第19図 繩文土器実測図 (8)

164~171 A地区 SC 4  
172~181 A地区 SC 18  
182~185 A地区 SC 19  
186~193 A地区 SC 17

## B地区（第20・21図）

B地区のi～q-30～32に17軒の住居が分布しており、方形プランと円形プランが切り合っている。SA2・SA3・SA7・SA8が建て替えを行っている。SA6の西に近接してSC1がある。B地区の切り合い関係は次のような。



## SA1（第22・24図）

SA1はq-30に位置し、長さ390cm、幅360cm、深さ25cmの不定形プランである。径30cm、深さ36cmのピットと径25cm、深さ15cmのピットが北西～南東方向に並んでいる。

197は口唇部に押圧刻みを有している。198は口唇部に押圧刻みを、口縁部に沈線文を施しており、Vc類に相当する。199は沈線文と刺突文を施しており、Wa類に相当する。201は沈線間に連続刺突文を施しており、Vd類に相当する。206は口唇部に貝殻腹縁による刻みを有している。207は口縁部文様帶下部の肥厚が強調されず、形骸化したような低い段の上下に貝殻腹縁による刺突文を施しており、VId類に相当する。208は棒状工具を縱方向に動かして浅い連続文を施している。209はほぼ真直に伸びる波状口縁の無文上器である。211は全面ナデを施した底径10.1cmの底部である。

石器としてはチャート製の凹基無茎鍬(195)が1点出土している。

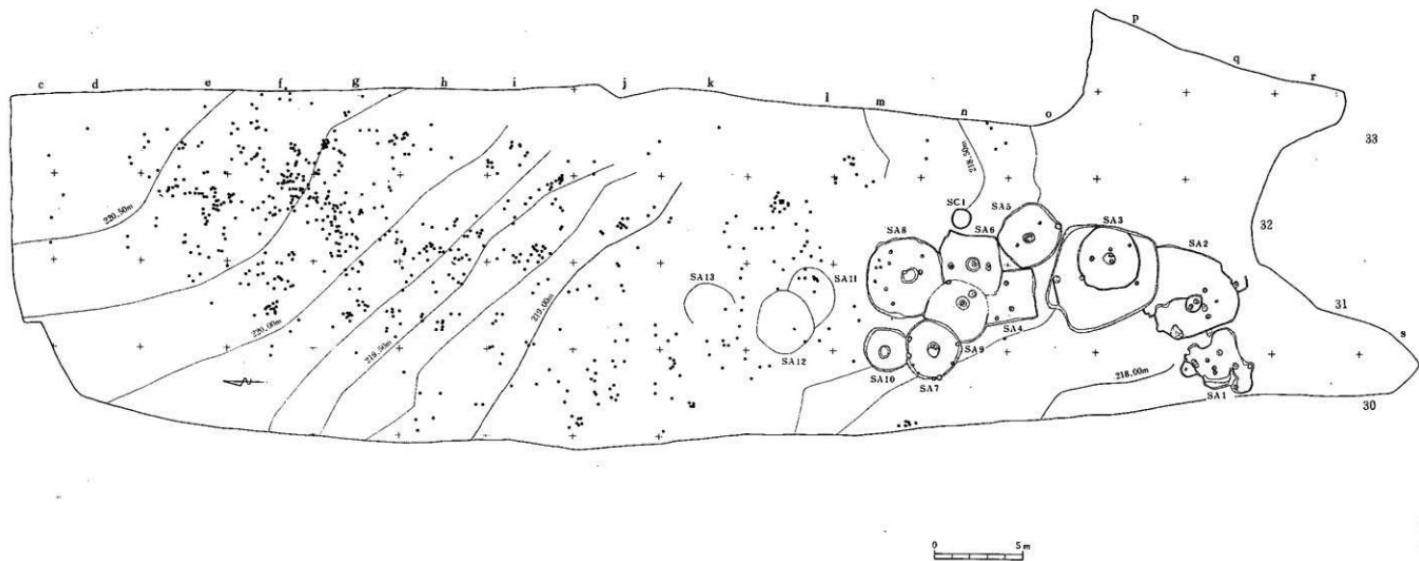
SA1の時期は207のVId類の時期で、IIb期である。

## SA2（第23・24図）

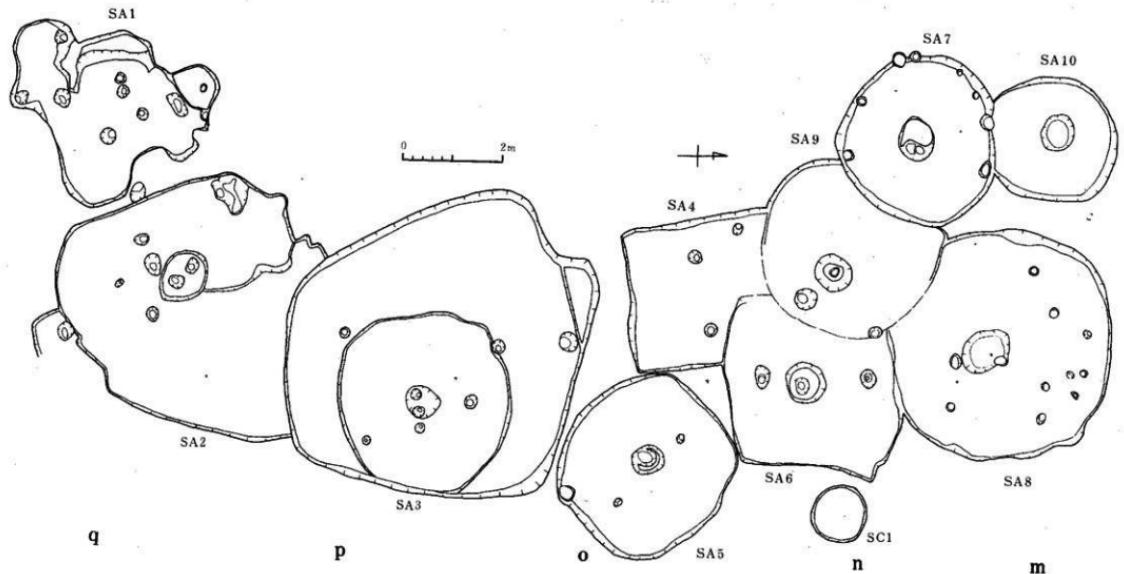
SA2はp・q-31に位置し、上層断面から判断すると1回の建て替えを行っている。古段階の住居(SA2A)は長さ475cm、幅340cm、深さ13cmの方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は長径115cm、短径90cm、深さ7cm、二段目に長径30cm、短径23cm、深さ17cmのピットと、長径30cm、短径23cm、深さ45cmのピットの2個がある。新段階の住居(SA2B)は長さ400cm、幅400cm、深さ9cmの方形プランである。

SA2Aの埋土はやや黄色を帯びる暗褐色土層(Hue 10YR 3/3)、SA2Bは白・黄色の細粒を含む暗褐色土層(Hue 7.5YR 3/3)である。SA3によって切られている。

遺物は西端部と中央部で出土している。213・214は2段に刺突文を施している。215は口唇部に一条の沈線と刻みを、竹管文・刺突文・沈線文を施している。216は口唇部に刻みを、口縁上部に連続刺突文を、その下に沈線文を施しており、Vb類に相当する。217は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、口縁部に沈線文を施しており、Vc類に相当する。220は口唇部に刻みを、口縁部に貝殻腹縁刺突文と沈線文を施している。221はヘラ状工具による沈線を斜方向に施しており、IId類に相当する。223は口縁部が肥厚し、口縁部文様帶幅の比



第20図 B地区 造構分布図

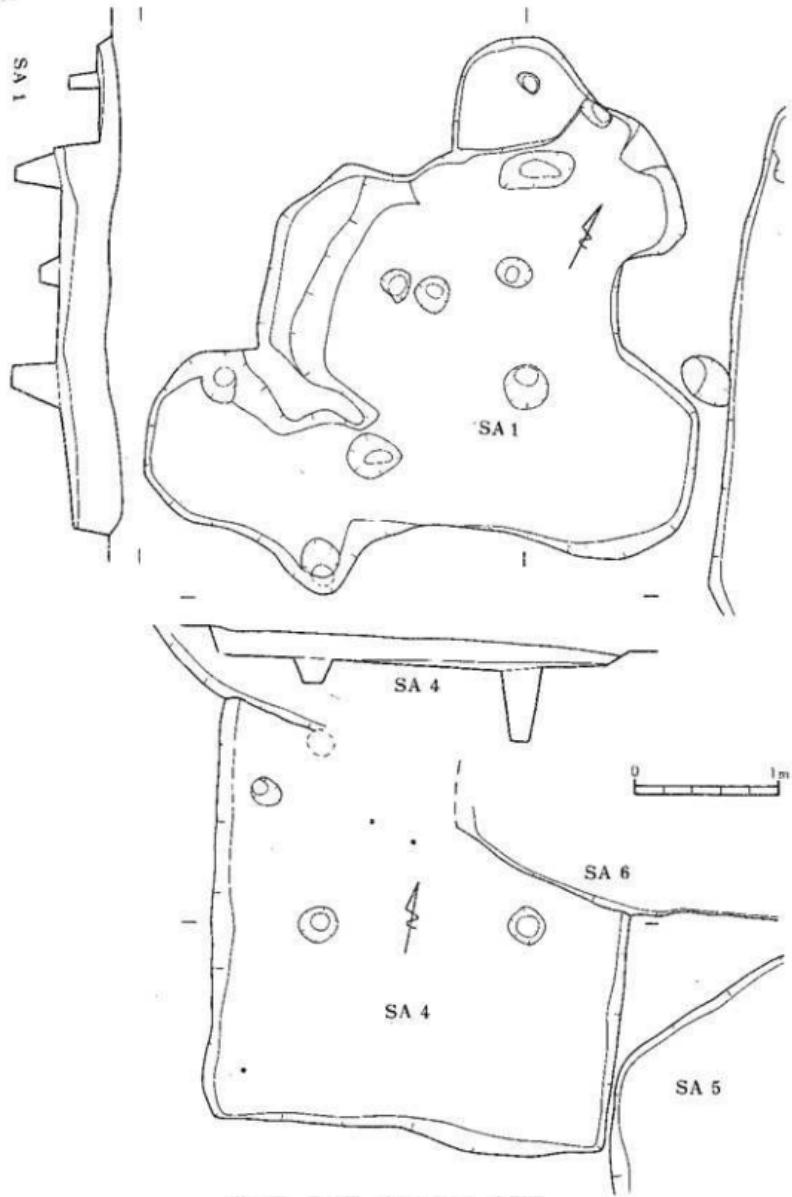


30

31

32

第21図 H地区 整穴住居分布図



第22図 B地区 SA1-SA4 実測図

較的狭いもので、一条のD字形連續刺突文を施しており、VII a類に相当する。224は波状口縁の波頂部で、口縁部が断面三角形に肥厚し、沈線の上下に連續刺突文を施しており、VII b類に相当する。3点の底部のうち1点が網代底である。底部の形態は226のように底面から真直に立ち上がるものが2点、底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの1点である。底径は9.0cmが2点、9.5cmが1点である。

土器片加工円盤は21.5gと21.9gが各1点出土している。

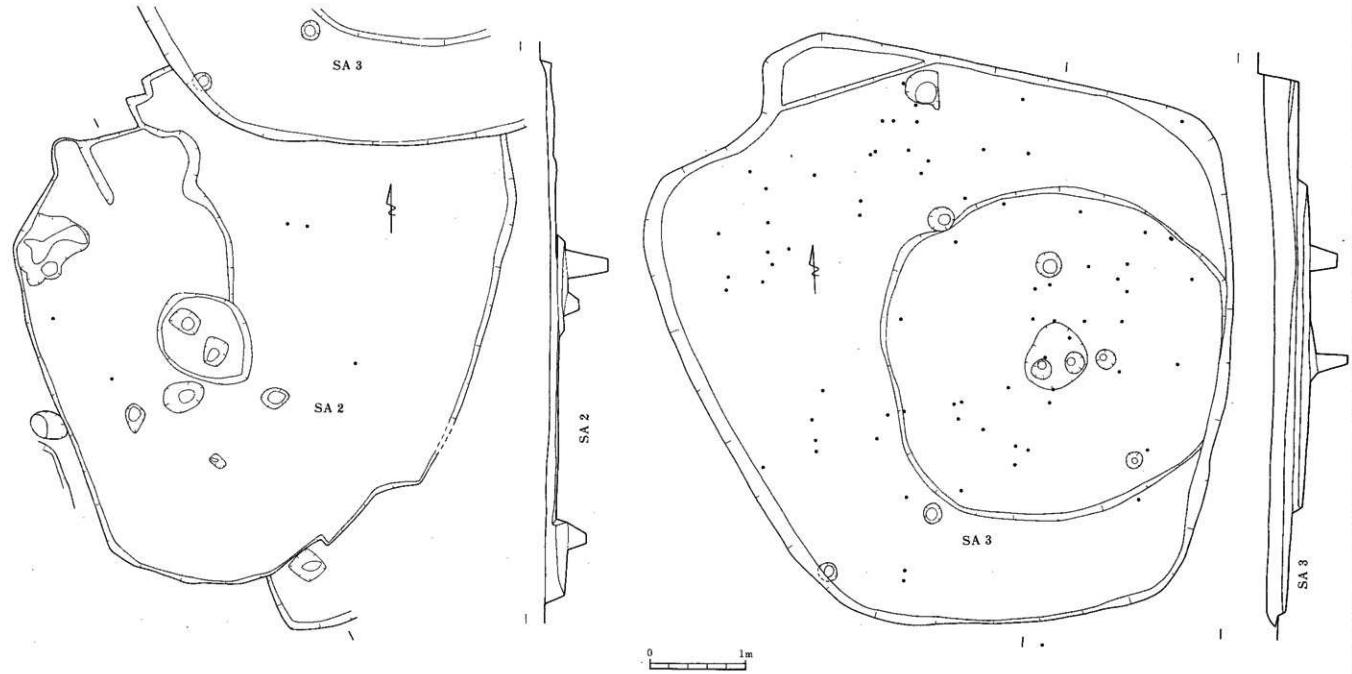
S A 2 Aの時期は216のV b類の時期で、II a期である。S A 2 Bの時期は223のVII a類の時期で、II a期である。

### S A 3 (第23・25~33図)

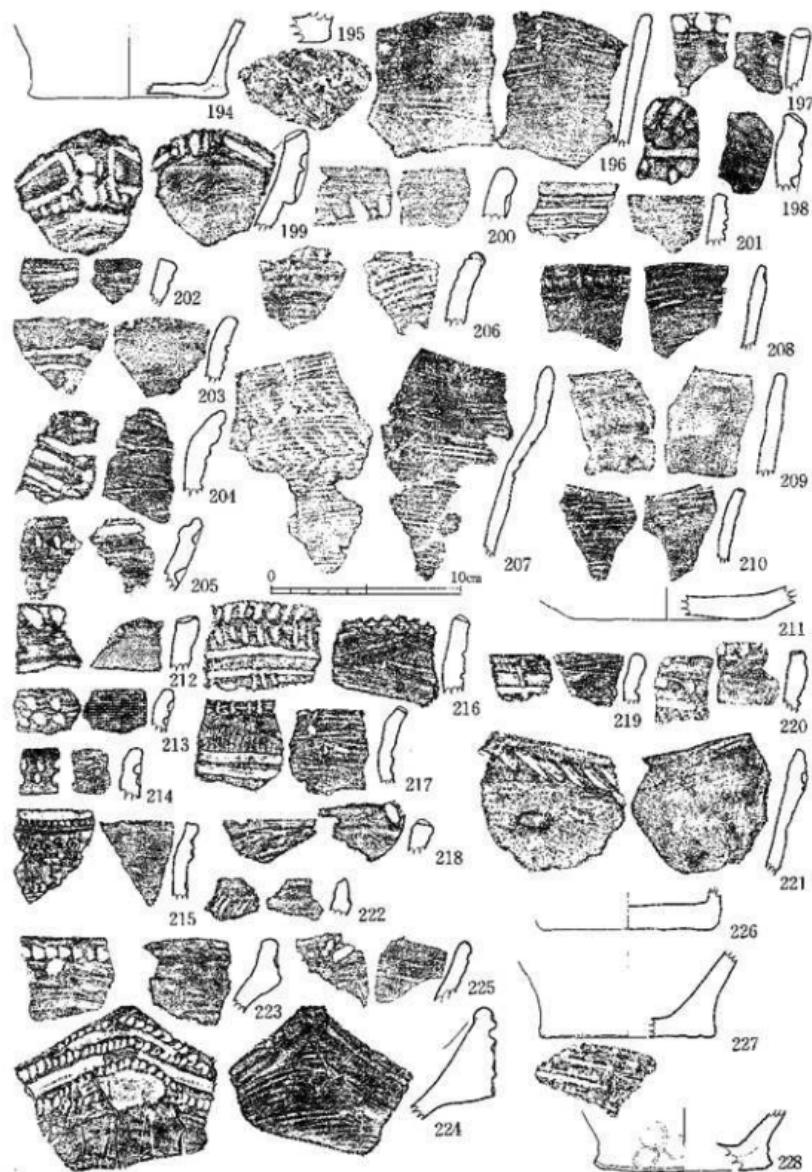
S A 3 はo・p-31・32に位置し、土層断面から判断すると2回の建て替えを行っている。古段階の住居(S A 3 A)は方形プラン、中段階の住居(S A 3 B)は方形プラン、新段階の住居(S A 3 C)は円形プランである。S A 3 Aは長さ480cm、幅350cm、深さ22cmの規模である。S A 3 Bは長さ570cm、幅485cm、深さ43cmの規模である。この住居の真ん中の径20cm、深さ38cmのピットを中心として北東に135cm離れて径36cm、深さ32cmのピットを、南西に195cm離れて径20cm、深さ27cmのピットを、北西に径25cm、深さ54cmのピットが配置されている。S A 3 Cは長径360cm、短径350cm、深さ43cmである。この住居の真ん中には径20cm、深さ27cmのピットがあり、このピットを中心として北に100cm離れて径27cm、深さ18cmのピットが、南東に125cm離れて径18cm、深さ8cmのピットが配置されている。埋土はS A 3 Aがアカホヤを多く含む褐色土層(Hue 10YR 4/4)、S A 3 Bがアカホヤをわずかに含む褐色土層(Hue 10YR 3/4)、S A 3 Cが暗褐色土層(Hue 10YR 3/3)である。

遺物は北西部・南西部・東部に集中して出土している。

北西部-229は内湾する口縁部に5条の沈線を施している。239・240は縱方向の貝殻腹縁刺突文の下位に2条の沈線を施しており、VII b類に相当する。260は平口縁がほぼ真直に伸び、口縁部に一条の列点文と沈線文を施しており、VII c類に相当する。口径21.5cm。261は3個の押圧刻みを有する波頂部が4ヶ所あり、口縁部が短く大きく外反し、頸部に2条の平行沈線を、その下位に平行沈線を単位とする文様を施している。口径は19.5cmで、VII c類に相当する。263は波頂部に4個の刻みを有し、口縁部に2条の平行沈線文を施しており、VII c類に相当する。268は口唇部に1条の沈線を、口縁部に沈線文を施しており、VII c類に相当する。274も口縁部が短く大きく外反するが、平口縁で、頸部に2条の平行沈線を、その下位に2条の平行沈線を単位として文様を施しており、VII c類に相当する。301は口唇部に刻みを、口縁部に縱方向の貝殻腹縁刺突文を施している。321は口縁部がほぼ真直に伸び、貝殻条痕を消さずに沈線文を施している。323は2条の細い沈線を施している。



第23図 B地区 SA2-SA3 実測図



第24図 繩文土器実測図 (9)

194~195 A地区 SC 17  
196~211 B地区 SA 1  
212~228 B地区 SA 2

南西部-234は波頂部に3個の刻みを有する。247は口唇部に刻みを、口縁部に貝殻腹縁刺突文を施している。284・285は磨消繩文土器の胸部片である。271は口縁部が短く外反し、2条平行沈線文を施しており、V c類に相当する。293は口唇部に1条の沈線を、口縁部に縦方向の貝殻腹縁刺突文を施しており、II a類に相当する。297は1条の沈線と刻みを施している。327は縦方向の貝殻腹縁刺突文の間に列点文を施している。

東部-230は口唇部に刻みを、口縁部に横方向の貝殻腹縁刺突文を施している。242は口唇部に刻みを、口縁部は2段の列点文の下位に沈線文を施している。256・258は口唇部に刻みを、口縁部に刺突文と沈線文を施しており、II a類に相当する。287・308・311はヘラによる刺突文を施しており、III b類に相当する。251は口唇部に刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、V c類に相当する。315は大きく外反する口縁部内面に3条の沈線と列点文と貝殻腹縁刺突文を施しており、III a類に相当する。314は上向きの口唇部に2条の沈線を施している。289は口唇部にヘラによる刺突文を施しており、VII a類に相当する。306は口縁部文様幅が最も広くなり、ヘラによる刺突文と3条の沈線と貝殻腹縁刺突文を施しており、VII c類に相当する。304・305は沈線だけを施しており、VII c類に相当する。312は口縁部が短く大きく外反し、頸部に1条の貝殻腹縁刺突文を施しており、VII b類に相当する。328は縦方向の貝殻腹縁刺突文の間に列点文を施している。341は口縁部がほぼ真直に伸びる無文土器で、口径14.8cmである。351は口縁部が緩やかに外反し、口唇部にいくほど肥厚し、口径29.2cmである。366は上げ底の底部で、底径は9.2cmである。

15点の底部のうち網代底は8点である。底部の形態は361のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているものが10点、357のように底面から真直に立ち上がるものが4点、上げ底は366の1点である。底径は6.5cmが1点、7.0~7.9cmが3点、8.6cmと8.8cmが各1点、9.2cmと9.4cmが各1点、10.0~10.8cmが4点である。

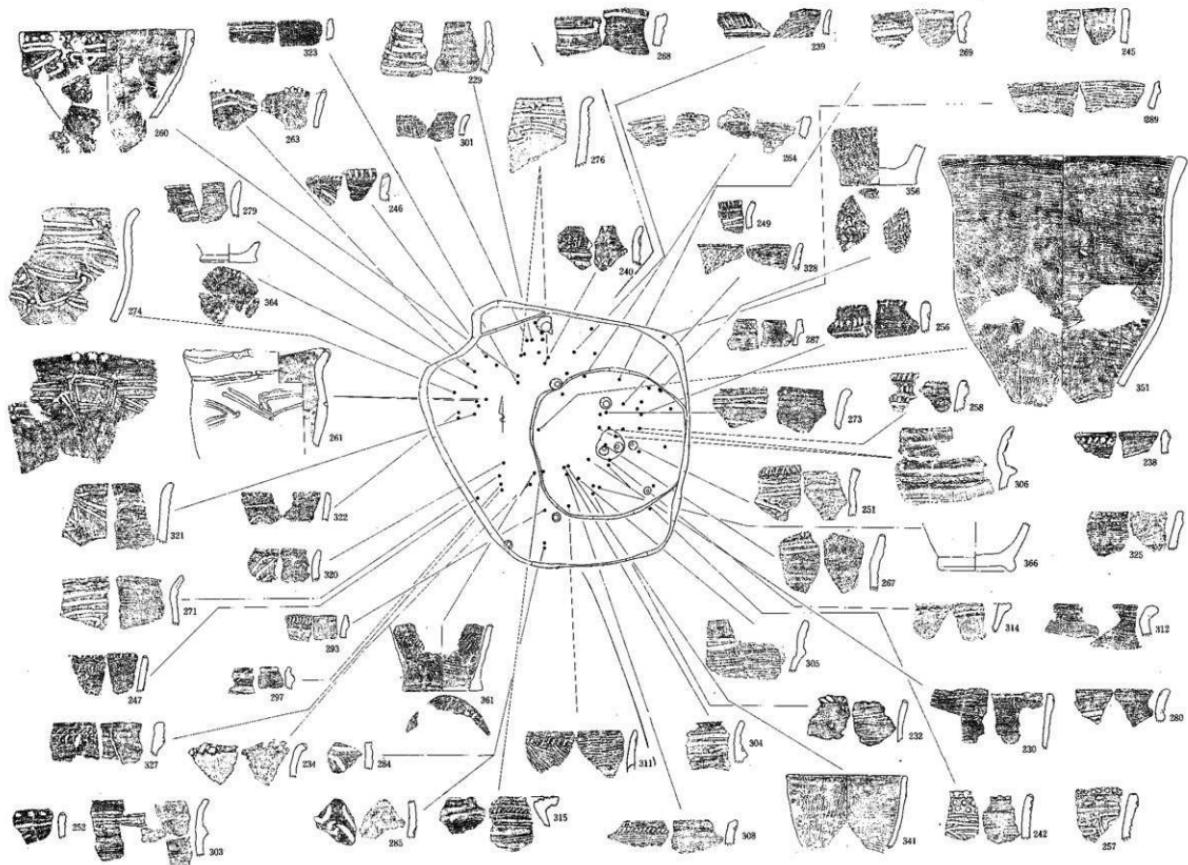
土器片加工円盤は9.8~34.0gが11点出土している。

石器としては磨石2点(117・118)、蔽石1点(136)、磨製石斧1点(160)、切目石鎌1点(183)が出土している。

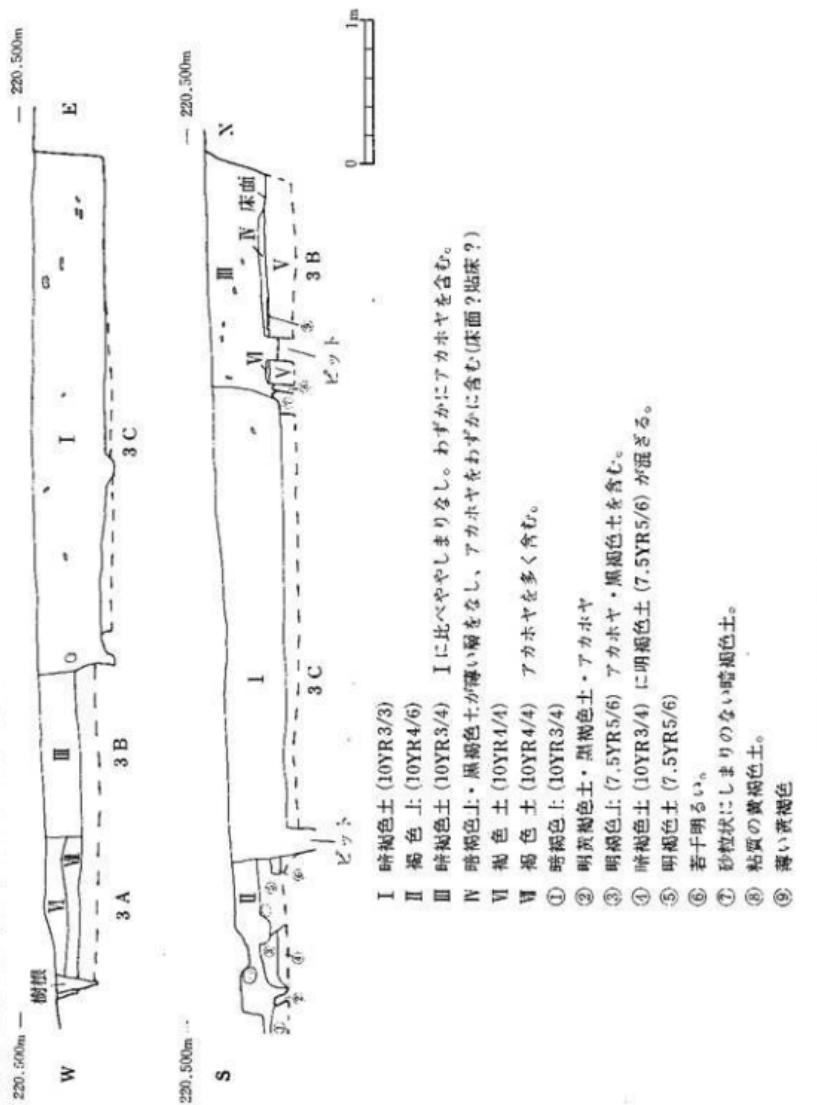
S A 3 Aの時期は240のII b類の時期で、I b期である。S A 3 Bの時期は251のV c類の時期、II b期である。S A 3 Cは306のVII c類の時期で、III b期である。

#### S A 4 (第22・32・33・36図)

S A 4はn・o-31に位置し、長さ300cm+α、幅290cm、深さ13cmの方形プランである。短軸の東西方向に長径27cm、短径24cm、深さ17cmのピットと長径27cm、短径24cm、深さ52cmのピットを配置している。2個のピットの間隔は145cmで、壁際から70cmである。この住居はS A 5とS A 6に切られている。住居の埋土はアカホヤのブロックを含む暗褐色土層(Hue 10YR 3/3)である。



第25図 H地区 SA 3 遺物出土状況図

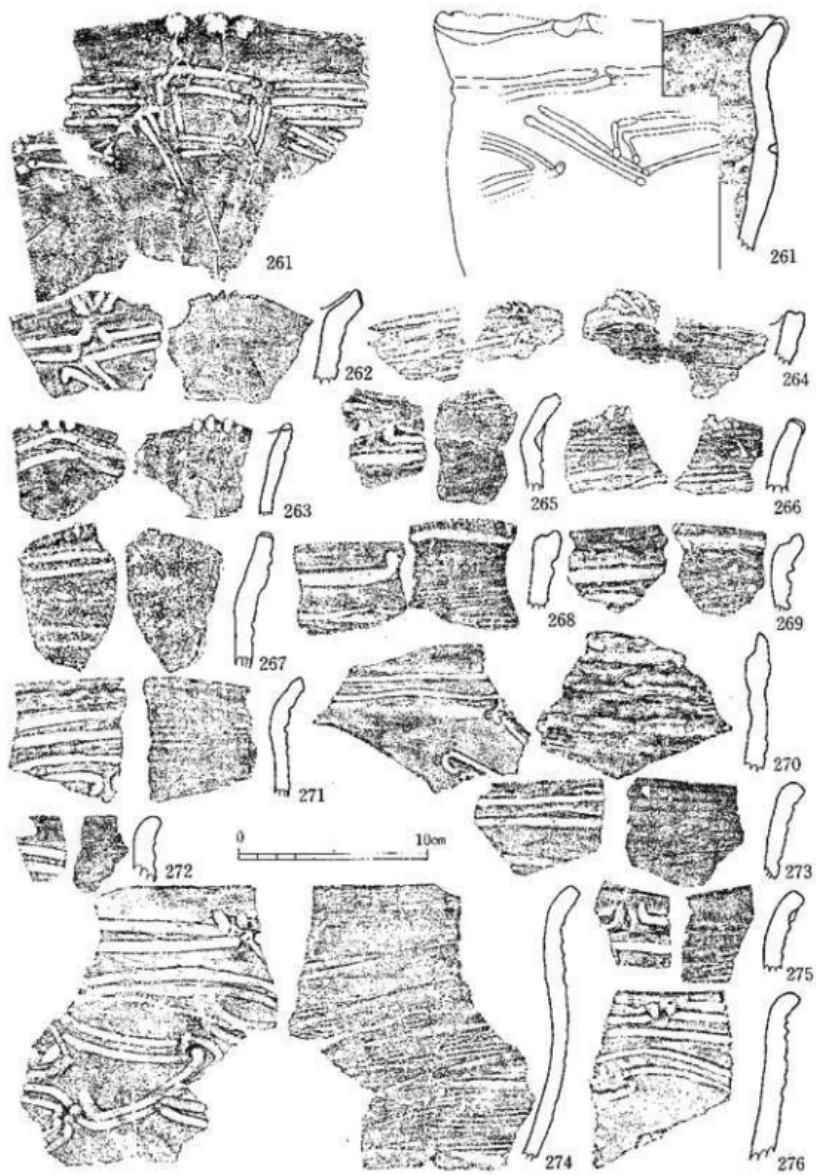


第26図 日地区 SA3 土壌断面図



第27図 繪文土器実測図 (10)

229~260 B地区 SA 3



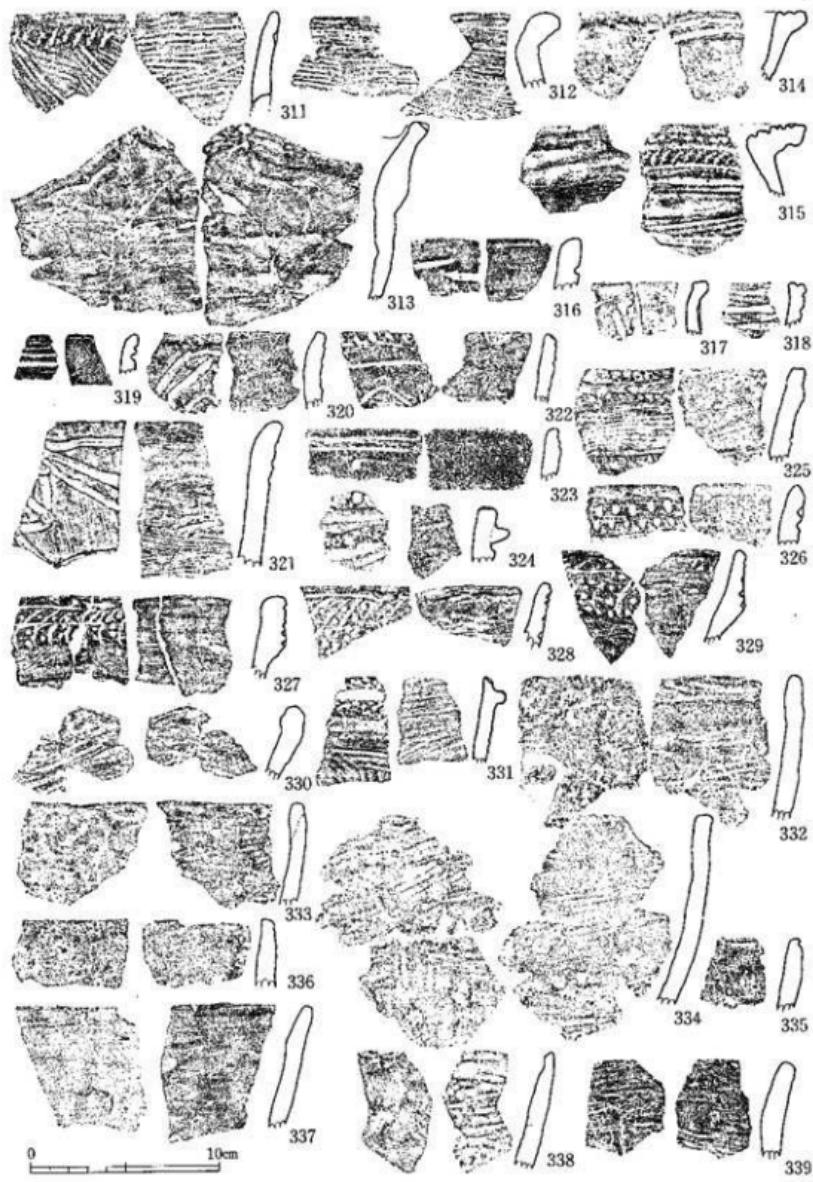
第28図 縄文土器実測図 (11)

261~276 日地区 SA 3



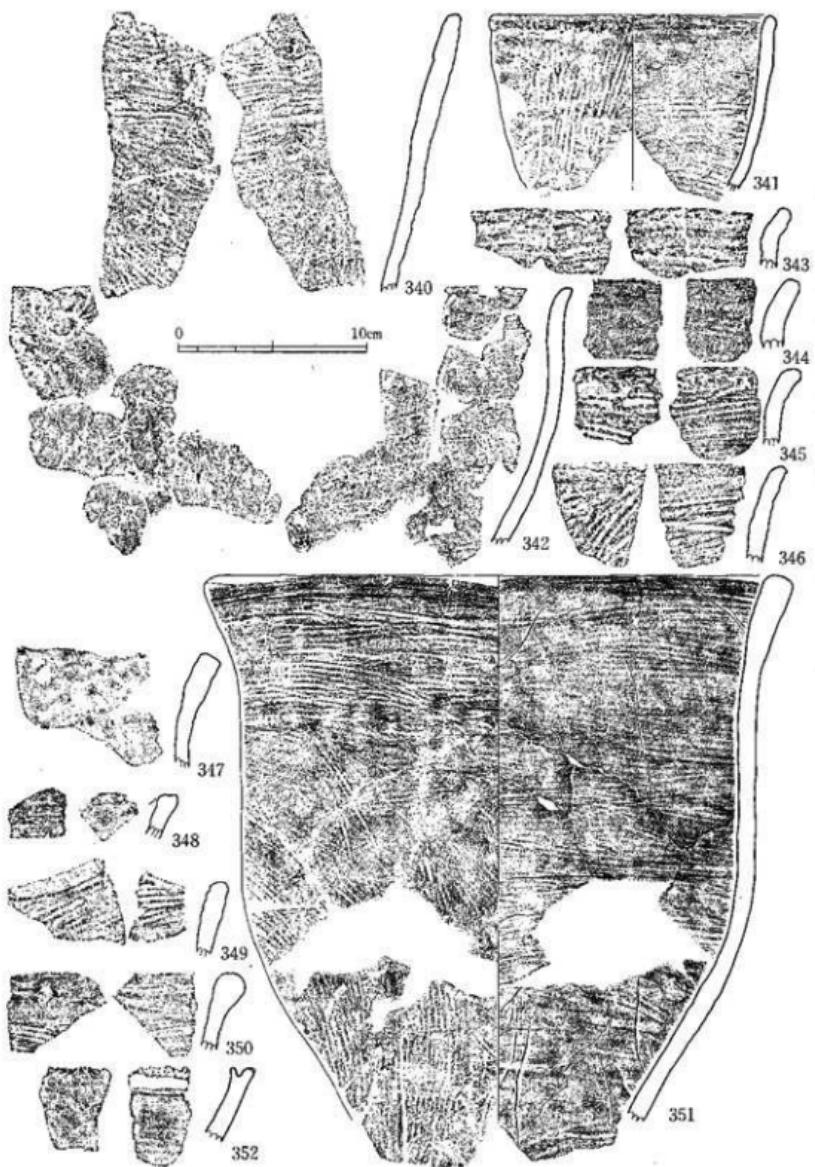
第29図 繩文土器実測図 (12)

277~310 B地区 SA 3



第30図 繩文土器実測図 (13)

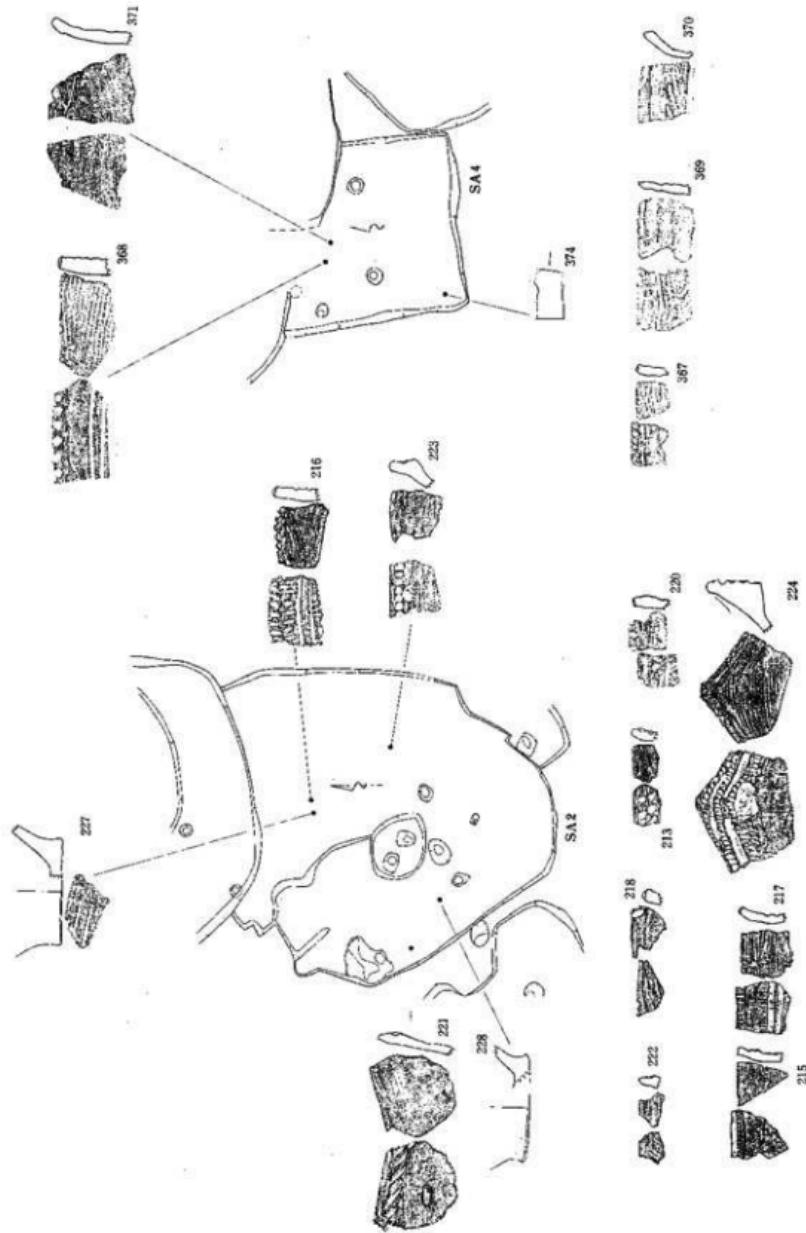
311~339 日地区 SA 3

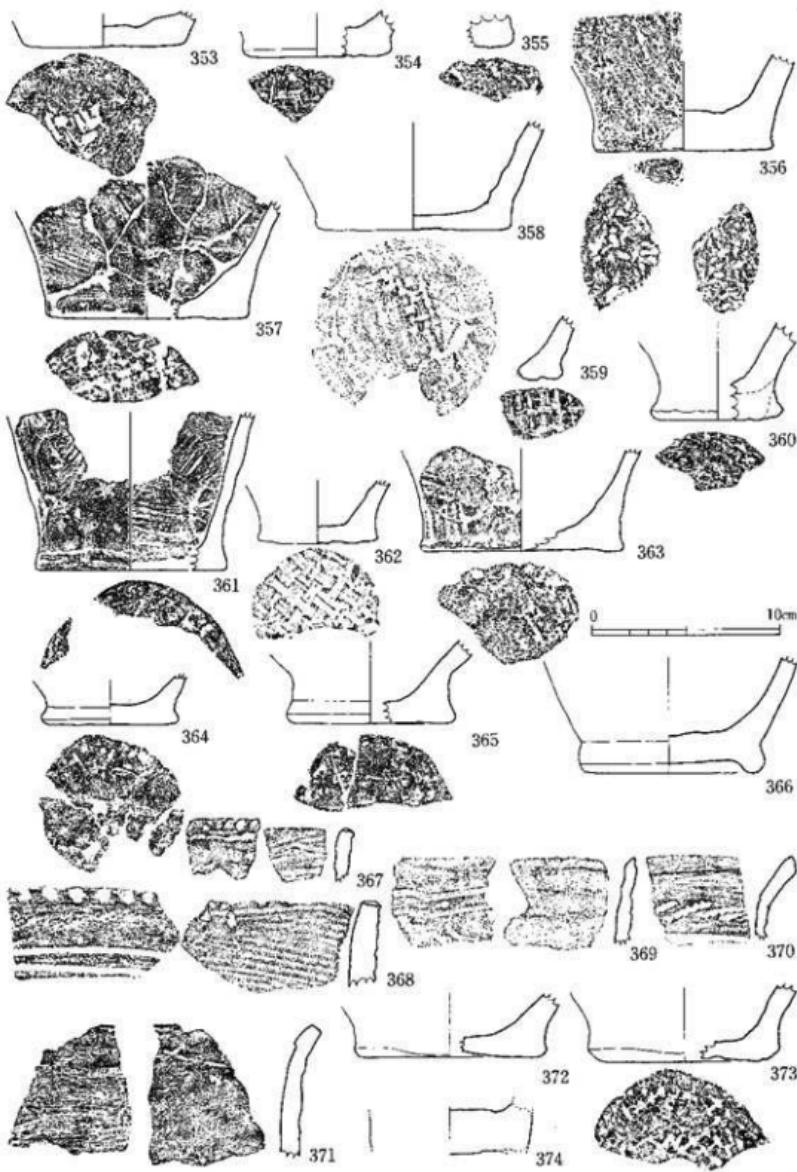


第31図 繩文土器実測図 (14)

340～352 B地区 SA 3

第32図 B地区 SA2・SA4遺物出土状況図





第33図 縄文土器実測図 (15)

353~366 B地区 SA 3

367~374 B地区 SA 4

遺物量は非常に少ない。368は口唇部に押圧刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、V c 類に相当する。369は沈線文を施しており、V c 類に相当する。370は大きく外反する口縁部に貝殻腹縁刺突文と沈線文を施しており、V b 類に相当する。371は口縁部がやや外反する無文土器である。374は脚台付皿の皿部と脚台の接合部である。2点の底部のうち網代底は1点である。底径は9.6cmと10.2cmである。

石器としては磨石1点(83)、姫島産黒耀石の円基錐1点(193)が出土している。SA 4の時期は遺物は出土していないが、切り合いからSA 5のI b 期より遡るI a 期である。

#### SA 5 (第34~40図)

SA 5はn-31・32に位置し、長さ380cm、幅340cm、深さ34cmの隅丸方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は長径62cm、短径55cm、深さ16cm、二段目は径40cm、深さ17cmである。中央のピットから北西に80cm離れて長径18cm、短径15cm、深さ39cmのピットを、南西105cm離れて長径22cm、短径14cm、深さ23cmのピットを配置している。2個のピットは壁際から80cmである。3個のピットは長軸方向の北西~南東方向に並んでいる。住居の埋土はアカホヤ粒があまり見られない暗褐色土層(Hue 10YR 3/4)である。

遺物は北部に集中して出土している。380は口唇部に刻みを、口縁部に2条平行沈線を施しており、II b 類に相当する。385は口縁部文様帯が厚く肥厚し、文様は刺突文と沈線文の組み合わせで、口縁部文様帯の間に無文帶を有し、IV a 類に相当する。383は波頂部に刻みを有する無文の波状口縁である。393は口縁上部に連続刺突文を、その下に偏平な楕円形の沈線文を、沈線文間に竹管文を施しており、V b 類に相当する。394は波状口縁の波頂部に刻みを、口縁部に2条平行沈線と曲線文を施しており、V c 類に相当する。392は口唇部が二股に分かれ、口唇部に刻みを、口縁部に平行沈線文を施しており、V類に相当する。395は口縁部が外反し、4条の平行沈線を施しており、V c 類に相当する。410は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、口縁部には2条の平行沈線の下に縦方向の多数の沈線文を施している。415は口縁部がほほ直真に伸びており、口径24.8cmの無文土器である。419は内湾する波状口縁の無文土器である。420は口縁部が斜め上方に伸び、口径22.6cmの無文土器である。9点の底部のうち網代底は5点、木の葉底が1点である。底径は10.3~10.8cmが3点である。

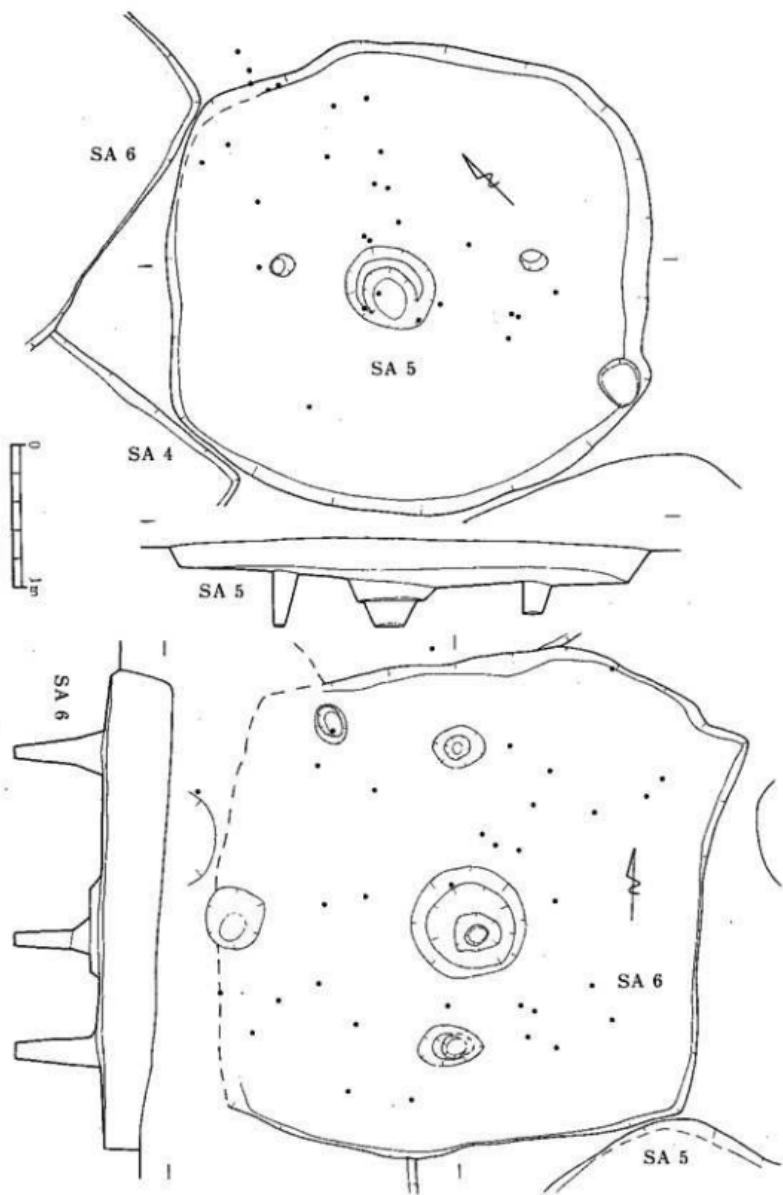
土器片加工円盤が1点(24.5g)出土している。

石器としては磨石1点(119)、磨製石斧1点(157)が出土している。

SA 5の時期は380のII b 類の時期であり、I b 期である。

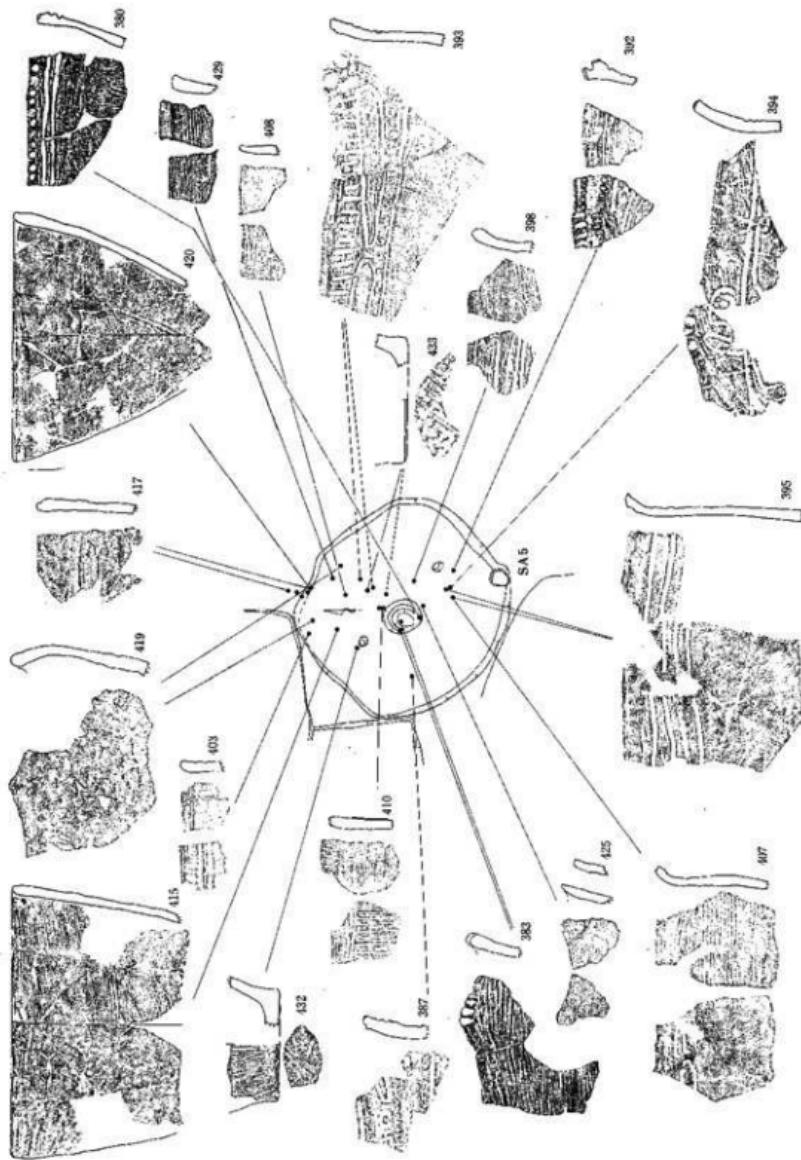
#### SA 6 (第34・36・40・44図)

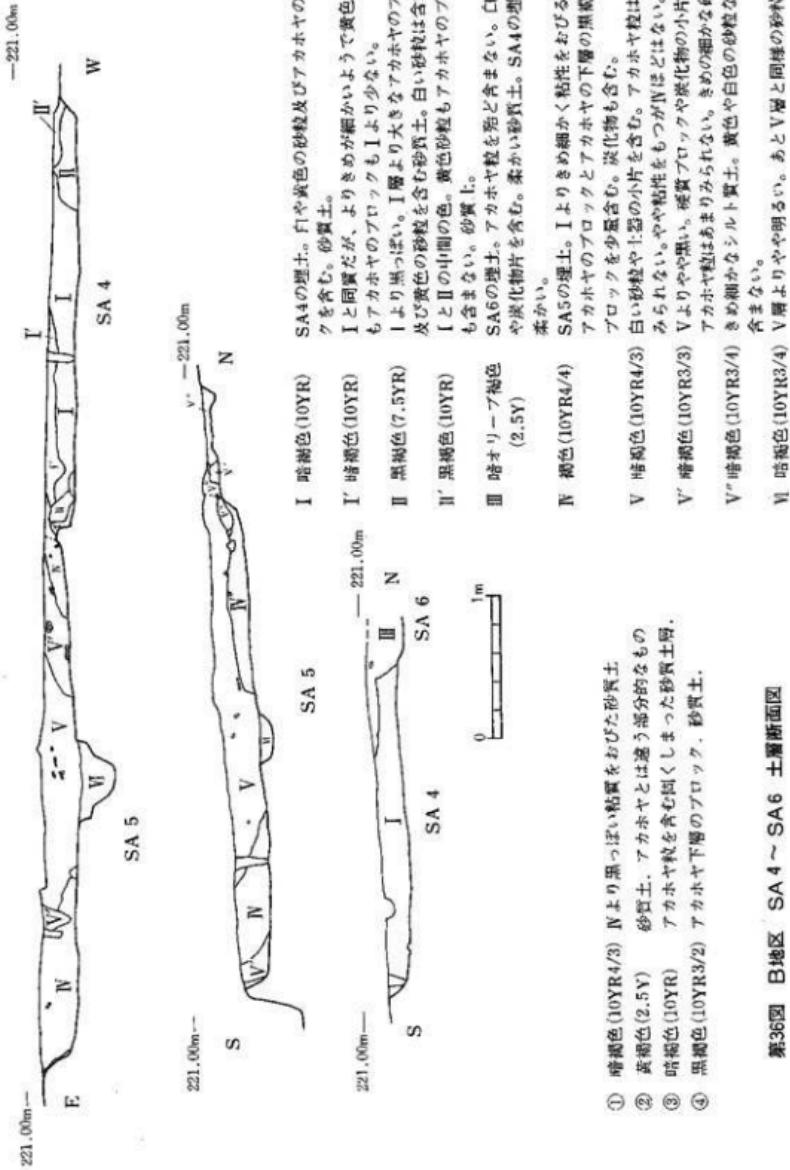
SA 6はn-31・32に位置し、長さ340cm、幅340cm、深さ46cmの正方形プランである。この住居の真ん中には二段掘りのピットがあり、一段目は径80cm、深さ9cm、二段目は長径33



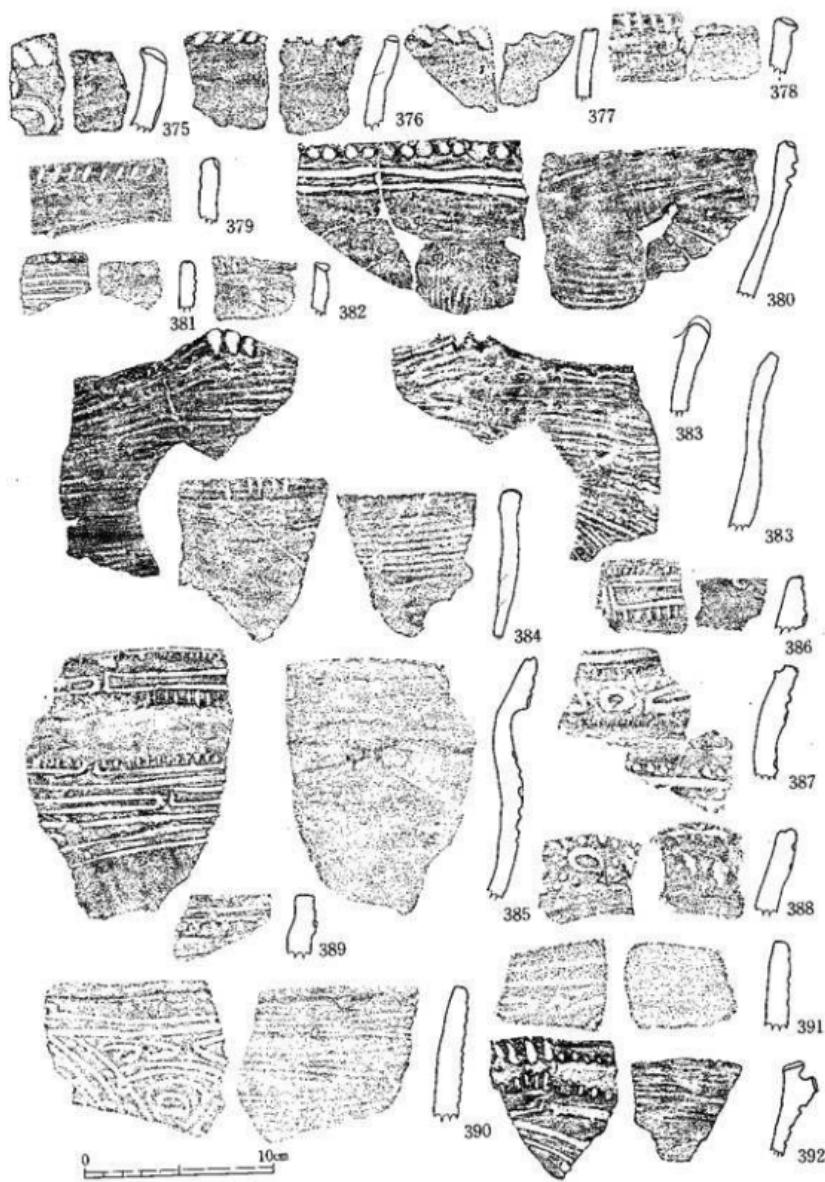
第34図 B地区 SA5-SA6 実測図

第35圖 B地區 SA5 遺物出土狀況圖



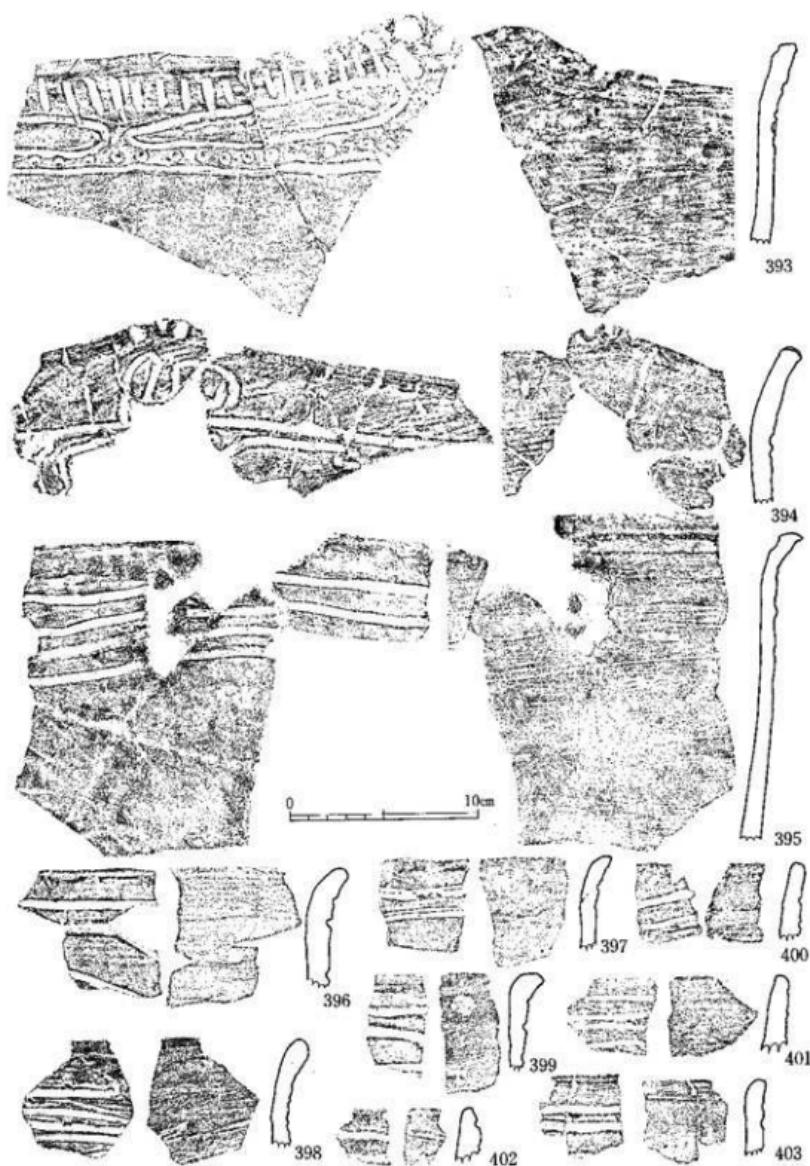


第36図 B地区 SA4～SA6 土層断面図



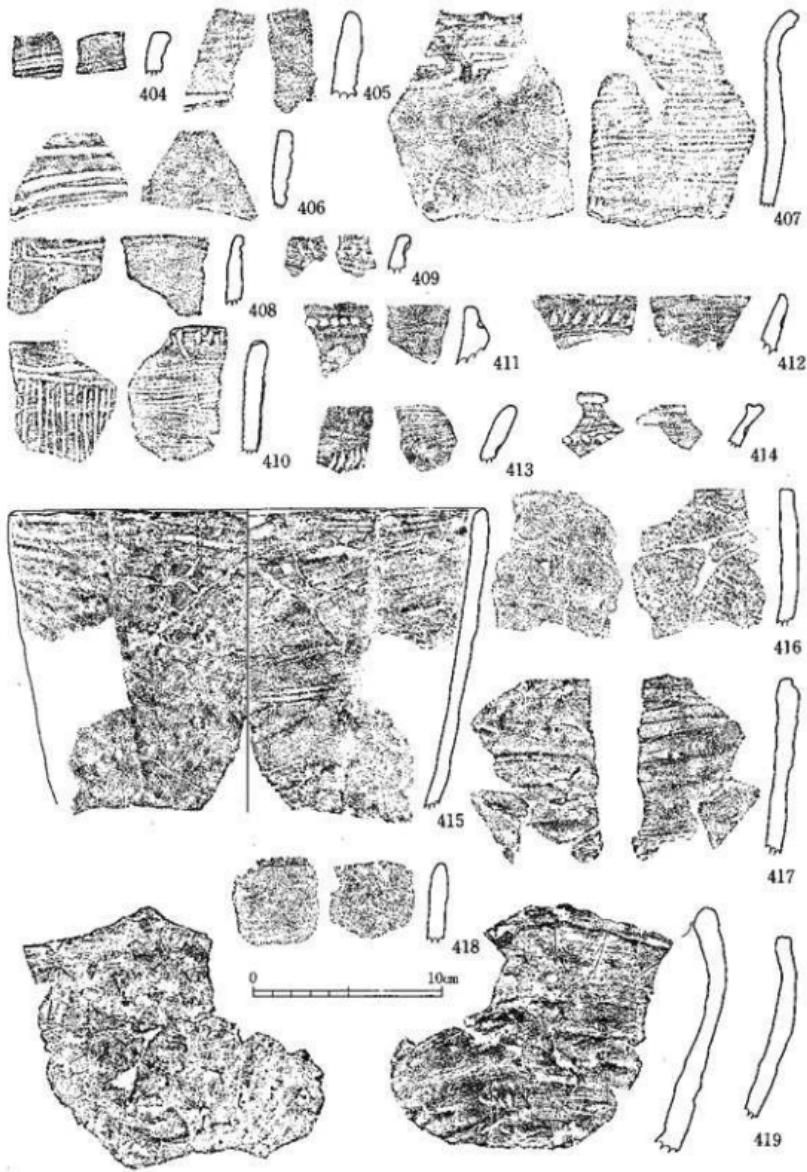
第37図 橫文土器実測図 (16)

375~392 B地区 SA 5



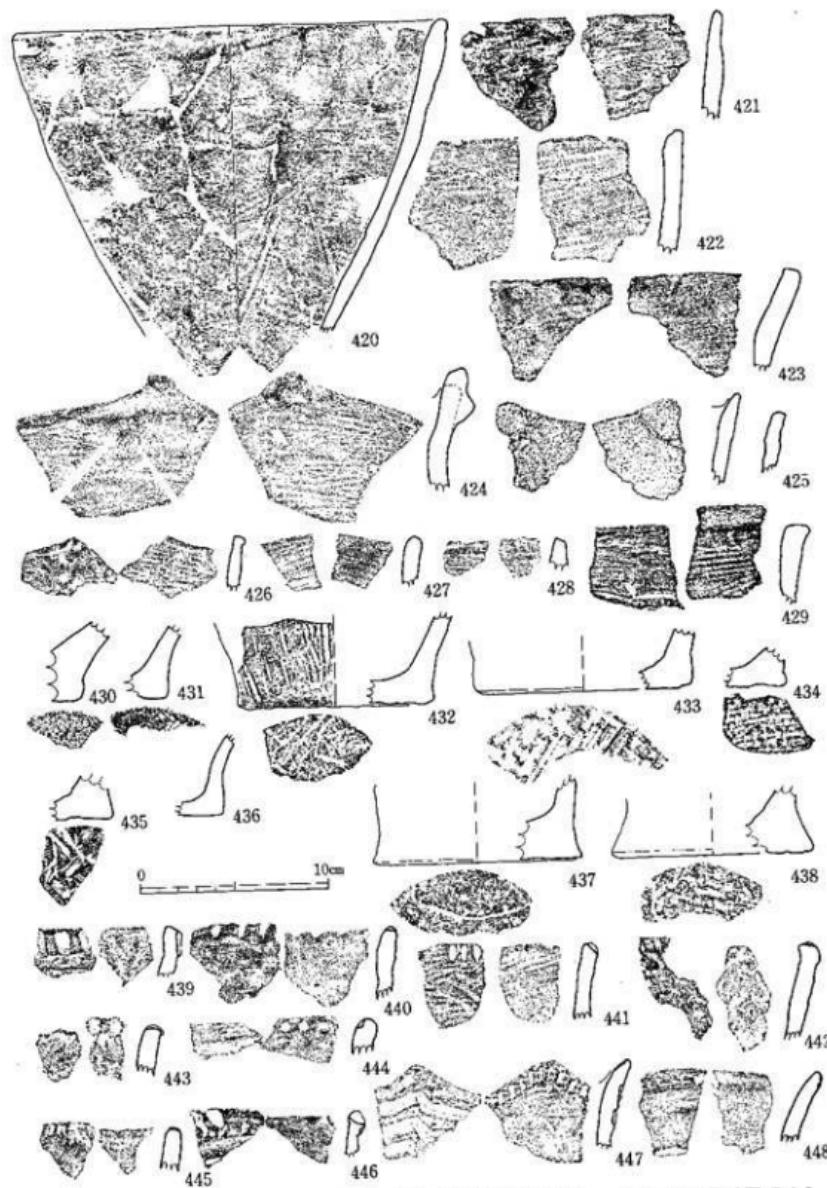
第38図 繩文土器実測図 (17)

393~403 B地区 SA 5



第39図 繩文土器実測図 (18)

404~419 B地区 SA 5



第40図 縄文土器実測図 (19)

420~438 B地区 SA5

439~448 B地区 SA6

cm、短径25cm、深さ53cmである。中央のピットから北に130cm離れて長径36cm、短径32cm、深さ63cmのピットが、南に80cm離れて長径45cm、短径30cm、深さ60cmのピットが配置されている。3個のピットは南北方向に主軸を持つ。ピットは壁際から60cmと70cmである。この住居はSA 9に切られている。住居の埋土はアカホヤ粒・白色粒を含むにぶい黄褐色土層(Hue 10YR 4/3)である。

遺物は全面的に出土している。447は波状口縁で、口唇部の内面に貝殻腹縁の刺突文を、口縁部には3条の沈線を施している。453は口唇部には1条の沈線を有し、口縁部文様帯が厚く肥厚し、刺突文と沈線文を施しており、Ⅳ a類に相当する。454は口縁部文様帯が厚く肥厚し、沈線文を施し、胴部文様帯に刺突文を施しており、Ⅳ b類に相当する。455・482は沈線間に貝殻刺突文を施しており、Ⅴ a類に相当する。481は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯にヘラの刺突文を施しており、Ⅲ b類に相当する。460はヘラの刺突文の下位に沈線文を施しており、Ⅴ b類に相当する。462は波頂部に3個の刻みを、口縁部に2条沈線を単位とする文様を施しており、Ⅴ c類に相当する。479は断面三角形状の口縁部に3条の沈線と刺突文を施しており、Ⅶ b類に相当する。478は断面三角形状の口縁部に1条の沈線の上下に刺突文を施しており、Ⅷ b類に相当する。476は口唇部に1条の沈線を、口縁部に1条の沈線と磨消縄文を施しており、Ⅺ a類に相当する。483は口唇部に1条の沈線を、口縁部に弧状の2条短沈線間に列点文を施している。485が口縁部が短く外反するのに対して490はほぼ直角に伸びている無文土器である。10点の底部のうち6点が網代底である。底部の形態は507のように底面から外へ張り出してその上部がくびれているものが7点、底面から斜め上方に伸びるものは509の1点、上げ底は508の1点である。底径は7.9cmが1点、8.4cmが1点、10.4cmと10.5cmが2点である。

土器片加工円盤は7.9~23.0gが5点出土している。

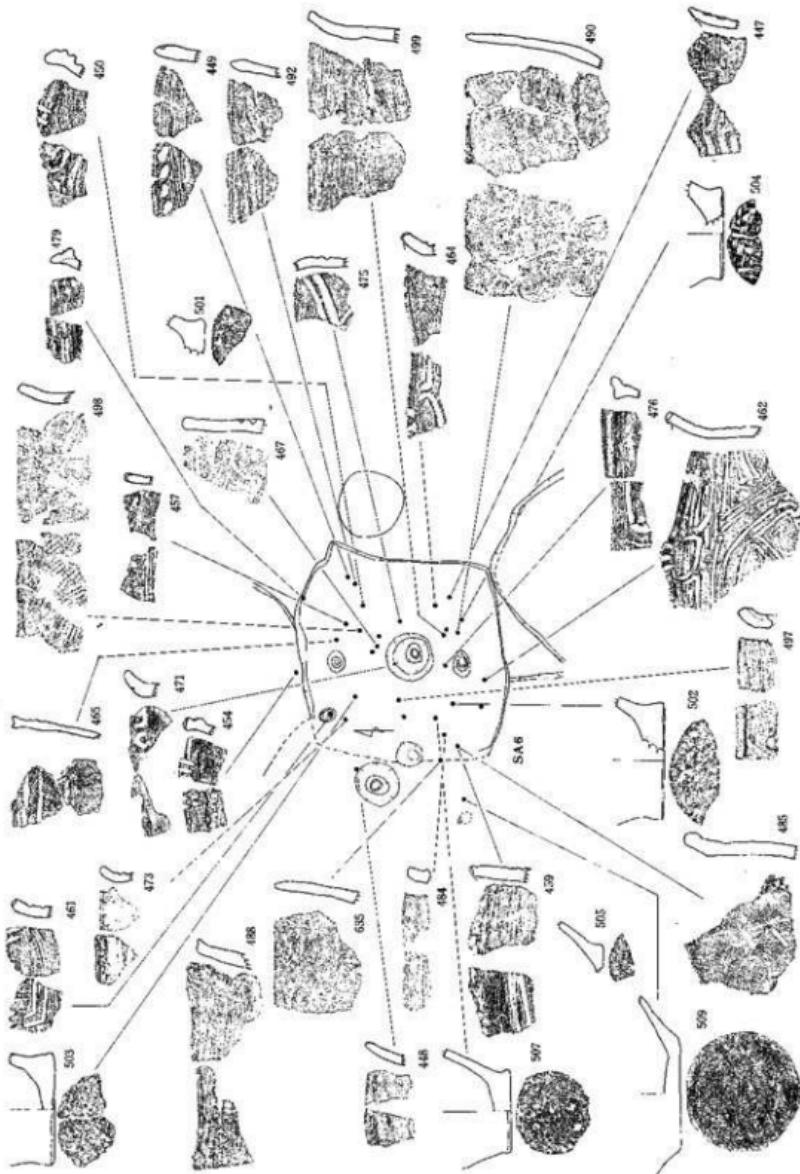
石器としては流紋岩製の凹基無茎錐1点(194)が出土している。

SA 6の時期は460のⅤ b類の時期で、Ⅱ a期である。

#### SA 7 (第47~49・53図)

SA 7はn-30・31に位置し、長径330cm、短径315cm、深さ28cmの円形プランである。この住居の真ん中に径20cm、深さ41cmと径20cm、深さ32cmの2個のピットがあり、建て替えと考えられる。壁際には径20cm、深さ30~50cmのピットが8個巡っており、ピットの間隔から5個は同時期のものと推定される。この5個のピットの中心は北側のピットである。残りの3個のピットが中心の南側のピットに伴うと考えられる。ピットの建て替えの先後関係は把握できなかった。埋土は古段階の住居(SA 7 A)がアカホヤ粒をほとんど含まない暗褐色土層(Hue 10YR 3/4)、新段階の住居(SA 7 B)が白色粒を多く含む暗褐色土層(Hue 10YR 3/4)である。SA 9とSA 10を切っている。

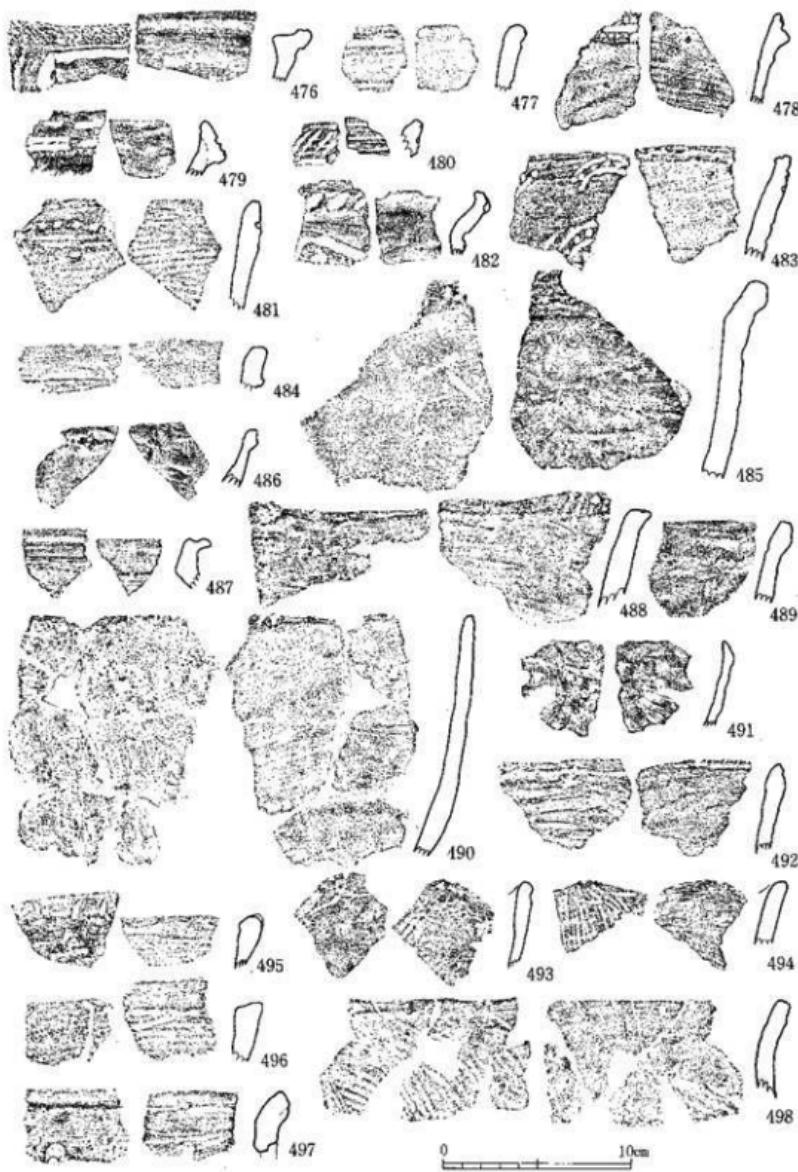
第41圖 日地區 SA6 跡物出土狀況圖





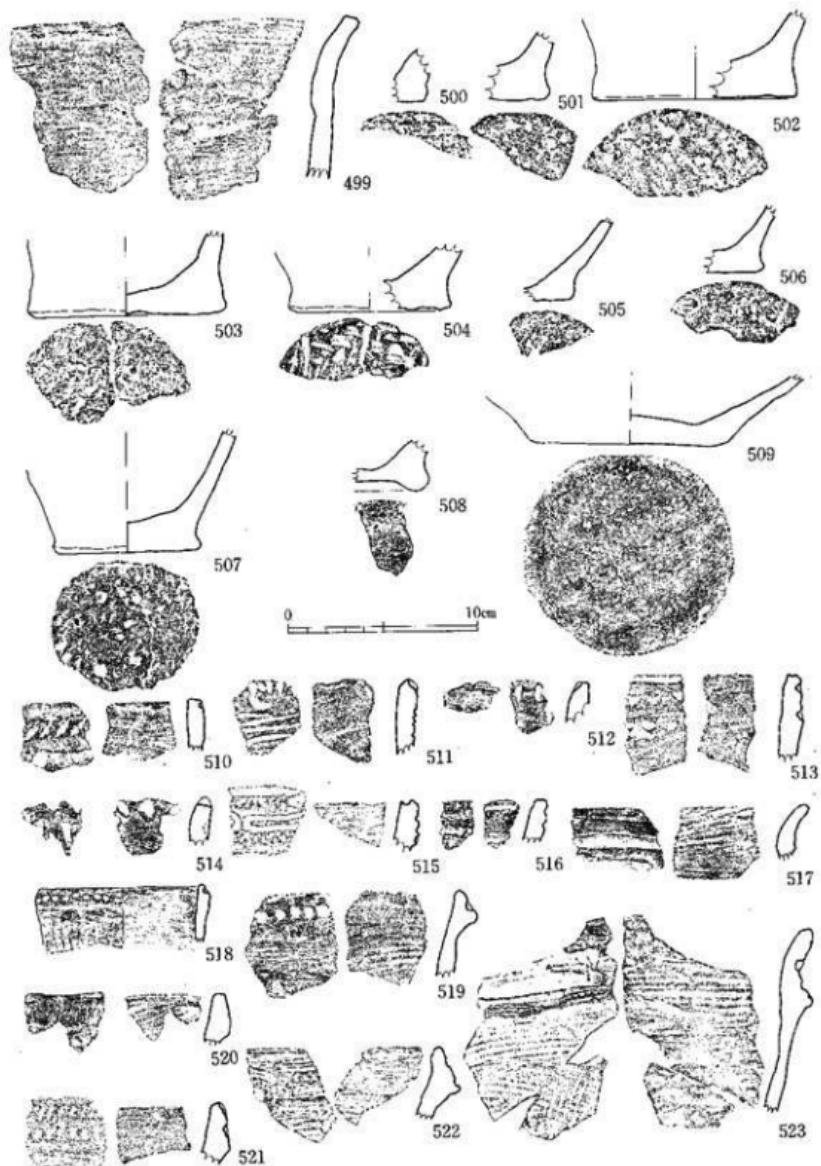
第42図 繩文土器実測図 (20)

449~475 B地区 SA 6



第43図 繩文土器実測図 (21)

476~498 B地区 SA 6



第44図 縄文土器実測図 (22) 499~509 B地区 SA 6 510~523 B地区 SA 7

遺物は中央部に集中して出土している。515は口縁部文様帯が厚く肥厚し、刺突文と沈線文を施しており、N類に相当する。511は口唇部に刻みを、口縁部に4条の沈線を施しており、Vc類に相当する。518は口唇部をわずかに拡張させた狭い文様帯にヘラ刺突文を施しており、Vla類に相当する。519は断面三角形の狭い文様帯にヘラの刺突文を施しており、Vla類に相当する。522は断面三角形の口縁部に2条沈線と刺突文を施しており、Vlb類に相当する。523は口縁部文様帯幅が最も広がり、上下の横方向の貝殻腹縁刺突文の間に2条の沈線を施している。524も口縁部文様帯幅が最も広がり上下のヘラ刺突文の間に2条の沈線と横方向の貝殻腹縁刺突文を施している。523・524はVlc類である。531・532は口縁部が短く外反し、頸部に斜方向の貝殻腹縁刺突文を施しており、Vlb類に相当する。530はVlb類で、頸部に横方向の貝殻腹縁刺突文が2段である。535は渦巻状の沈線を施しており、磨消繩文土器と思われる。546は口縁部に刺突文を施したこぶ状突起を付けている。528は口縁部が内湾する口径22.3cmの無文土器で、口縁部に穿孔を1ヶ所有する。537は口縁部がほぼ真直に伸びる口径23.5cmの無文土器である。545は口縁部が若干外反し、胴部が大きく張る口径24.8cmの無文土器である。550は口縁部が若干外反する口径23.0cmの無文土器である。528・537・545・550がすべて平口縁であるのに対して544は波状口縁である。底部は3点出土しているが、網代底はない。底部の形態は551・552が底面から真直に立ち上がるものであるのに対して553は上げ底である。552は底径7.8cmである。

土器片加工円盤は9.8gが1点出土している。

石器としては敲石1点(132)、磨製石斧1点(158)が出土している。

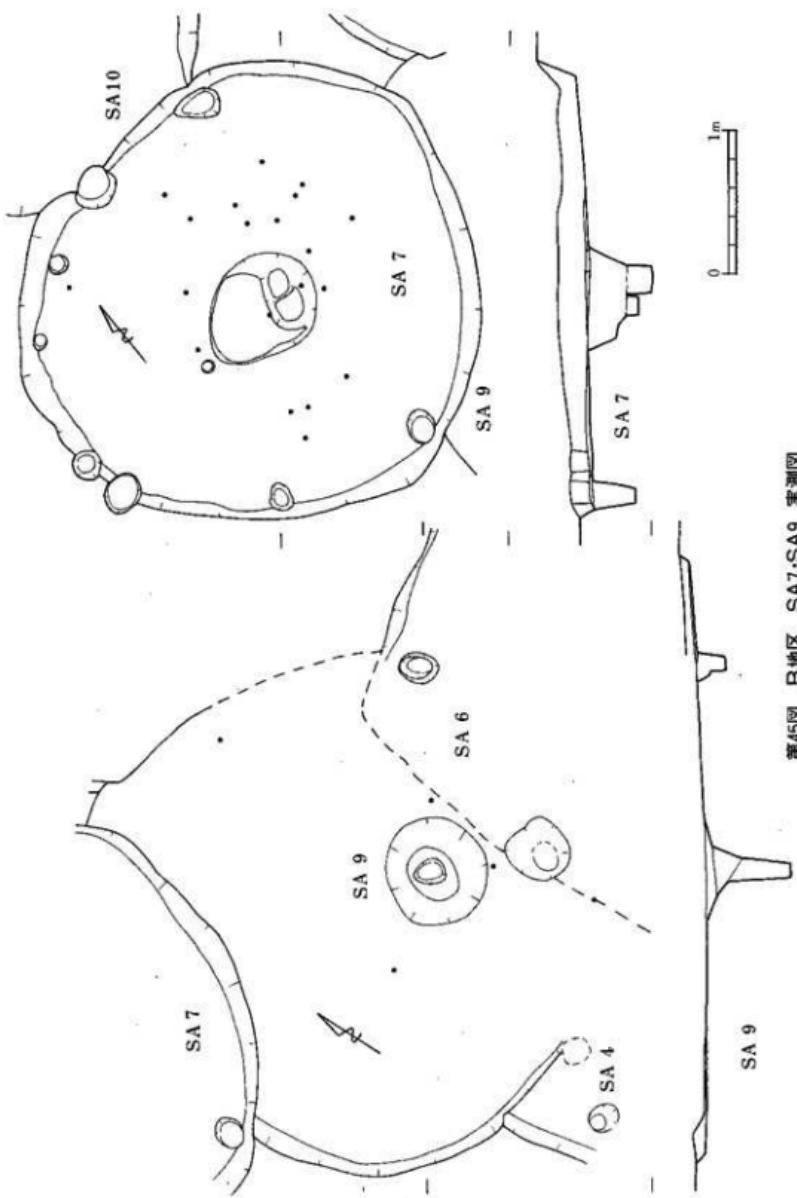
S A 7 A の時期は524のVlc類の時期で、Ⅲb期である。S A 7 Bは531のVlb類の時期でN a期である。

#### S A 8 (第47・50~55・57図)

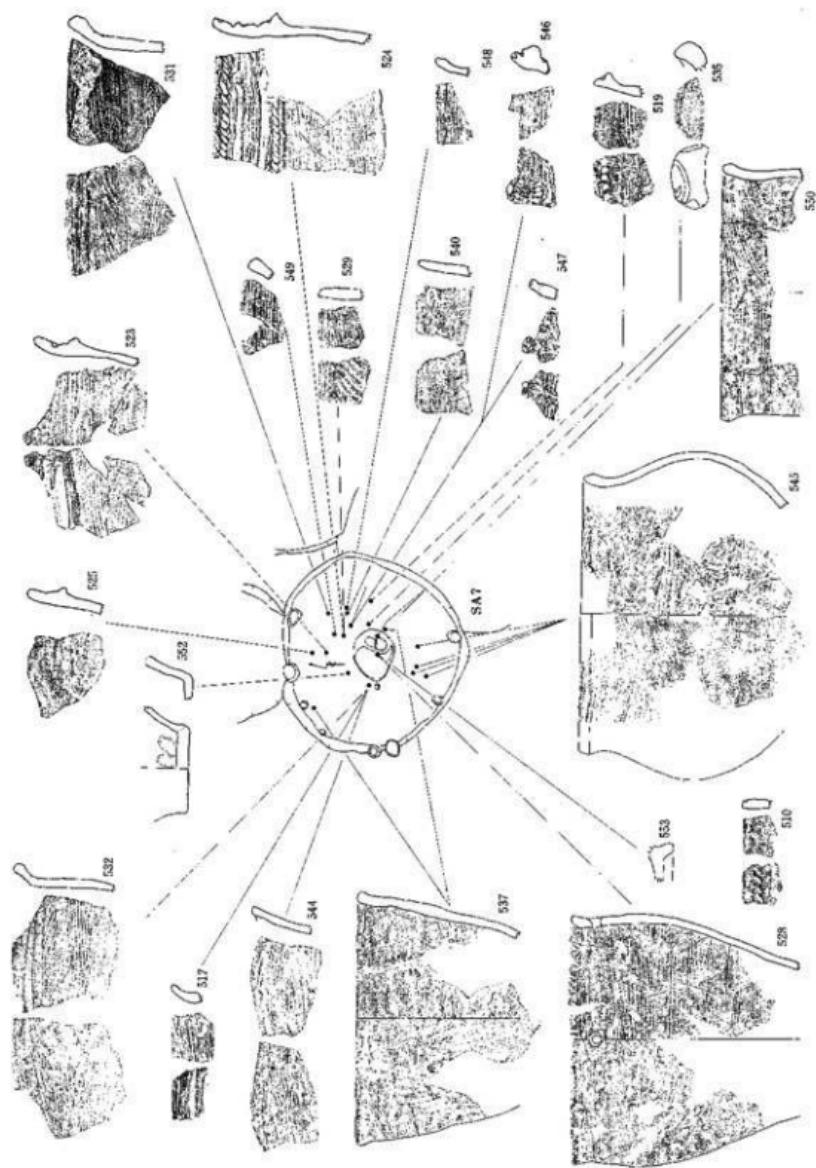
S A 8 はm・n-31・32に位置し、長径450cm、短径440cm、深さ25cmの円形プランである。土層断面によれば建て替えを1回行っている。古段階の住居(S A 8 A)と新段階の住居(S A 8 B)がある。この住居の真ん中には長径25cm、短径15cm、深さ37cmのピットがあり、周囲に径15cm、深さ8~34cmのピットが4個巡っている。また中央のピットの際には長径105cm、短径70cm、深さ10cmの土坑がある。S A 8 AがS A 6に切られ、S A 8 BがS A 9を切っている。埋土はS A 8 Aが白色粒を少量含む褐色土層(Hue 7.5YR 4/4)、S A 8 Bが白色粒を含む暗褐色土層(Hue 7.5YR 3/3)である。

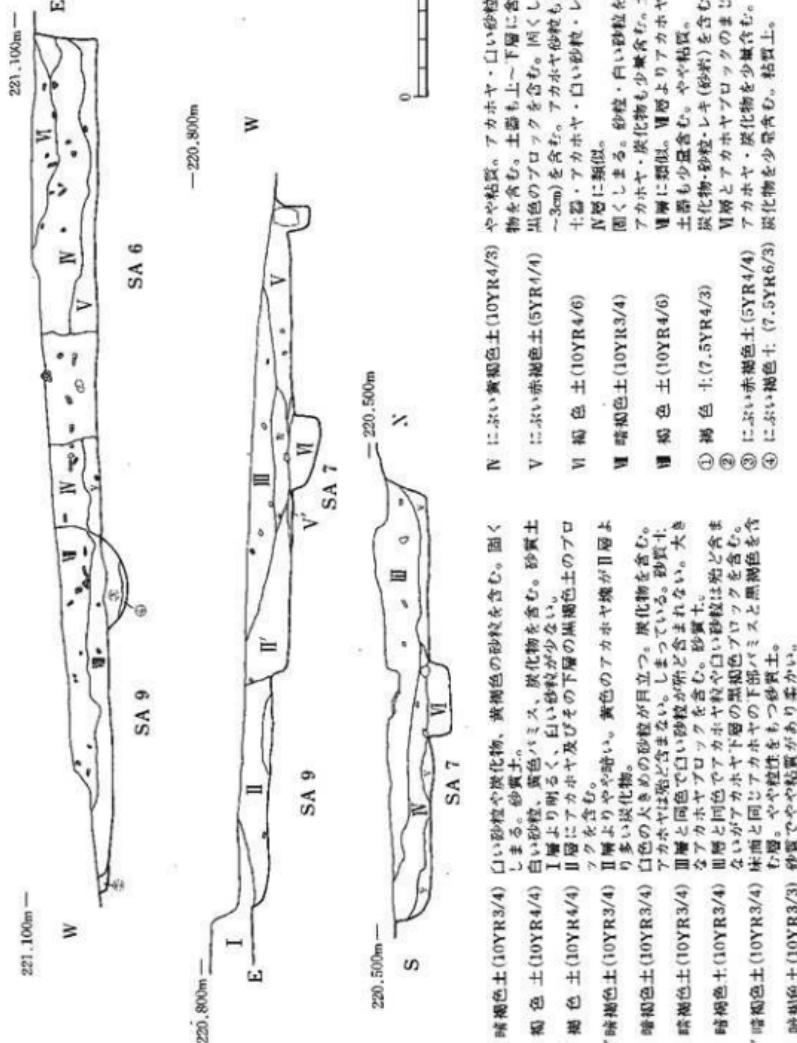
遺物は全面的に出土している。554は口唇部に押圧刻みを、口縁部に縱方向の沈線文を施している。565は口縁部をわずかに肥厚させた文様帯に2条の沈線の下位に刺突文を、口唇部に刻みを施しており、Ⅲb類に相当する。557は刺突文の下位に1条の沈線文を施しており、Vb類に相当する。570は口縁部に橢円形状の沈線文とヘラ刺突文を、胸部上半部には

第45図 B地区 SA7-SA9 実測図



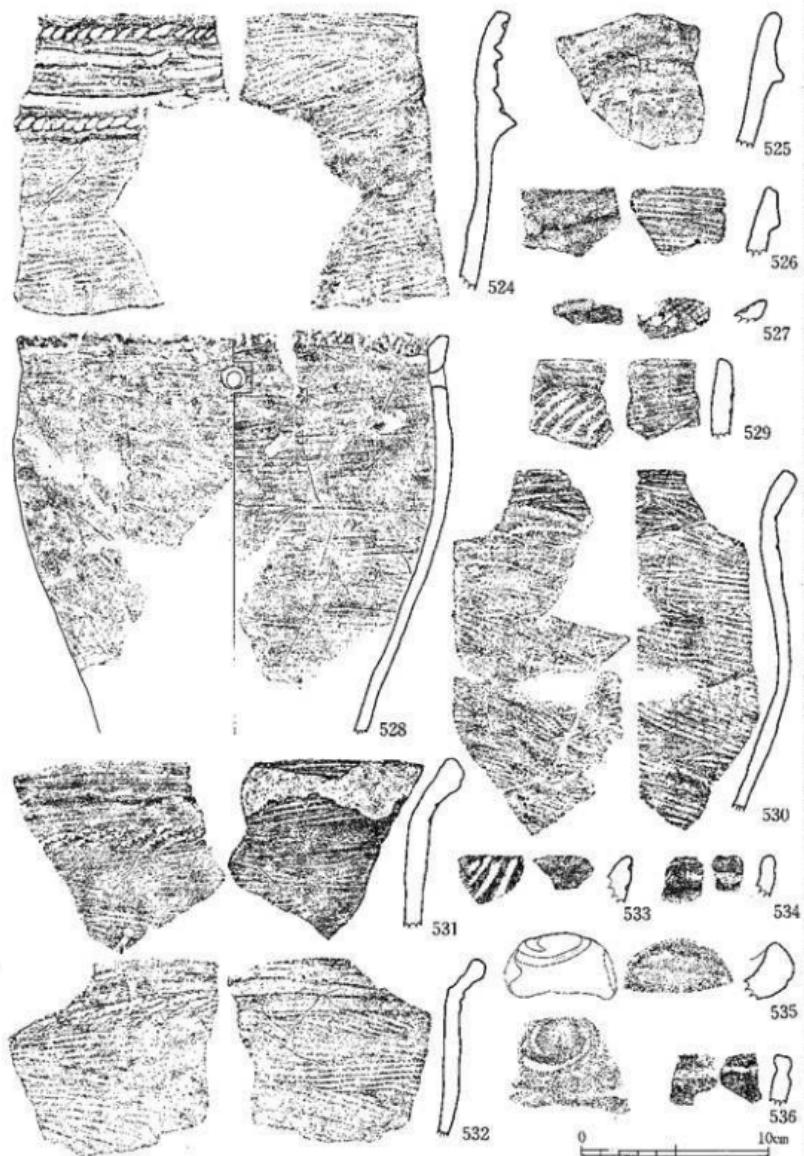
第46図 B地区 SA7遺物出土状況図





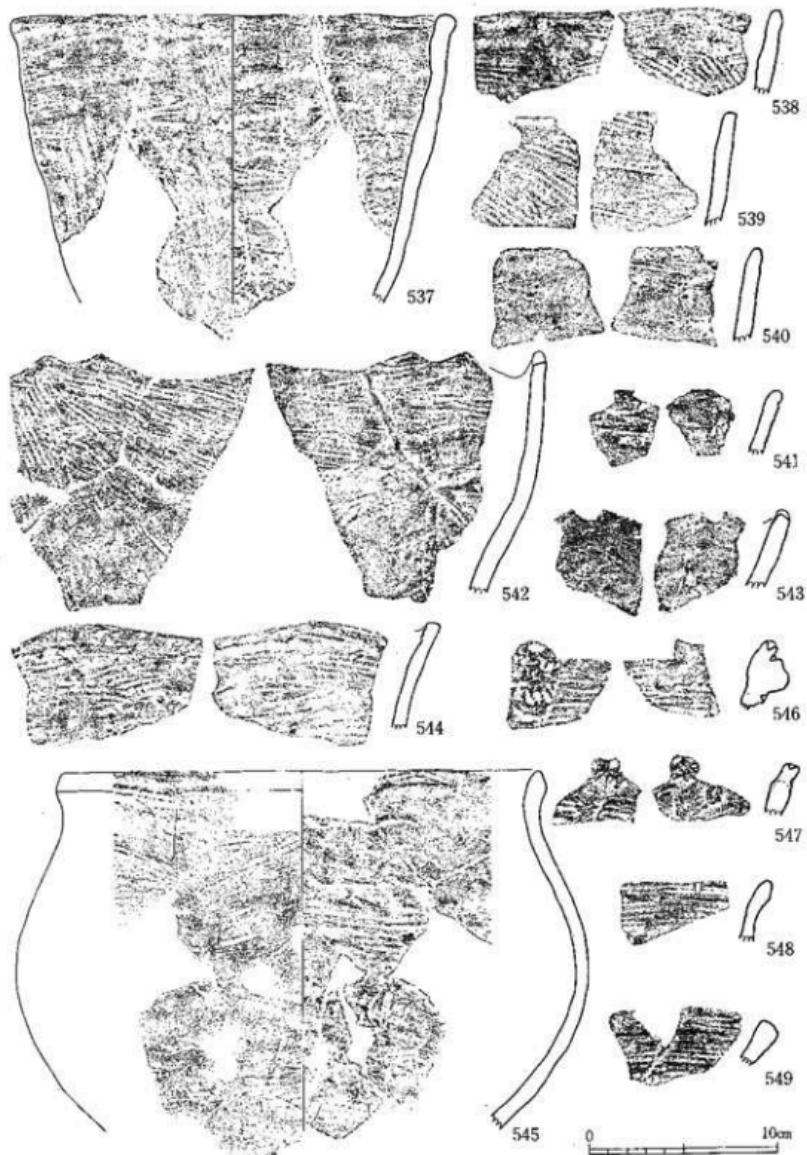
- I 暗褐色土 (10YR 3/4) 白い砂粒や泥炭物、黃褐色の砂粒を含む。薄く  
沙質土。砂質土。
- II 細色土 (10YR 4/4) 白い砂粒、黃褐色、族化物を含む。砂質土。
- II' 地色土 (10YR 4/4) I層より明るく、白い砂粒が少ない。砂質土。
- III 暗褐色土 (10YR 3/4) アカホヤ及びその下層の黒褐色土のプロ  
ックを含む。アカホヤ。
- III' 暗褐色土 (10YR 3/4) II層よりやや暗い。黄色のアカホヤ塊がII層よ  
り多い泥炭物。
- IV 暗褐色土 (10YR 3/4) 白色の大きめの砂粒が目立つ。炭化物を含む。
- V 暗褐色土 (10YR 3/4) アカホヤは殆ど含まれない。砂質土。
- VI 細色土 (10YR 4/6) III層と同色で白い砂粒が殆ど含まれない。大さ  
きなアカホヤブロックを含む。砂質土。
- V' 暗褐色土 (10YR 3/4) III層と同色でアカホヤ下層の黒褐色アカホ  
ヤを含む。砂質土。
- V'' 暗褐色土 (10YR 3/4) 体面と同じアカホヤの下部バニスと黒褐色を含  
む層。やや活性をもつ砂質土。
- VI 暗褐色土 (10YR 3/3) 砂質でやや粘質があり茶色。
- N にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) やや粘質。アカホヤ、白い砂粒、砂礫、炭化  
物を含む。土器も上～下層に含む。
- V にぶい赤褐色土 (5YR 4/4) 黑色のプロックを含む。固くしまる。レキ (2  
～3cm) を含む。アカホヤ砂粒も含まれる。
- VI 細色土 (10YR 4/6) 七器、アカホヤ、白い砂粒。レキを含む。
- IV 層に細砂。
- VII 暗褐色土 (10YR 3/4) 固くしまる。砂粒、白い砂粒を含む。
- VI' 細色土 (10YR 4/6) アカホヤ、炭化物も少く含む。土器を含む。
- VIII 土器に類似。V層よりアカホヤを多く含む。
- IX 土器も少く含む。やや粘質。
- X 暗褐色土 (5YR 4/4) IV層とアカホヤブロックのまじり。
- XI 暗褐色土 (5YR 6/3) 土器を少量含む。粘質土。

第47図 B地区 SA6～SA9 土層断面図



第48図 繩文土器実測図 (23)

524~536 B地区 SA 7



第49図 繩文土器実測図 (24)

537~549 B地区 SA 7

沈線を鋸歯状に施している。571は口縁部が若干外反し、ヘラ刺突文と沈線文を施している。592は口縁部をわずかに肥厚させた文様帶にヘラ刺突文を施しておりⅢ b類に相当する。569は厚く肥厚した口縁部文様帶に沈線文と刺突文を、口唇部に刻みを施しており、Ⅳ a類に相当する。572は口縁部が若干外反し、2条の沈線間にヘラ刺突文を施しており、Ⅳ b類かⅤ a類に相当する。603は口縁部が短く外反し、口縁端部にヘラ刺突文を、胴部上半部に沈線文を施しており、Ⅴ b類に相当する。574は若干外反し、沈線文を施しており、Ⅴ c類に相当する。582は口縁部が若干外反し、沈線文を施しており、Ⅴ c類に相当する。600は口縁部内面に1条の沈線の前後に貝殻腹縁刺突文とヘラ刺突文を施しており、Ⅵ a類に相当する。585は沈線文と繩文を施している。599は上向きの口縁部に3条の沈線を施している。593は断面三角形の口縁部に2条の沈線文の上下に貝殻腹縁による刺突文を施しており、Ⅶ b類に相当する。591は口縁部文様帶下部の肥厚部分は明瞭で著しく張り出し、貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶ c類に相当する。601は口縁部が緩やかに伸びており、貝殻腹縁刺突文を斜方向に施している。608は口縁部がほぼ真直に伸び、口唇部が凹気味で、胴部が若干張る無文土器である。8点の底部のうち7点が網代底である。底部の形態は621のように底面からほぼ真直に伸びるもの6点、624のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれているもの2点である。底径6.0cmが1点、9.2cmが1点、10.2~10.5cmが2点である。

土器片加工円盤は10.0~32.0gが7点出土している。

石器としては磨製石斧1点(159)が出土している。

S A 8 A の時期は592のⅢ b類の時期で、I b期である。S A 8 B の時期は593のⅦ b類の時期でⅡ a期である。

#### S A 9 (第45・47・56~58図)

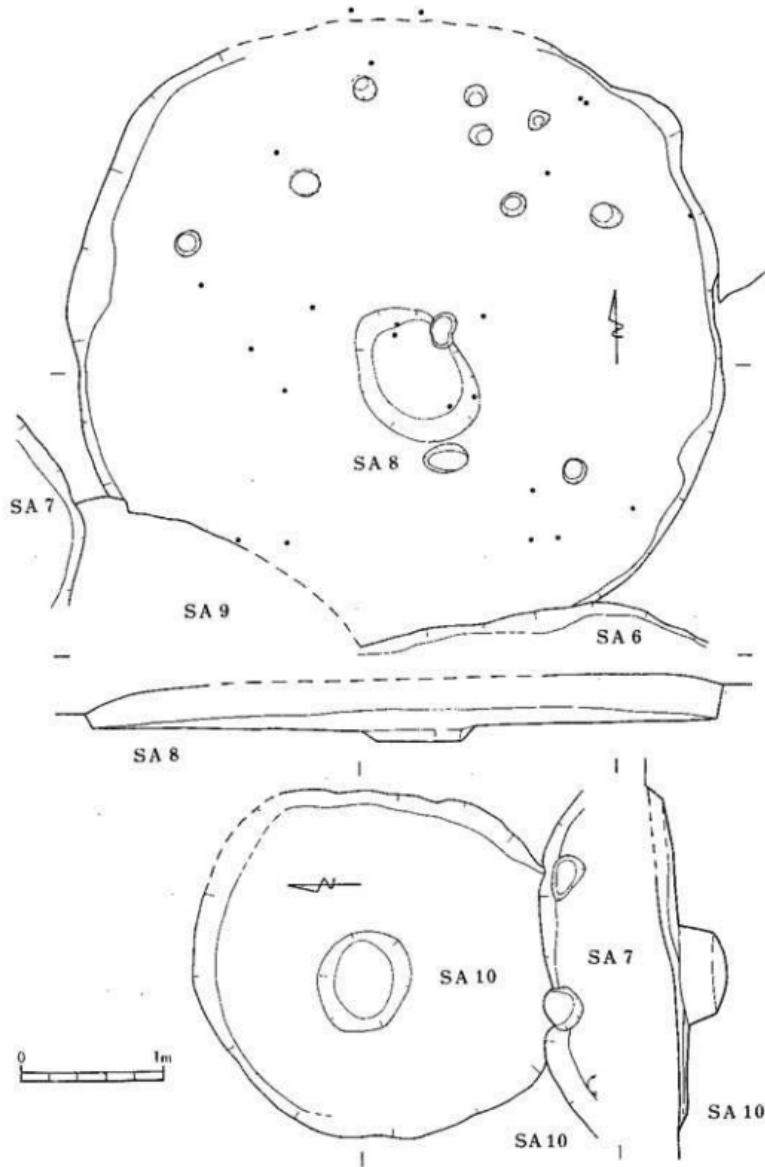
S A 9 はn-31に位置し、径36.0cm、深さ6cmの円形プランである。この住居の真ん中に二段掘りのピットがあり、一段目は長径80cm、短径75cm、深さ7cmで、二段目は長径20cm、短径15cm、深さ56cmである。この住居はS A 4・S A 6・S A 8を切り、S A 7に切られている。住居の埋土は白色粒・黄色バミスを含む褐色土層(Hue 10YR 4/4)である。

遺物量は少ない。625は口唇部に押正刻みを、口縁部に2条の沈線を単位とする文様を施しており、Ⅱ b類に相当する。627・628は口縁部に貝殻腹縁刺突文と3条の沈線文を施しており、Ⅱ b類に相当する。630は波頂部に刻みを、口縁部下位に沈線文を施しており、Ⅴ c類に相当する。6点の底部のうち3点が網代底である。647の上げ底を除いて、645・646のように底面から真直に立ち上がる底部である。底径は10.0cmと12.2cmが各1点である。

土器片加工円盤は26.0gが1点出土している。

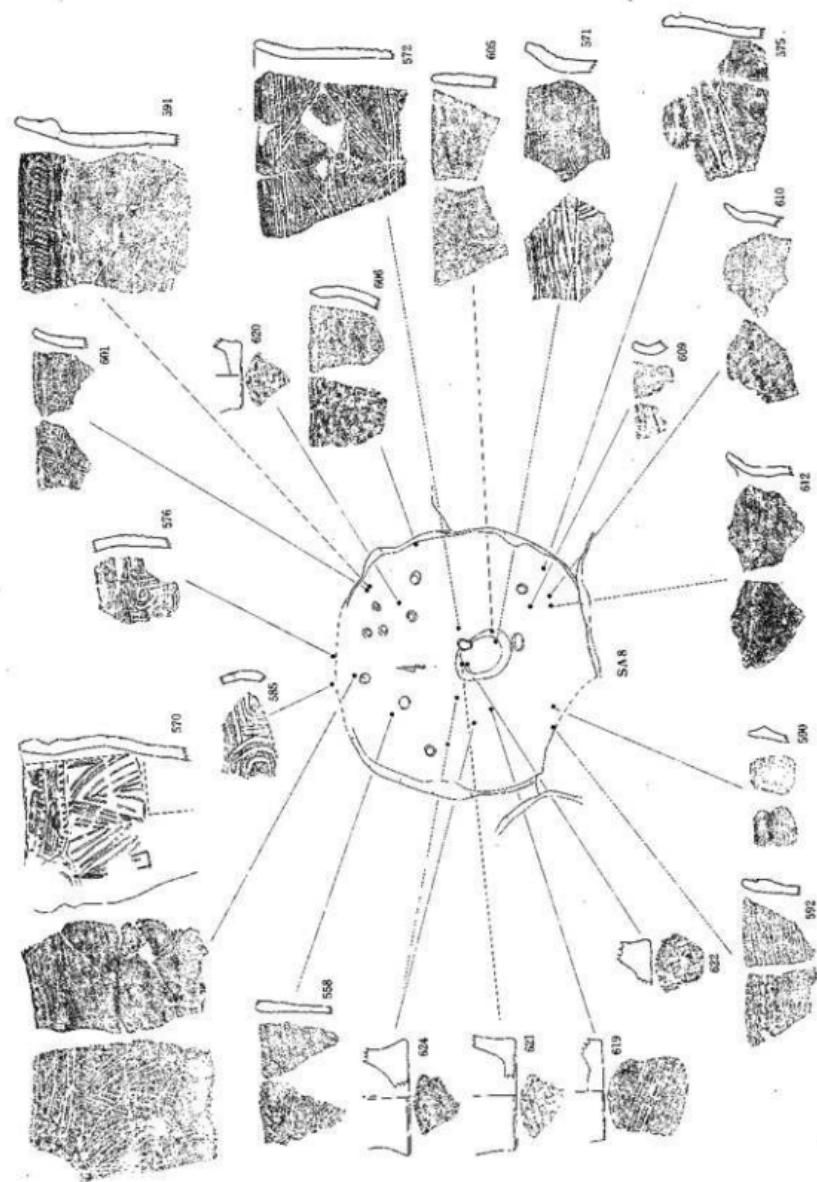
石器としては磨石1点(120)、敲石1点(137)が出土している。

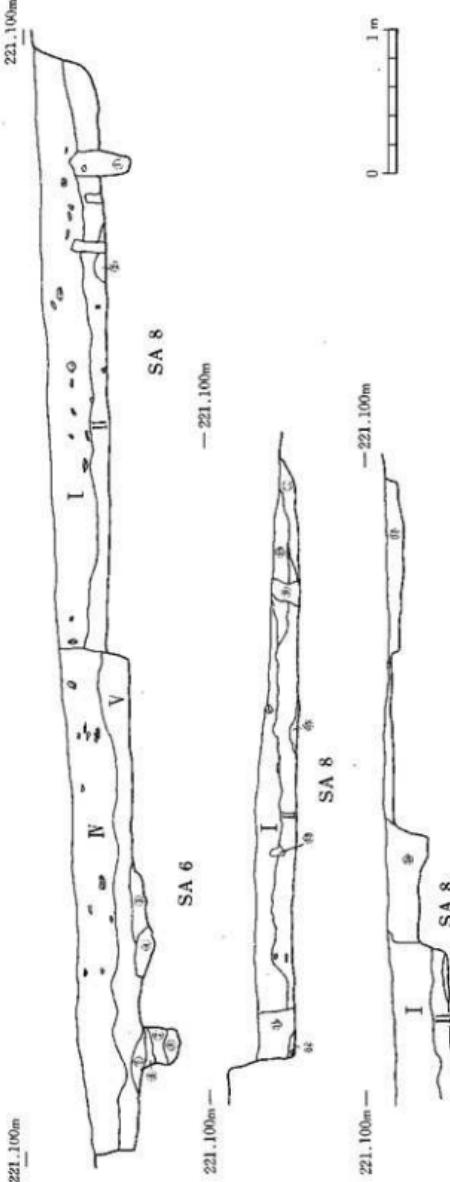
S A 9 の時期は630のⅤ c類の時期で、Ⅱ b期である。



第50図 B地区 SA8・SA10 実測図

第51图 B地区 SA8 出土状况图





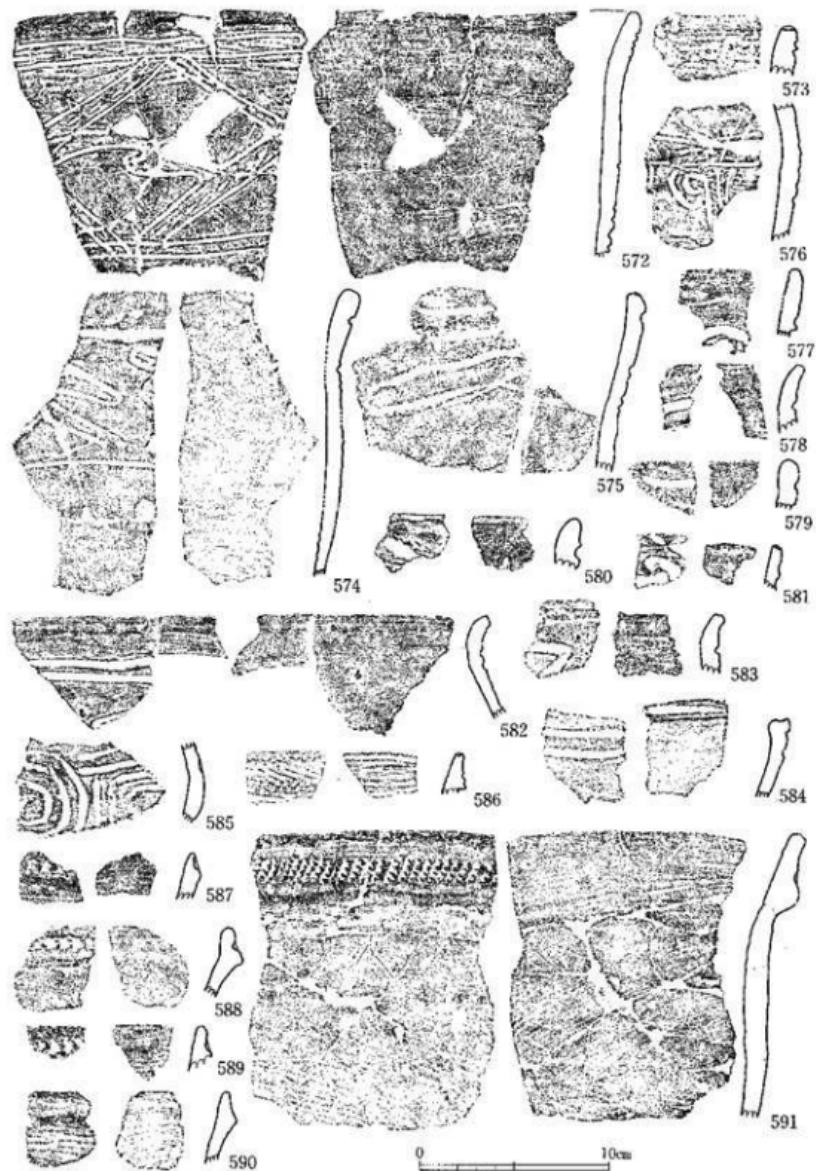
- I 喀褐色土 (7.5YR3/3)  
圓くしまる。白い砂粒。枯木や炭化物を含む。  
上器も上～下層に混含。  
炭化物や白い砂粒を少量。固くしまる。
- II 細色 (7.5YR4/4)  
W にぶい褐色土 (10YR4/3)  
炭化物や白い砂粒・砂礫・炭化物  
やや粘質。アカホヤ・白い砂粒・砂礫を含む。  
を含む。上～下層に含む。
- V にぶい赤褐色土 (5YR4/4)  
黒色のブロックを含む。固くしまる。レキ (2～  
3cm) を含む。アカホヤ・砂粒も含まれる。
- VI にぶい黃褐色土 (10YR6/4)  
白い砂粒・砂礫・炭化物を含む。粘質あり。
- ① 黑褐色土 (10YR2/3)  
やや粘質。土器を含む。  
② 喀褐色土 (7.5YR)  
やや粘質。白い砂粒を微量に含む。
- ③ 明褐色土 (7.5YR5/6)  
アカホヤブロック・暗褐色ブロックと包含。
- ④ 橙色土 (7.5Y R6/6)  
固くしまる。2～3mmの砂粒を含む。
- ⑤ にぶい黃褐色土 (10YR7/4)  
アカホヤ。1～2mmの砂粒。粘質あり。
- ⑥ にぶい褐色土 (7.5YR5/4)  
暗褐色のブロックを含む。粘質あり。
- ⑦ 細色土 (7.5YR4/4)  
アカホヤ。砂粒を少盛含む。
- ⑧ 褐色土 (7.5YR4/6)  
暗褐色ブロックを含む。
- ⑨ 喀褐色土 (7.5YR3/4)  
固くしまる。炭化物を含む。
- ⑩ 細色土 (10YR4/4)  
白い砂粒。アカホヤ・土器を少盛含む。IIに細粒。
- ⑪ 細色土 (7.5YR4/4)  
白い砂粒・炭化物を少盛含む。
- ⑫ にぶい黃褐色土 (10YR6/4)  
白い砂粒・炭化物を含む。
- ⑬ 暗褐色土 (7.5YR3/3)  
白い砂粒・砂礫・炭化物を含む。粘質あり。
- ⑭ にぶい褐色土 (7.5YR6/3)  
粘質あり。
- ⑮ 喀褐色土 (10YR3/4)  
IIに細粒。
- ⑯ 喀褐色土 (10YR3/4)  
白い砂粒・炭化物を少盛含む。
- ⑰ にぶい褐色土 (7.5YR5/3)  
固くしまる。白い砂粒を少盛含む。



第53図 溝文土器実測図 (25)

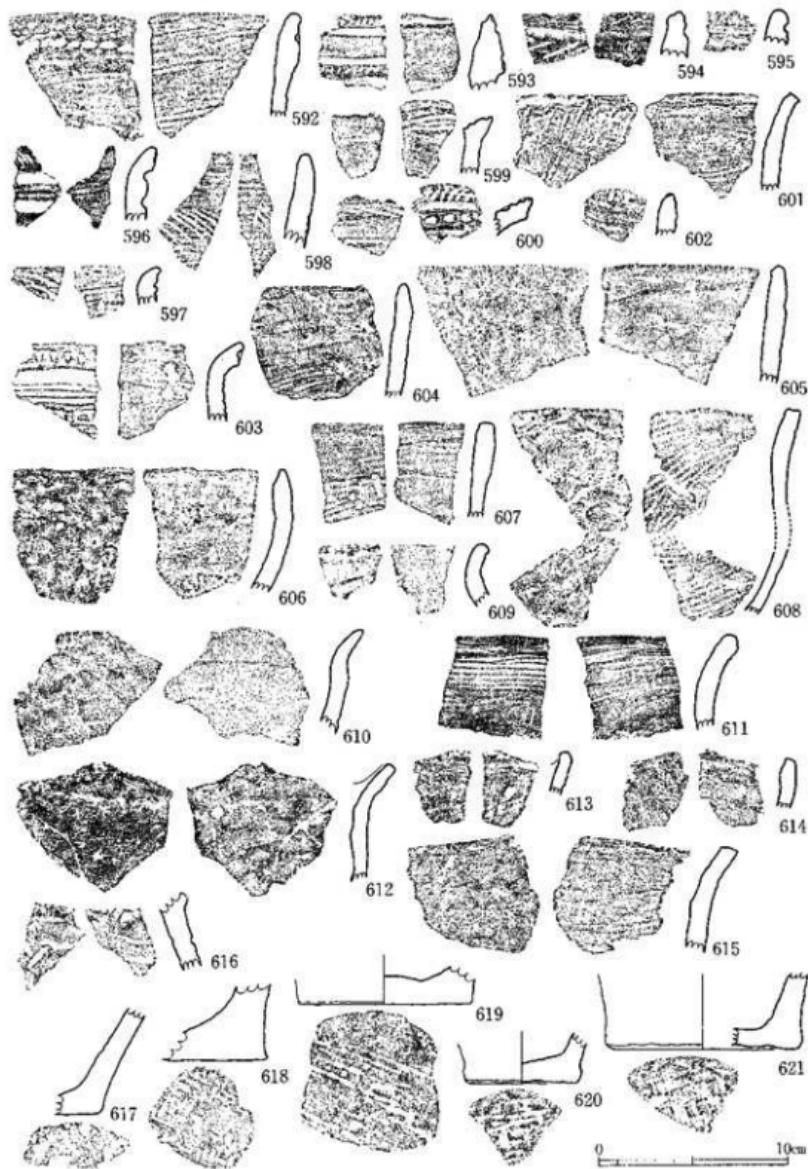
550~553 B地区 SA 7

554~571 B地区 SA 8



第54図 縄文土器実測図 (26)

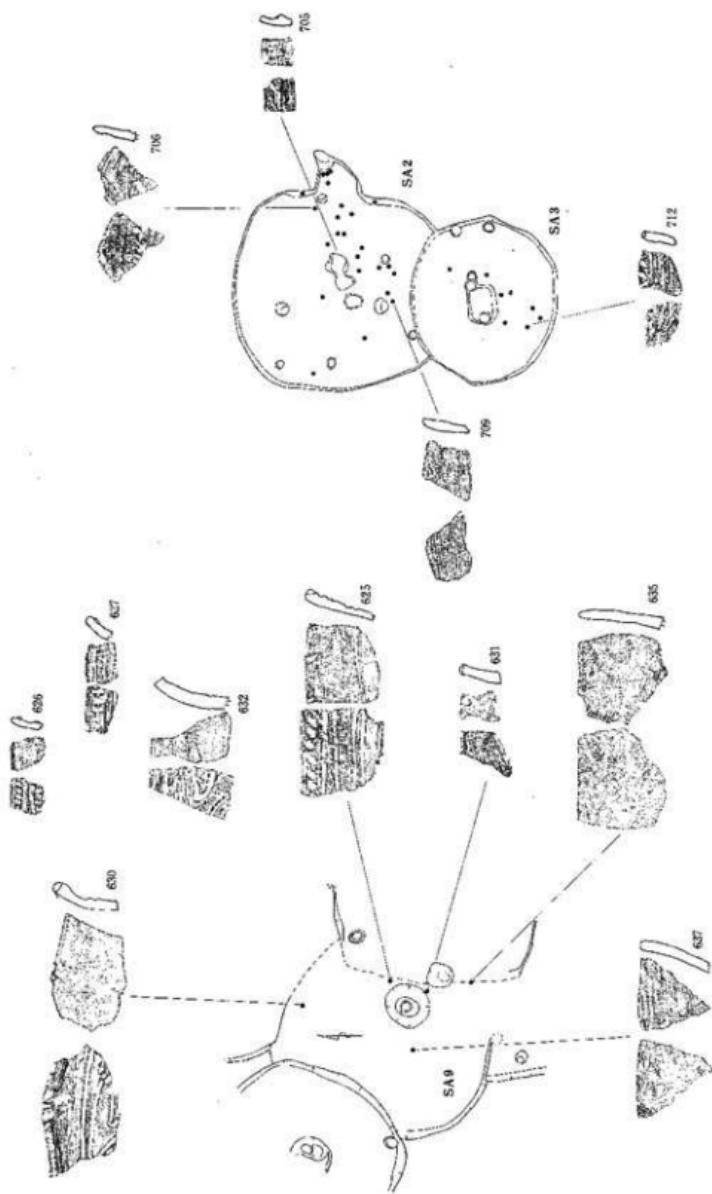
572~591 B地区 SA 8

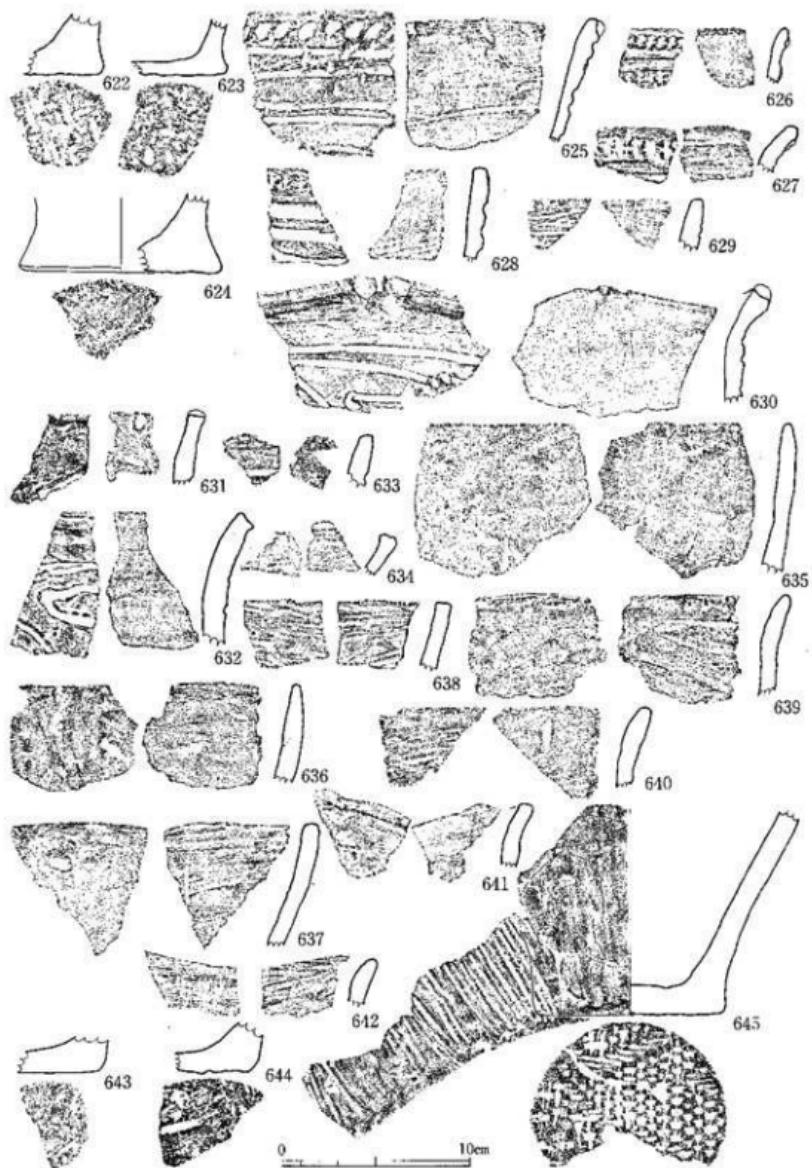


第55図 繩文土器実測図 (27)

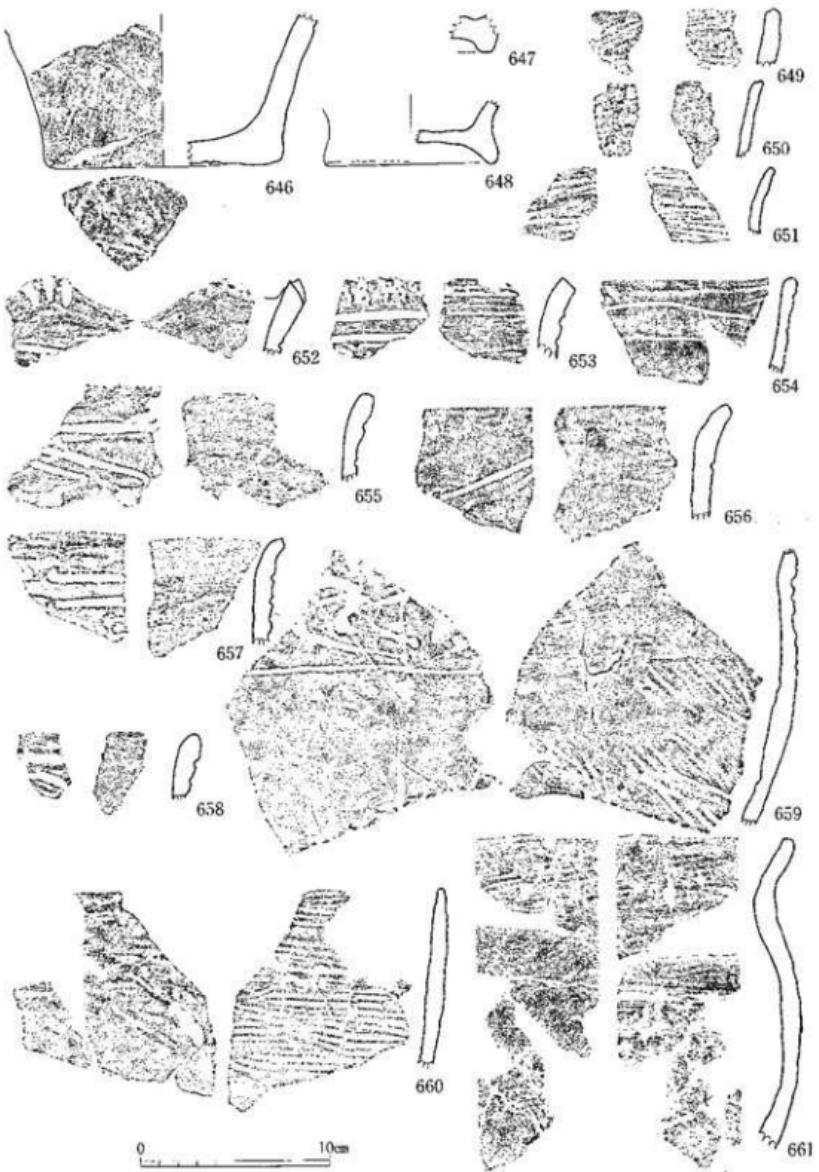
592~621 B地区 SA 8

第562 B地区 SA9 C地区SA2-SA3 遗物出土状况图





第57図 縄文土器実測図 (28) 622~624 B地区 SA 8 625~645 B地区 SA 9



第58図 縄文土器実測図 (29)

646～648 B地区 SA 9  
652～661 B地区 SC 1

649～651 B地区 SA 10

### S A 10 (第50・58図)

S A 10はm・n-30・31に位置し、長径250cm、短径240cm、深さ9cmの円形プランである。この住居の真ん中には長径70cm、短径65cm、深さ35cmのピットがある。S A 7に切られている。

遺物は少量だけ出土している。649・650が口縁部がほぼ直に伸びるのに対して651は若干外反している無文土器である。

S A 10の時期は切り合いからⅡ b期のS A 7 Aの前段階のⅢ a期である。

### S A 11

S A 11はℓ-31に位置し、長径340cm、短径280cm、深さ36cmの円形プランである。S A 12に切られている。

遺物は少量出土している。土器片加工円盤の20.0gが2点出土している。

### S A 12

S A 12はℓ-31に位置し、長径360cm、短径320cm、深さ17cmの円形プランである。S A 11を切っている。

### S A 13

S A 13はk-31に位置し、径280cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。土器片加工円盤が20.5gと23.5gが各1点出土している。

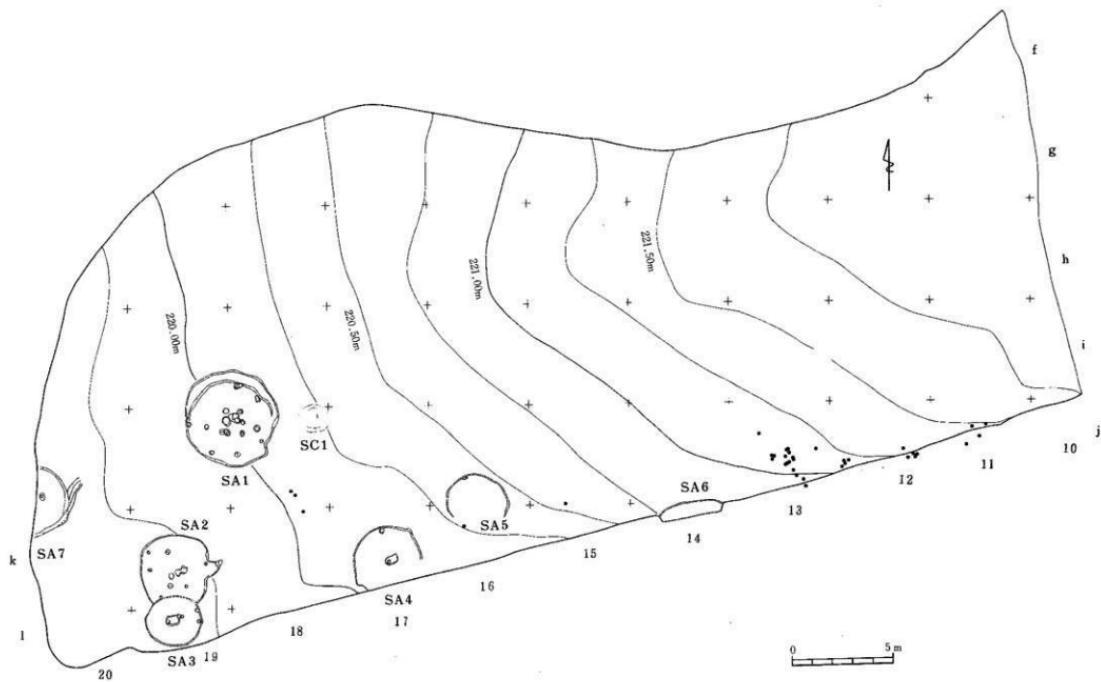
## C地区 (第59図)

C地区の堅穴住居は調査区の東端部の南側i-14~21に8軒分布している。

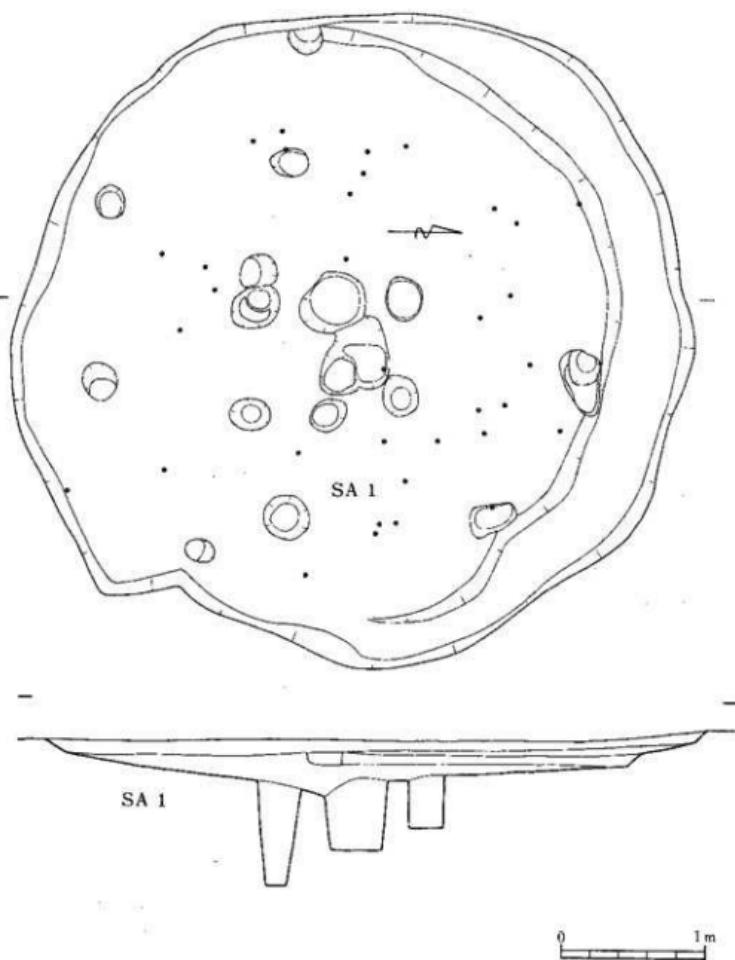
### S A 1 (第60~63・66図)

S A 1はi・j-18・19に位置する。この住居は建て替えを1回行っている。古段階の住居(S A 1 A)は長径460cm、短径430cm、深さ7cmの円形プランである。壁際に径20~25cm、深さ40~60cmのピットが6個巡っている。新段階の住居(S A 1 B)は長径425cm、短径410cm、深さ22cmの円形プランである。この住居は真ん中に直径48cm、短径38cm、深さ38cmのピットがあり、このピットを中心として北に長径30cm、短径25cm、深さ37cmのピットが、南に長径35cm、短径30cm、深さ62cmのピットがある。

遺物は北半分に集中している。669は内湾する口縁部に2条の沈線と磨消繩文を施しており、N類に相当する。671は口縁部をわずかに肥厚させた文様帶に沈線文と刺突文を施しており、Ⅲ b類に相当する。668は口唇部に刻みを、口縁部に沈線文を施しており、V c類に相当する。690は1条の沈線の上下にヘラによる格子目文を施している。674は口縁部断面の逆「く」字形の屈曲が間延びし、その上下に貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅶ d類に相当する。681は波状口縁で、くびれ付近から上がほぼ直に伸び1条の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅷ b類に相当する。686は短く外反する口縁部下位の頸部に2条の貝殻腹縁刺突文を

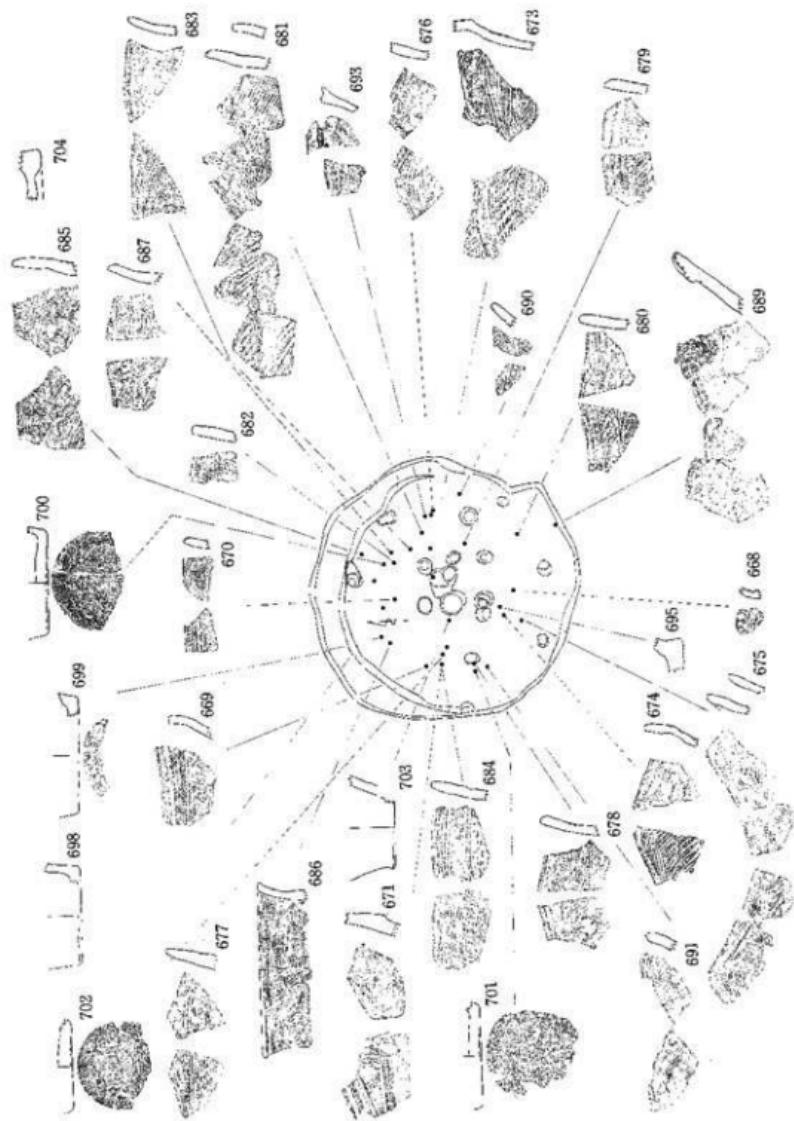


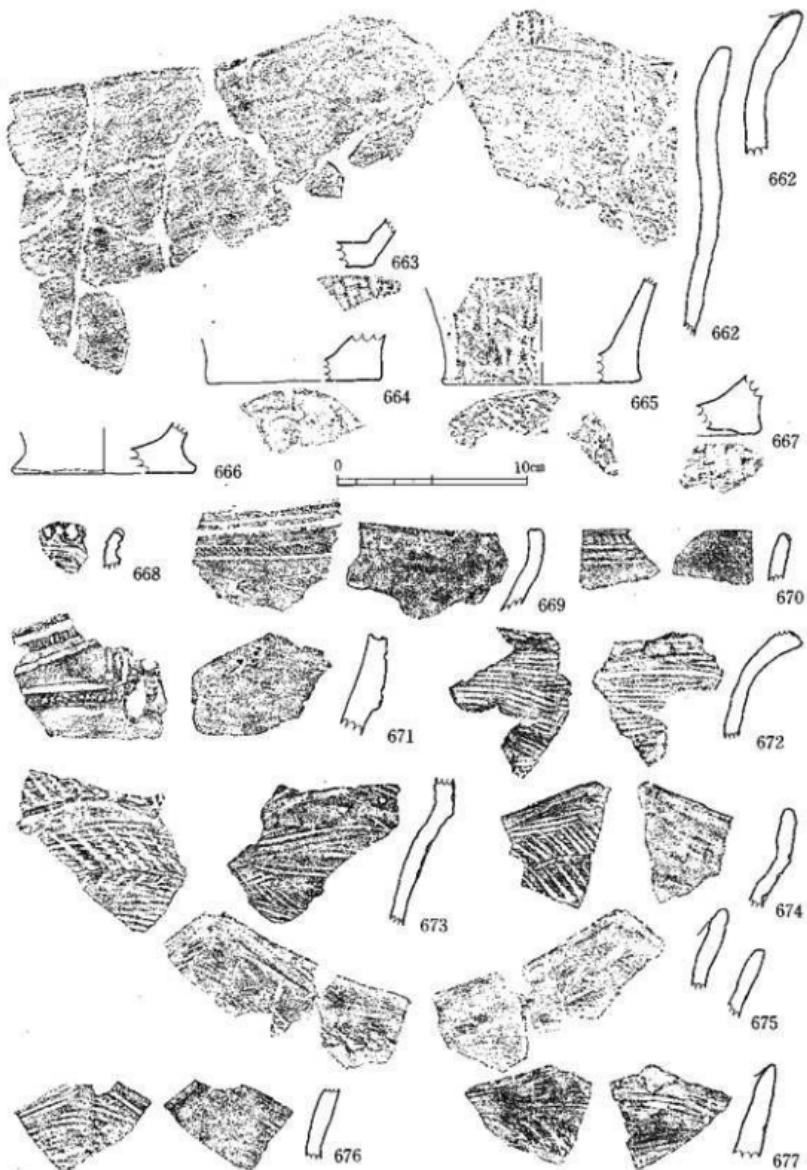
第59図 C地区 地質分布図



第60図 C地区 SA1 実測図

第61圖 C地區SA1遺物出土狀況圖

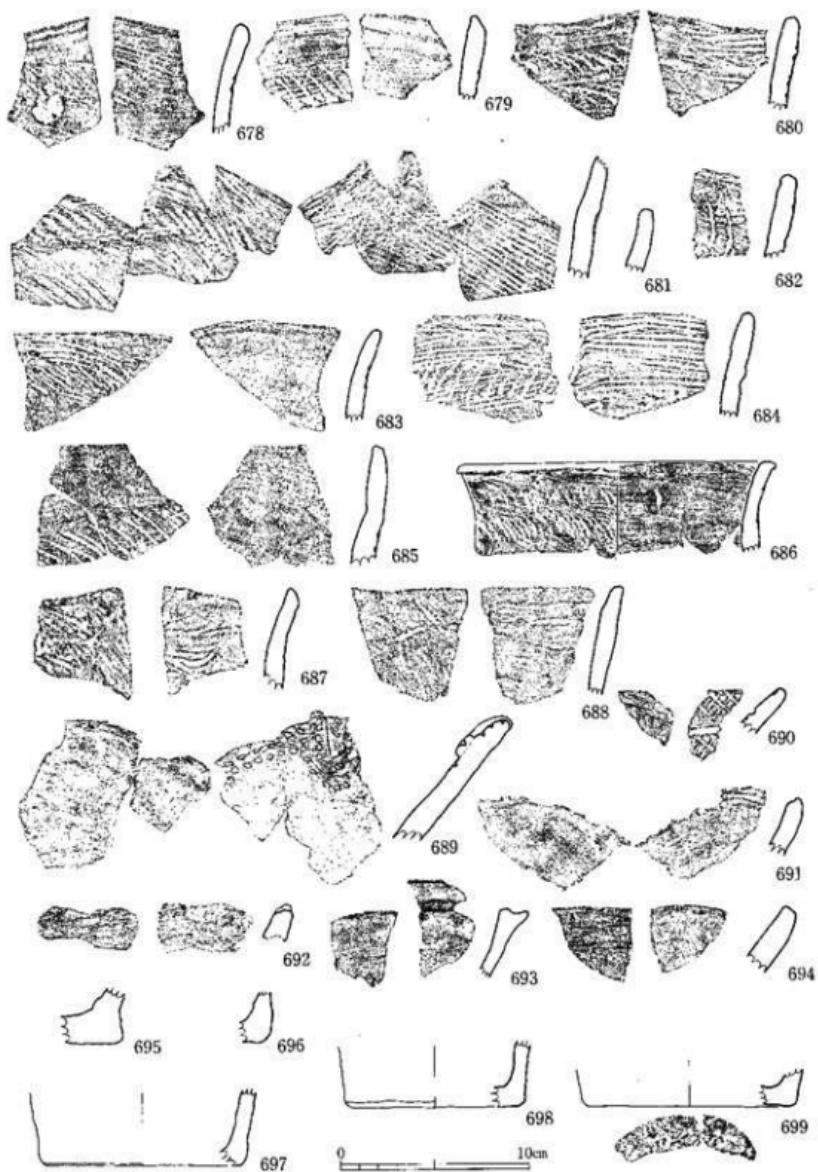




第62図 純文土器実測図 (30)

662~667 B地区 SC1

668~677 C地区 SA1



第63図 繩文土器実測図 (31)

678~699 C地区 SA 1

施している。多くの破片はⅧ b類に相当する。689は脚台付き皿の坏部で、坏部の口縁部の内面にU字形に粘土紐を貼りつけ刺突文を、口縁部に2条に刺突文を施している。10点の底部のうち2点が網代底である。底部の形態は698のように底面から真直に立ち上がるもの7点、703のように外方へ張り出すもの2点、上げ底1点である。底径は8.0cmと8.6cmが各1点、9.4cmと9.5cmが各1点、10.0cmと10.4cmが各1点、11.0cmが1点である。

土器片加工円盤は14.0～61.0gが5点出土している。

石器としては打製石鎌1点(197)が出土している。

S A 1 A の時期は674のⅧ d類の時期で、Ⅷ b期である。S A 1 B の時期は681のⅨ b類の時期で、N a期である。

#### S A 2 (第56・64～66図)

S A 2 はk-19に位置し、長径370cm、短径335cm、深さ6cmの円形プランである。この住居は南北方向に径22cm、深さ44cmのピットと径25cm、深さ24cmのピットが配置されている。S A 3 に切られている。

遺物は少量出土している。705は口縁部をわずかに肥厚させ、沈線文を施しており、Ⅷ b類である。706は波状口縁で貝殻腹縁刺突文を1条施している。708はほぼ真直な口縁部に1条の貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅸ b類である。709は口縁部がほぼ真直に伸びる無文土器である。底部は2点出土しているが、網代底はない。

土器片加工円盤は4.1～59.8gが5点出土している。

石器としては磨石1点(126)が出土している。

S A 2 の時期は708のⅨ b類の時期でN a期である。

#### S A 3 (第56・64～66図)

S A 3 はℓ-19に位置し、長径280cm、短径250cm、深さ11cmの円形プランである。S A 2 を切っている。この住居の真ん中に長さ65cm、幅50cm、深さ16cmの浅い土坑があり、その中の端に東西方向に径20cm、深さ29cmのピットと径20cm、深さ37cmのピットがある。

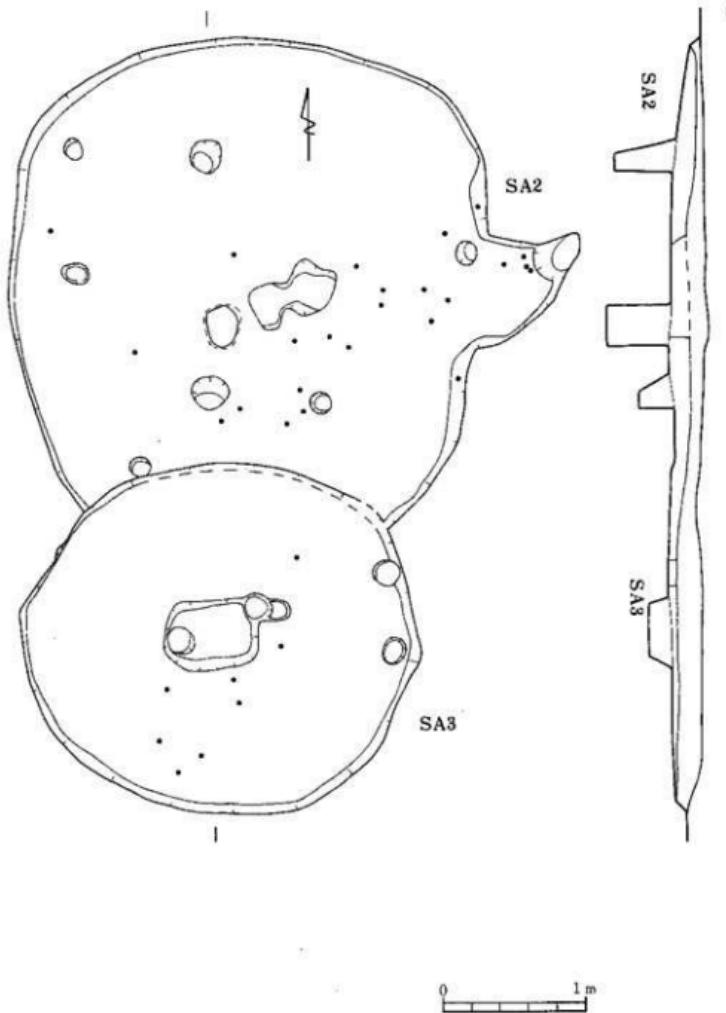
遺物は少量出土している。712は波頂部に刻みを施している。

S A 3 の時期は切り合いからN b期である。

#### S A 4 (第66・67図)

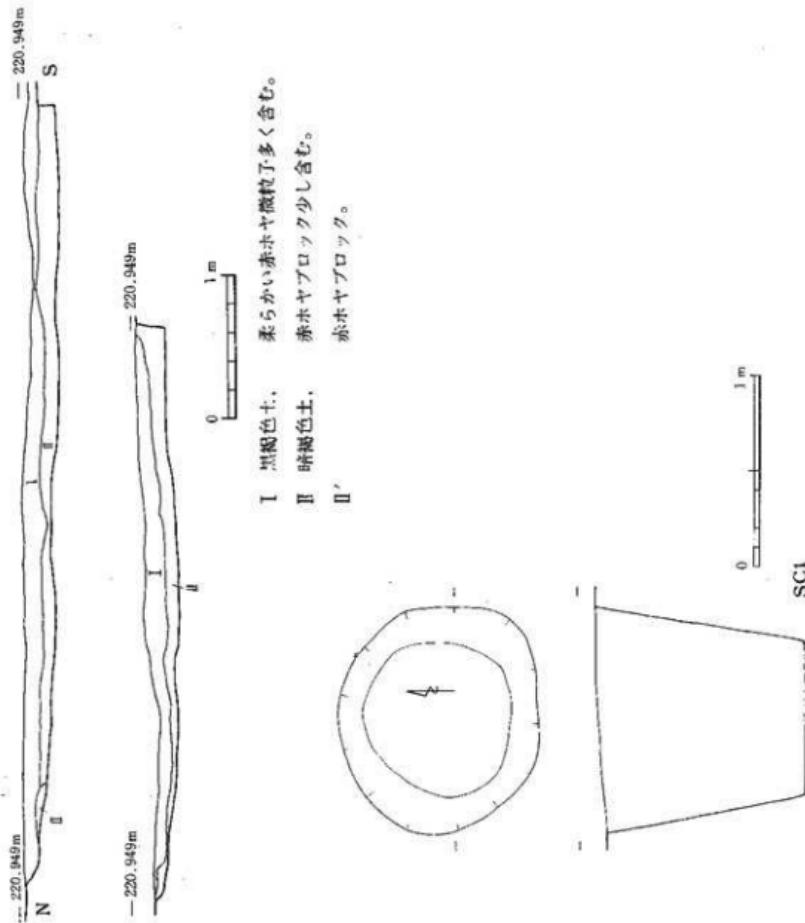
S A 4 はk-17に位置し、長径350cm、短径250cm+α、深さ31cmの円形プランである。南側は削平されている。この住居の真ん中に長径65cm、短径40cm、深さ15cmのピットがあり、そのピットの西側に長径20cm、短径15cm、深さ25cmのピットがある。

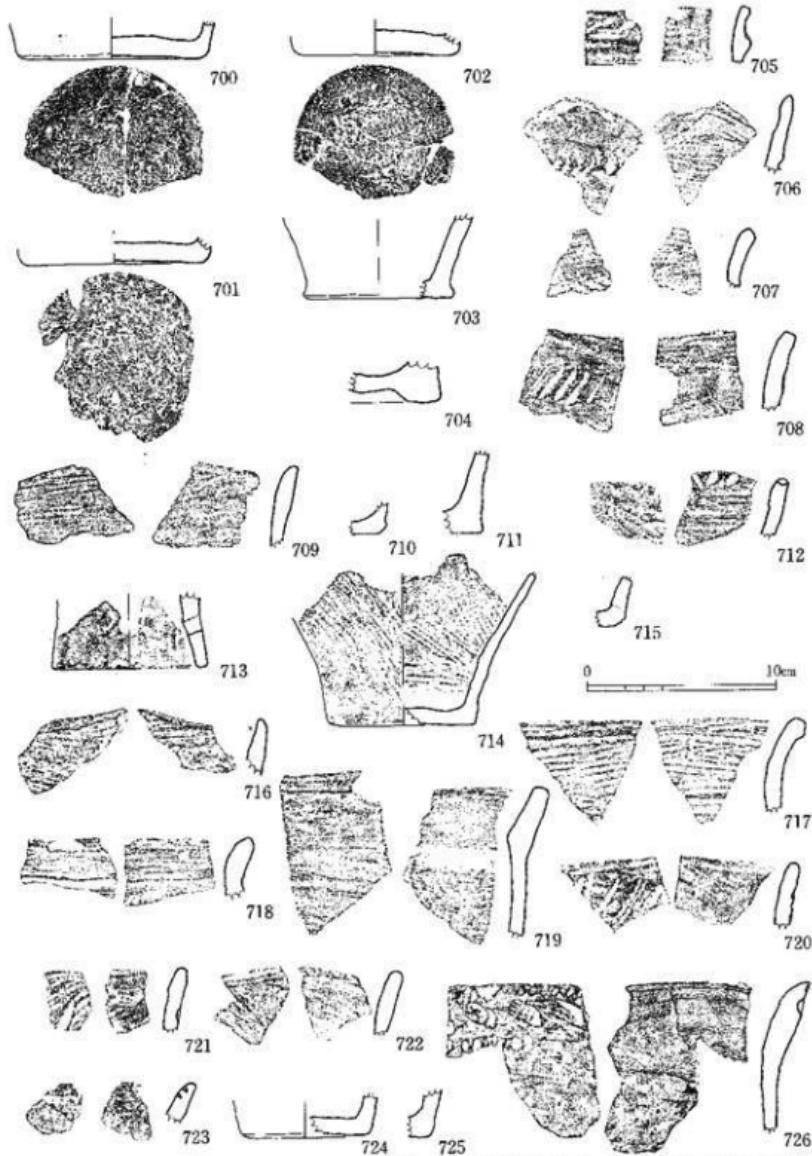
遺物は少量である。713は脚台付き皿の脚部で円形の穿孔を施している。底部は2点出土しているが網代底はない。714は底面から真直に立ち上がる底部で底面に白色物が付着している。



第64図 C地区SA2・SA3実測図

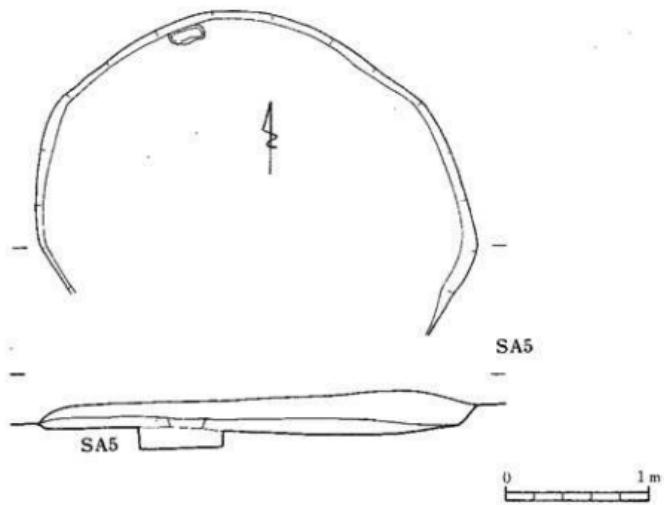
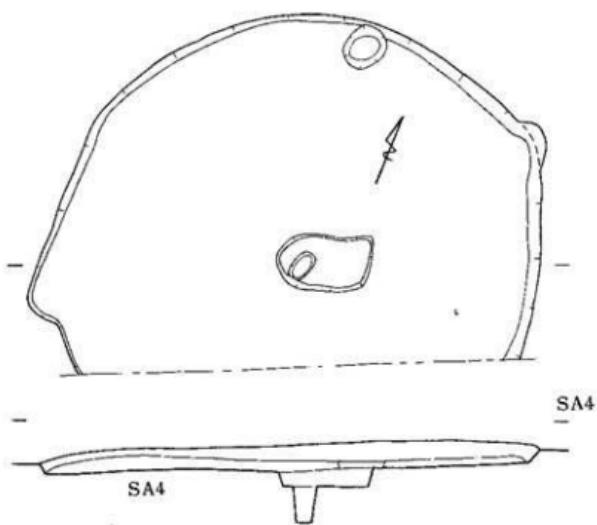
第65図 C地区 SA2・SA3 土層断面図、SC1実測図





第66図 楩文土器実測図 (32)

700~704	C地区 SA 1	705~711	C地区 SA 2
712	C地区 SA 3	713~715	C地区 SA 4
716~717	C地区 SA 5	718~719	C地区 SA 6
720~725	C地区 SA 7	726	C地区 SC 1



第67図 C地区SA4・SA5実測図

石器としては磨石1点(128)が出土している。

S A 4の時期は713・714の時期で、Ⅱ b期である。

**S A 5** (第66・67図)

S A 5はj・k-16に位置し、長径310cm、短径200cm+ $\alpha$ 、深さ12cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。717は口縁部が若干外反する平口縁の無文土器である。

S A 5の時期は717の時期で、N期である。

**S A 6** (第66・68図)

S A 6はk-14に位置し、南側は削平されており、長径325cm+ $\alpha$ 、短径75cm+ $\alpha$ 、深さ40cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。718は口縁部が短く外反し、1条に沈線を施しており、V c類に相当する。719は口縁部が短く外反する無文土器である。

S A 6は718のV c類の時期で、Ⅱ b期である。

**S A 7** (第66・68図)

S A 7はj・k-20・21に位置する。西側は削平されており、長径355cm、短径165cm+ $\alpha$ 、深さ9cmの円形プランである。

遺物は少量出土している。720はほぼ真直に伸びる口縁部に貝殻腹縁刺突文を施しており、Ⅳ d類に相当する。722は無文土器である。723は脚台付皿の皿部の口縁部に2条の刺突文を施しており、S A 1で出土している689と同一タイプである。2点の底部が出土しているが、網代底はない。724は底面からほぼ真直に立ち上がるもので、底径が6.8cmである。

土器片加工円盤は8.0gが1点出土している。

S A 7の時期は720のⅣ d類の時期で、N b期である。

(2) 土 坑

A地区で土坑が20基、B地区で1基、C地区で1基、E地区で4基検出された。

**A地区** (第69図)

**S C 1** (第12図)

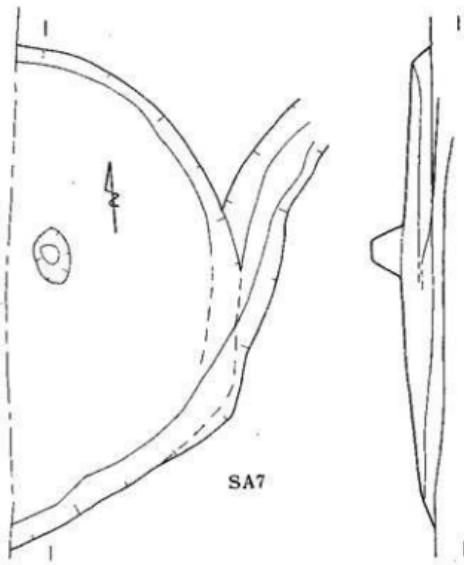
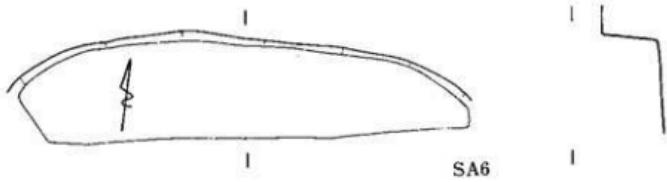
S C 1は長さ113cm、幅104cm、深さ21cmの規模で、不定形プランである。埋土はI層が炭化物と焼礫を含む暗赤褐色土層、II層が小礫を含む暗黄褐色土層である。

**S C 2** (第12図)

S C 2は長さ52cm、幅46cm、深さ73cmの規模で、楕円形プランである。埋土には炭化物と赤褐色のもろい小礫を多く含み、固く縮った層である。

**S C 3** (第70図)

S C 3は長径73cm、短径71cm、深さ22cmの規模で、円形プランである。



0 1 m

第68図 C地区SA6・SA7実測図

#### **S C 10 (第70図)**

S C 10は長さ173cm、幅96cm、深さ22cmの規模で、長軸が東西方向の梢円形プランである。S I 1を切っている。

#### **S C 12 (第71図)**

S C 12は長さ134cm、幅87cm、深さ15cmの規模で、長軸が北北西～南南東方向の梢円形プランである。埋土はI層が1～3cm程度の小礫を含む黒褐色土層で、II層が褐色土層である。

#### **S C 13 (第71図)**

S C 13は2基の土坑が切り合っている。S C 13Aは長さ240cm、幅115cm、深さ25cmの不定形プランであるのに対してS C 13Bは長さ151cm、幅65cm、深さ23cmである。

#### **S C 14 (第72図)**

S C 14は2基の土坑が切り合っている。S C 14Aは長さ188cm、幅103cm、深さ36cmの梢円形プランである。埋土は3層に分かれるが、炭化物・焼土は含んでいない。S C 14Bは長さ160cm、幅72cm、深さ18cmの不定形プランである。

#### **S C 15 (第73図)**

S C 15は長さ101cm、幅63cm、深さ32cmの規模で、長軸が南南西～北北東方向の不定形プランである。床面の一部が横穴状に潜り込んでいる。埋土は褐色の粘土粒径0.5～3cm程度のブロックを含む黒褐色土層(Hue 10YR 2/2)である。

#### **S C 16 (第73図)**

S C 16は長さ73cm、幅56cm、深さ19cmの規模で、長軸がほぼ東西方向の梢円形プランである。床面に2個の小ピットがある。埋土はI層が炭化粒を含む黒褐色土層(Hue 10YR 2/2)、II層が焼土を多量に、炭化粒を少し含む暗褐色土層(Hue 10YR 3/4)、III層が炭化粒・焼土を含まないにぶい黄褐色土層(Hue 10YR 2/2)である。

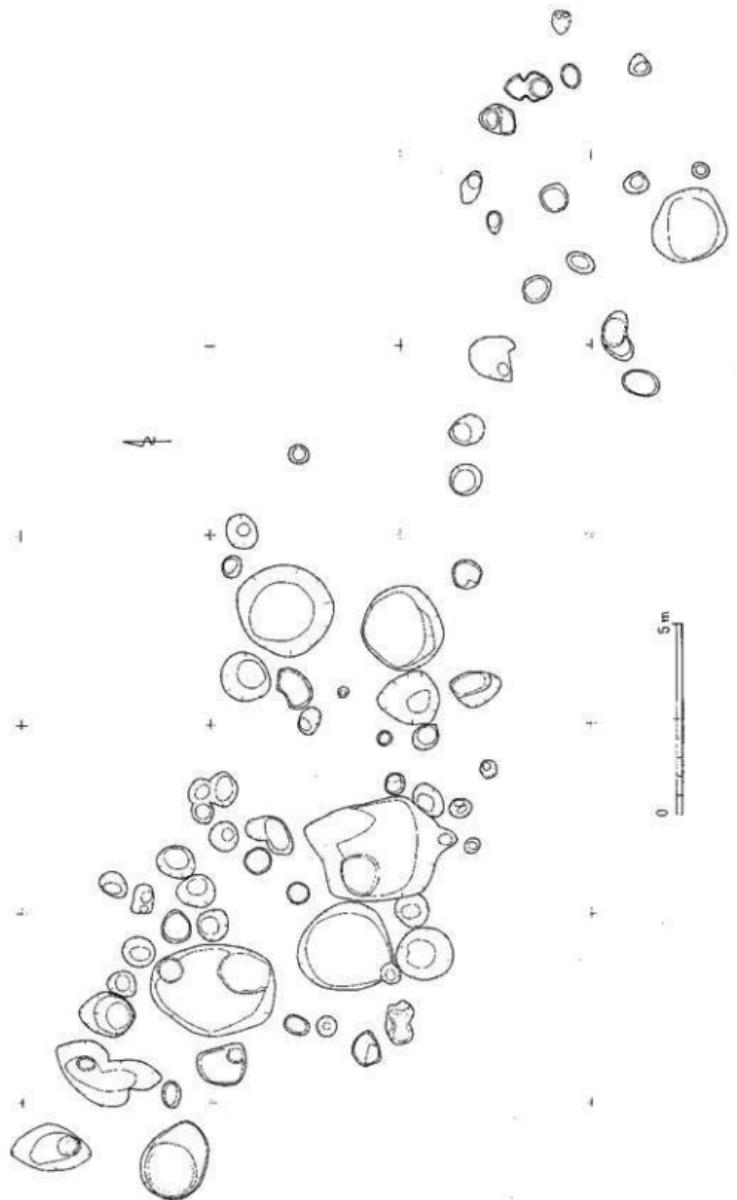
#### **S C 17 (第19・70図)**

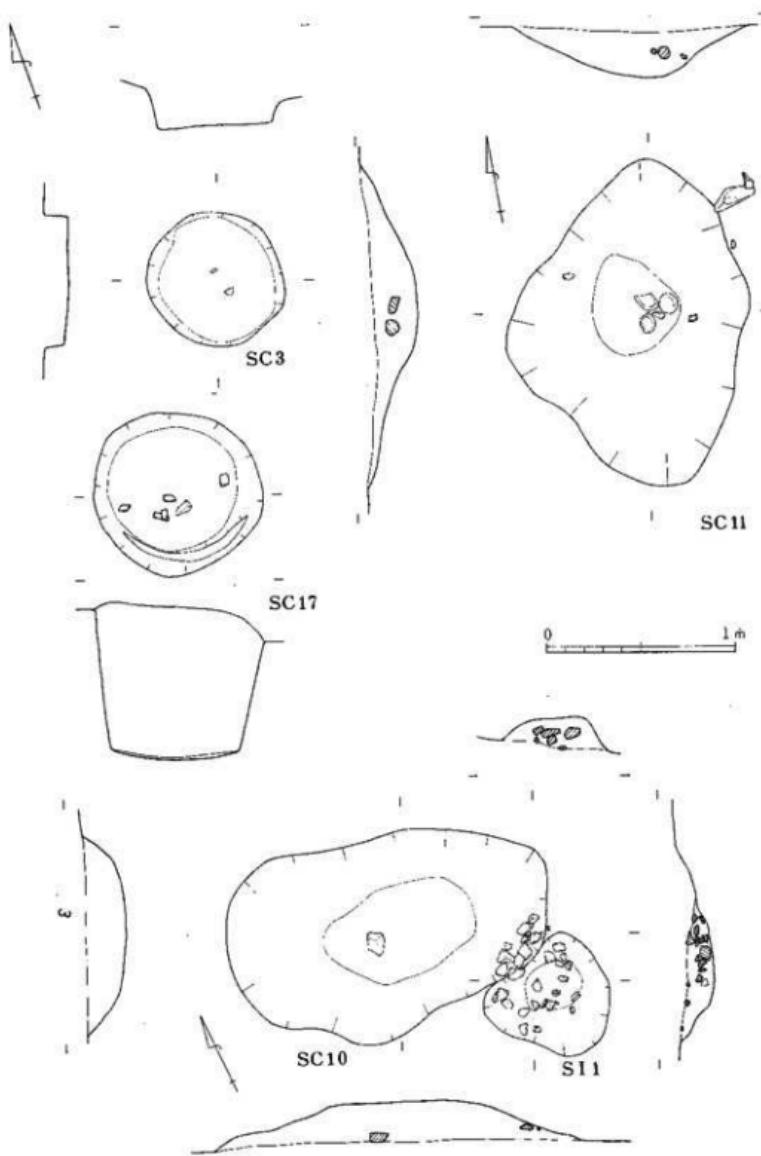
S C 17は長径90cm、短径88cm、深さ82cmの規模で、円形プランである。遺物は少量出土している。186は口唇部に貝殻腹縁による刻みを、ほぼ直口する口縁部に3条の沈線を施しており、II b類に相当する。187は3条の沈線を施しており、V c類である。188は波状口縁で沈線文を施しており、V c類に相当する。189は口縁部に粘土紙を2本貼りつけ、貝殻腹縁刺突文を施しており、1条の沈線と1ヶ所の穿孔がある。192は直口する無文土器である。2点の底部には網代底はない。194は底面から真直立ち上がる底部で、白色物の付着があり、底径10.0cmである。上器片加工円盤は14.0gと16.5gが各1点である。

#### **S C 18 (第19・73図)**

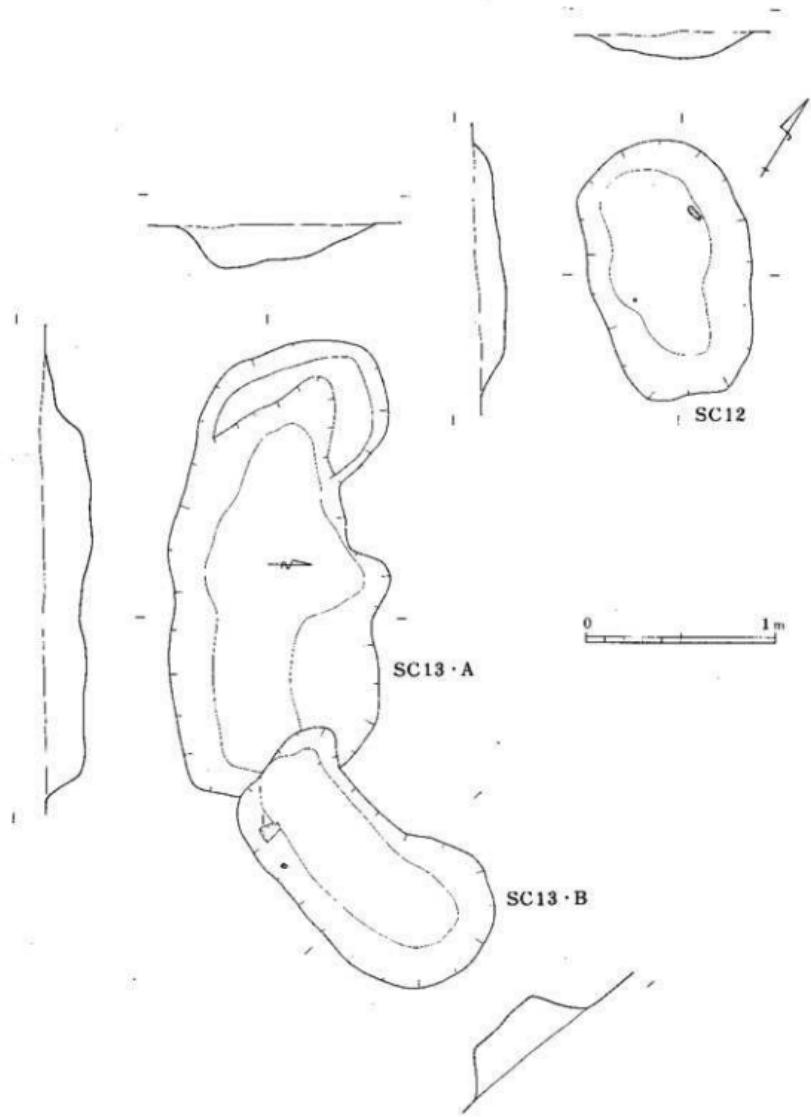
S C 18は長径105cm、短径94cm、深さ96cmの規模で、円形プランである。埋土はI層がア

第69图 A地区南部遗構分布図

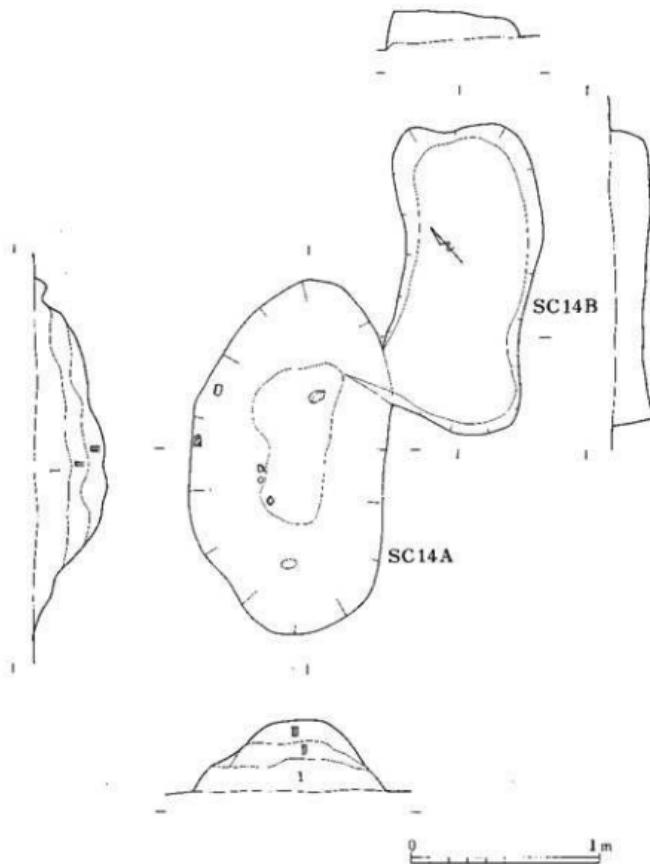




第70図 A地区SC3・SC10・SC11・SC17・SI1 実測図



第71図 A地区SC12・SC13実測図



- I 黒褐色土 (10YR 2/2) 粘性普通、固く締まりがよい。灰褐色粘土粒を僅かに含む。  
径1~3 mm程度の小礫及び白色粒子を含む。
- II 單褐色土 (7.5YR 3/4) 径0.5~2 cm程度の灰褐色の粘土ブロックを含む。黄褐色の  
バニスも僅かに含む。I層より粘性弱いが締まりはよい。  
白色粒子を僅かに含む。
- III にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 粘性強、スメリがある。灰褐色の粘土粒、黄褐色のバニスを  
小ブロック状に含み、手ざわりがざらざらしている。

第72図 A地区SC14実測図

カホヤ粒子を若干含む茶褐色土層、Ⅱ層がアカホヤブロックと木炭粒を若干含む褐色土層、Ⅲ層がアカホヤブロックと木炭粒を多く含む暗褐色土層である。Ⅲ層から土器と共に長さ40cm、幅15cm、厚み10cmの河原石と長さ33cm、幅20cm、厚み10cmの河原石が出土している。

遺物は少量出土している。172は波頂部に凹点を、口唇部に1条の沈線を、口縁部に沈線を施しておりVc類である。174は1条の浅い沈線の下位に縱方向の貝殻腹縫刺突文を施しており、VIIc類である。176は口縁部がほぼ直に伸び、口唇部は外傾し、網代底の底部は外に張り出してその上部が若干くびれている無文土器で、内外面とも貝殻条痕を施している。口径は梢円形で、長径22.8cm、短径20.7cm、器高22.0cm、底径9.3cmである。4点の底のうち網代底は1点である。底径は7.0cmと10.2cmが各1点である。181は底面から緩やかに大きく伸びる底部で、底面は貝殻条痕を施し、底径10.0cmである。

#### S C 19 (第19・73図)

S C 19は長さ141cm、幅94cm、深さ33cmの規模で、長軸が南北方向の梢円形プランである。北部は一段のベッド状を呈し、その際に径40cm、深さ17cmのピットがある。また径60cm、深さ44cmのピットに切られている。埋土は1層が木炭粒を若干含む明黄褐色土層(Hue 10YR 7/6)、Ⅱ層がアカホヤ混じりの黄褐色土層(Hue 10YR 5/6)である。

182は口唇部にヘラによる刻みを、口縁部には斜め方向の沈線を施しておりVc類に相当する。183は無文土器である。2点の底部のうち網代底は1点である。185は底径8.8cmの網代底で、底面から直に立ち上がっている。土器片加工円盤は7.9~40.0gに8点である。

#### S C 20 (第73図)

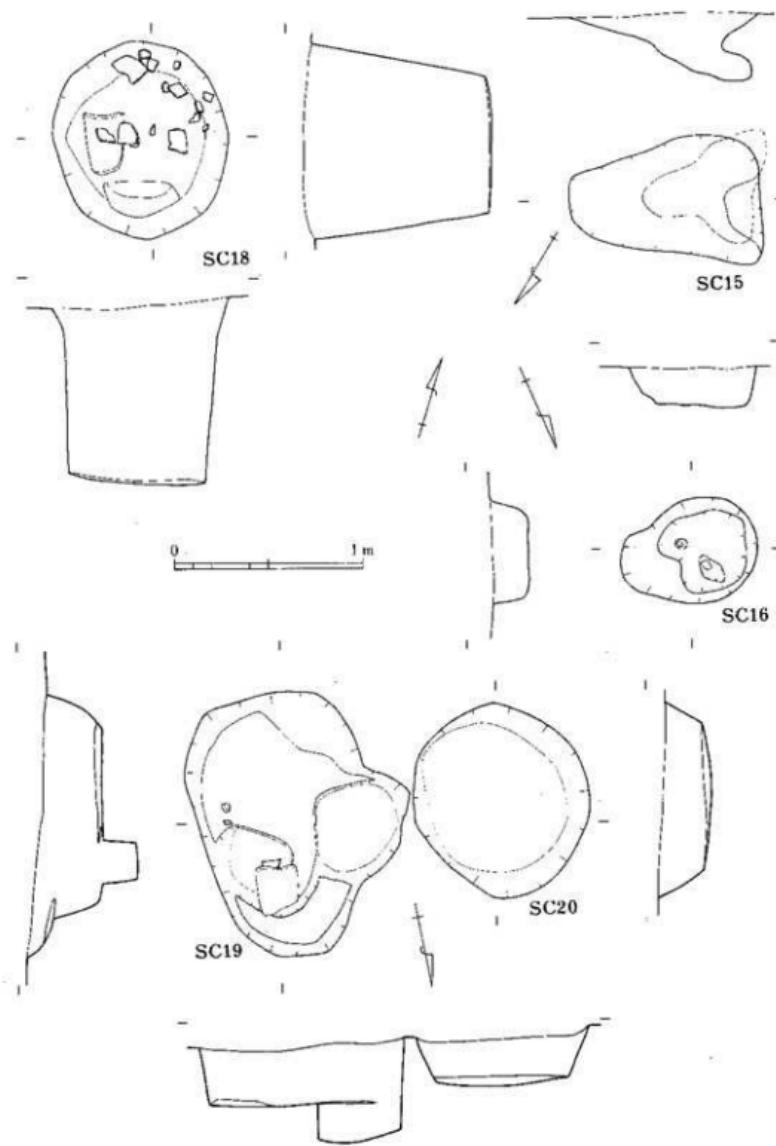
S C 20はS C 19の西側に近接しており、長さ104cm、幅94cm、深さ27cmの規模の梢円形プランである。

#### B地区

##### S C 1 (第58・62・74図)

S C 1はS A 6の東に近接するn-32に位置し、長径116cm、短径105cm、深さ85cmの規模で、長軸が南北方向の円形プランである。土層は4層に分かれ、I・Ⅲ層、Ⅳ層とV層の境から土器が多く出土している。土坑上面から652・653・655・659・661・665・666が、I層から657・660・662・664が、Ⅳ層の下部から654・656・661が出土している。またⅣ層とV層の境からは土器と重なるように長さ40cm、幅30cm、厚み12cmの河原石と長さ34cm、幅20cm、厚み11cmの河原石が出土している。

653は直口の口縁部に貝殻腹縫による刺突文とその下位に2条の沈線を施しており、Ⅱb類に相当する。654はほぼ直口する口縁部に細い沈線文を、656は口縁部が若干外反し、細い沈線文を施している。両者ともVc類である。657は短く外反する口縁部に2条の沈線を施



第73図 A地区SC15・SC16・SC18・SC19・SC20実測図

しており、Vc類に相当する。652は波頂部に3個の刻みを、口縁部に1条の沈線を施しており、Vc類に相当する。661は口縁部がほぼ直真に伸びるのに対して662は緩やかに外反し、661は大きく外反する。661～663はすべて平口縁の無文土器である。5点の底部のうち4点が網代底である。663が底面から斜め上方に伸びる以外は、665のように底面が外へ張り出してその上部が若干くびれており、特に666が張り出しが著しい。667は上げ底気味である。底径は9.0～9.4cmが2点、10.4cmが1点である。

SC1の時期は654・656のVc類の時期で、IIb期である。

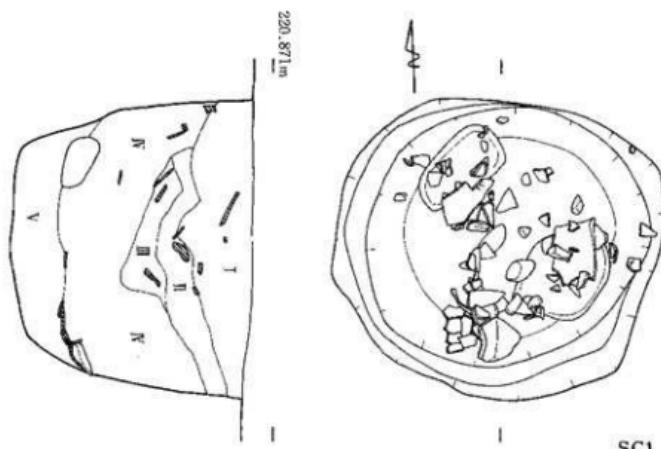
### C地区

#### SC1

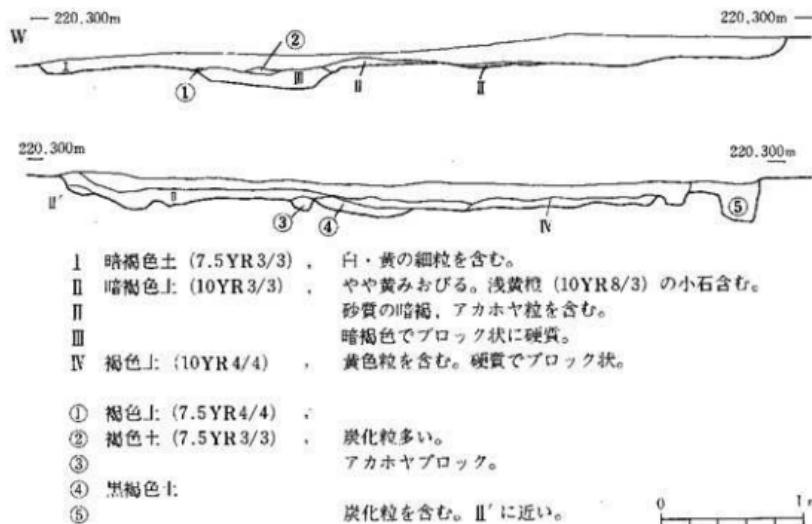
SC1はi・j-18に位置し、長径121cm、短径106cm、深さ112cmの円形プランである。

地区	住居	プラン	規 模 (cm)			柱穴	焼土	遺 物
			長さ(反径)	幅(短径)	深さ			
A	S A 1 A	隅丸方形	330	185+α	28	3		
	1 B	円 形	415	210+α	18	3		
	S A 2	隅丸方形	320	250+α	21	3	磨石2	
	S A 3	円 形	455	320+α	33	3 ○	石斧1	
B	S A 1	不 定 形	390	360	25	2	石鍬1	
	S A 2 A	方 形	475	340	13	2		
	2 B	方 形	400	400	9			
	S A 3 A	方 形	480	350	22		磨石2、敲石1	
	3 B	方 形	570	485	43	4	石斧1、石鍬1	
	3 C	円 形	360	350	43	3		
	S A 4	方 形	300+α	290	13	2	磨石1、石鍬1	
	S A 5	隅丸方形	380	340	34	3	磨石1、石斧1	
	S A 6	正 方 形	340	340	46	3	石鍬1	
	S A 7 A	円 形	330	315	28	5	石1、石斧1	
	7 B	円 形	330	315	28	4		
	S A 8 A	円 形	450	440	25	5	石斧1	
	8 B	円 形	450	440	25	5		
C	S A 9	円 形	360	360	6	1	磨石1、敲石1	
	S A 10	円 形	250	240	9	1		
	S A 11	円 形	340	280	36			
	S A 12	円 形	360	320	17			
	S A 13	円 形	280	280				
	S A 1 A	円 形	460	430	7	6 ○	石鍬1	
	1 B	円 形	425	410	22	3 ○		
C	S A 2	円 形	370	335	6	2	磨石1	
	S A 3	円 形	280	250	11	2		
	S A 4	円 形	350	250+α	31	2	磨石1	
	S A 5	円 形	310	200+α	12			
	S A 6	円 形	325+α	75+α	40			
	S A 7	円 形	355	165+α	9			

表1 桩穴住居観察表

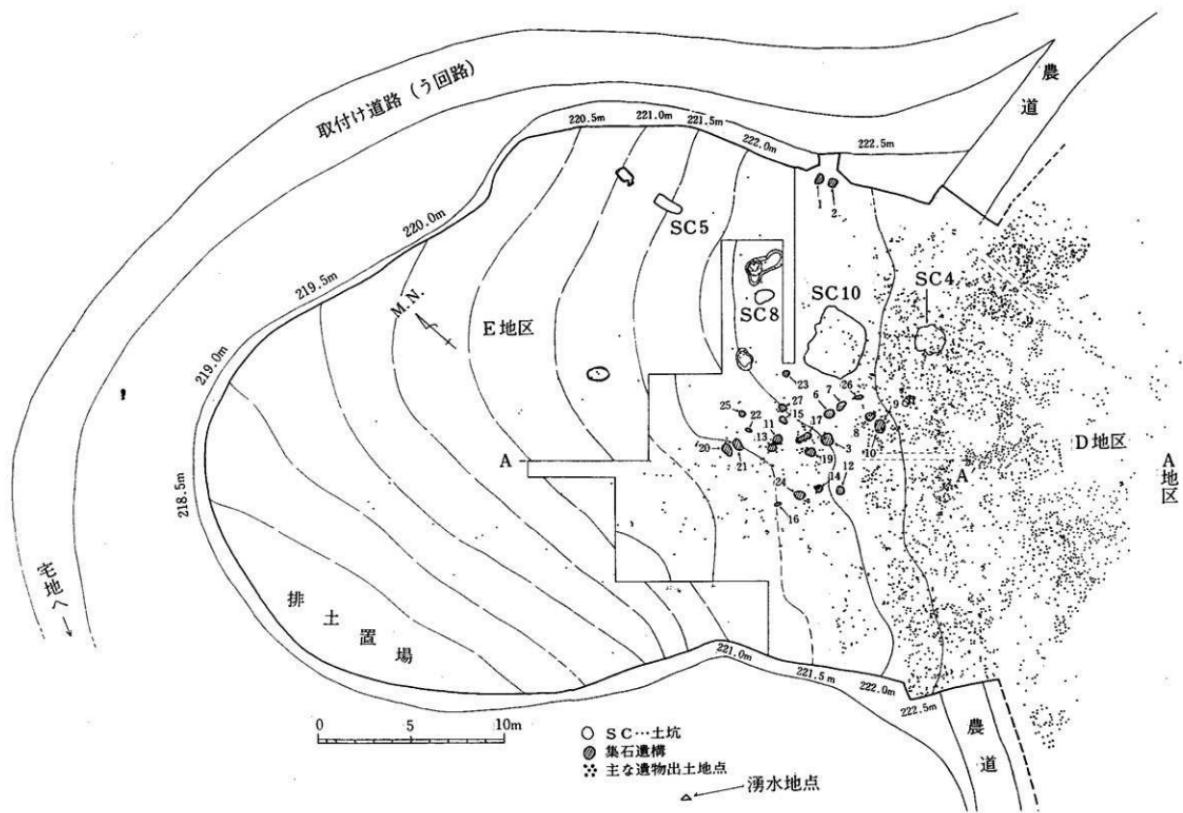


- I 暗褐色  
 II 暗～(淡)明褐色混。白っぽい粒が少し混る。  
 III 白色の粒子、多量に混入。  
 IV 暗褐色、炭化物、多く混入。アカホヤ少量混入。  
 V によい黄褐色土 (10YR 5/4) IV層より明るい、少量の白色粒とアカホヤ粒を含む。  
 粘性強、硬い黒褐色土塊を含む。7.5YR 3/1



- I 暗褐色土 (7.5YR 3/3) , 白・黄の細粒を含む。  
 II 暗褐色土 (10YR 3/3) , やや黄みおびる。浅黄橙 (10YR 8/3) の小石含む。  
 III 砂質の暗褐、アカホヤ粒を含む。  
 IV 褐色土 (10YR 4/4) , 黄色粒を含む。硬質でブロック状。  
 ① 褐色土 (7.5YR 4/4)  
 ② 褐色土 (7.5YR 3/3)  
 ③  
 ④ 黑褐色土  
 ⑤

第74図 B地区 SC1 実測図、SA2 土層断面図



第75図 E地区遺構配置図及び遺物分布図

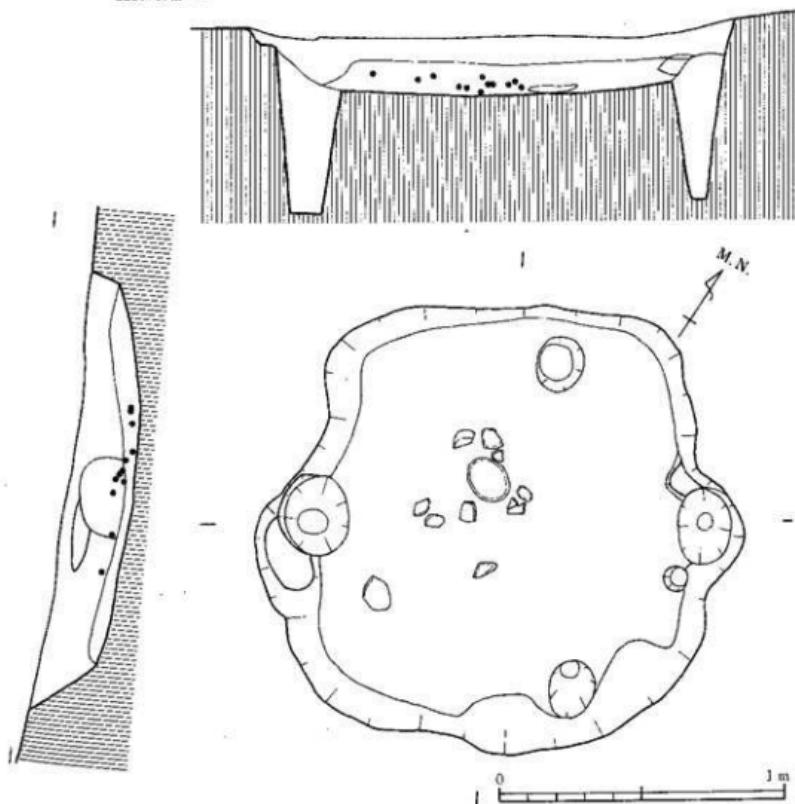
## E地区

調査区の東半部を中心に11基検出したが、その半数以上は底面に著しい搅乱が見られた。これらは木根跡と思われるもので、それ以外の人为的な土坑と考えられるのは次の4基である。

### SC 4 (第75図、第76図)

土器密集区東側中央の包含層最下部より約20cm下の面で検出した。検出面から床面までの深さは、中央で約25cm、北西壁付近で約10cm、南東壁付近で約20cmである。平面プランは、およそ155cm×165cmの隅丸方形を呈し、両端に深さ40cm前後のピットを有する。床面は、強い粘性を帯びた暗黄褐色シルト質上層(E地区M層、第5図)に掘り込まれている。

222.767m —



第76図 E地区SC 4 遺物出土状況及び遺構実測図

遺物は、土坑のほぼ中央付近で出土している。そのうち、主な土器片を図化した（第77図）。1は、深鉢形土器の口縁部片である。

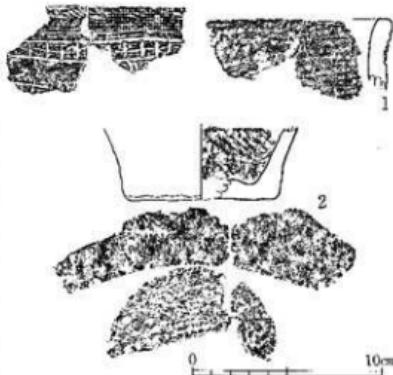
口唇部には、貝殻殻表によると思われる押圧痕が、口縁部には、1条の沈線文とその下に3条の沈線文の間に貝殻腹縁連続刺突文を施した文様が見られる。この文様は、さらにその下にも続くものと思われる。器面調整及び色調は、外面ナデでにぶい褐色、内面は横方向の貝殻条痕文の上を横ナデし、内面は浅黄橙色を呈する。2は、全体に風化気味の平底の底部片である。外面にぶい橙色で横ナデ、内面橙色で貝殻条痕文と思われる地文の上を横ナデしている。底部はナデ調整であるが、拓本で見ると中央に網代痕が残るようである。

#### SC 5 (第75図、第78図)

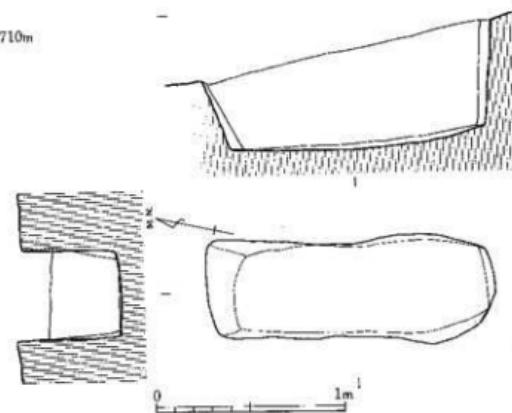
東側斜面上の表土 221.710m  
直下で検出した。埋  
土はアカホヤ層の風  
化したものである。  
検出面から床面まで  
の深さは、南側で約  
56cm、北側で約37cm。  
床面は、南北で約10  
cmの比高差がある。  
平面プランは、約154  
cm × 49cm の隅丸の  
長方形を呈している。

#### 埋土除去中に遺物が

ごく少量出土している。主なものを図化した（第79図）。1・2は、横ナデ調整された無文深鉢形土器である。3は、外面に太めの沈線文が2条見られ、調整は横ナデである。4は、横ナデ調整された底部片である。色調は、2～4の外面がにぶい黄橙色、1の外面がにぶい橙色、1・4の内面が浅黄橙色、2は浅黄色、3はにぶい黄橙色を呈している。SC 5では、このほかに無文土器の口縁部片2点と胴部片1点が出土している。



第77図 E地区SC 4出土遺物実測図



第78図 E地区 SC 5 遺構実測図

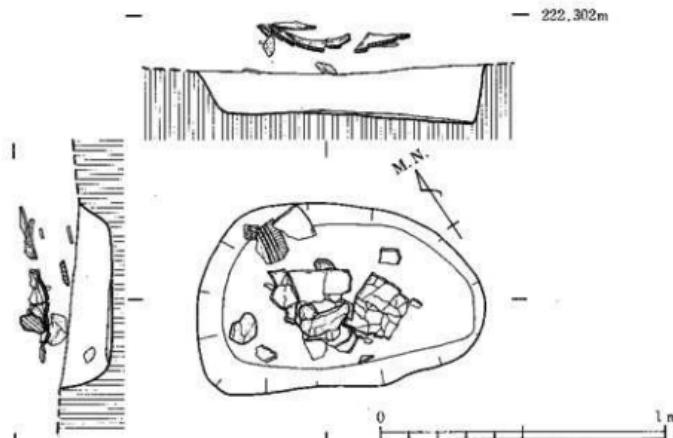


第79図 E地区 SC5 出土遺物実測図

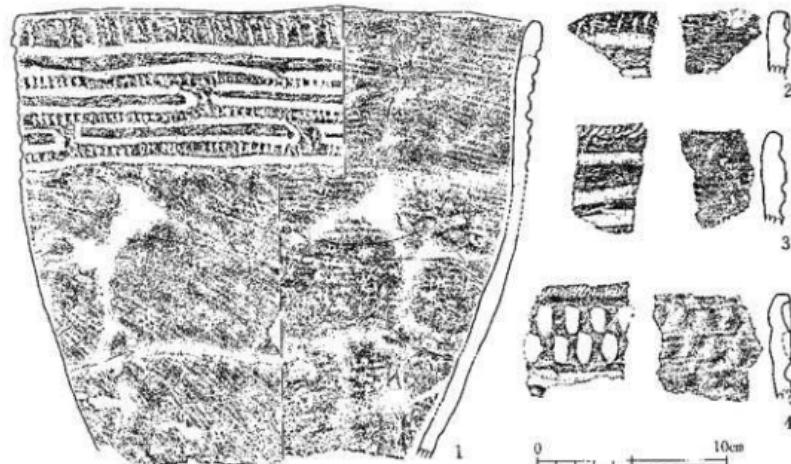
SC8 (第75図、第80図)

土器密集区と集石遺構集中箇所の北側で、表土除去後、風化したアカホヤ面に遺物が集中した状態で検出された。しかし、埋土と周辺の土との識別は困難で、さらに10~15cmほど掘り下げてアカホヤ火山灰層上面でその輪郭を確認した。遺構検出面での平面プランは、約100×65cmの梢円形である。検出面から床面までの深さは、南東側壁付近で約20cm、北西側壁付近で約15cm。遺物の出土面から床面までの深さは、中央で約22cmを計る。床面近くの埋土には小さな炭化物や焼土塊が見られた。

遺物は、土坑中央上部で出土している。底部を除く一個体分の土器とそのほか数個体の口縁部の小破片及び剥片、3~4個の焼石などが出土した。このうち、特徴のある土器を図化した(第81図)。1は、口径27.6cmで底部と口縁部の一部を欠く。遺物出土状況図の土器は



第80図 E地区SC8 遺物出土状況及び遺構実測図



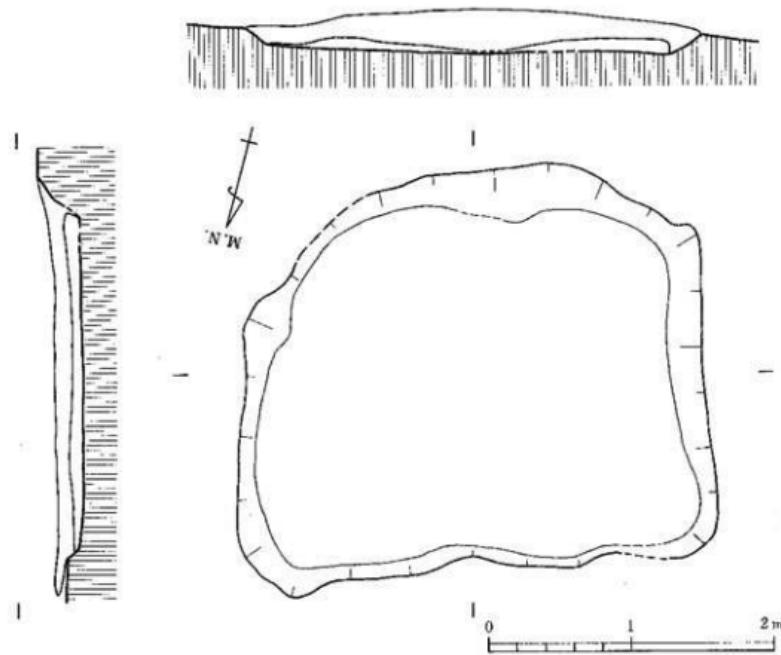
第81図 E地区SC 8出土遺物実測図

殆どこの土器である。器面調整は、貝殻条痕文の上をナデ。色調は、内外ともにぶい橙色である。口唇部は横ナデされるが、部分的に貝殻腹表によると思われる浅い押正刻みが残っている。口縁部には、縦方向の貝殻腹縁連続押正文、その下に太めの沈線文を2条、さらには下には端を円く閉じた長方形状の沈線文を2段、そして最後に、1条の沈線文を巡らしている。上から2本目の沈線文と最下部の沈線文との間は、長方形状の沈線文の中を除いて、すべて貝殻腹縁の連続刺突文で埋められている。Ⅴa類。2は、口唇部横ナデ、口縁部は縦方向の貝殻腹縁連続押正文、その下に太めの沈線文が数条施されている。器面調整はナデである。外面暗褐色、内面にぶい橙色を呈する。Ⅴb類。3は、器面調整ナデで、口唇部には貝殻によると思われる押正痕が、口縁部には太めの沈線文が3条見られる。内外とも淡黄色を呈する。4は、外面ナデ、内面具貝条痕文の上を横ナデしている。口唇部には、貝殻腹表によると思われる浅い押正刻みが施され、口縁部は、内面側がてこぼこになるほど強い連続刺突文が施されている。その下には、太くて深い沈線文が2条見られる。外面浅黄橙色、内面淡黄色を呈する。

#### SC 10 (第75図、第82図)

上器密集区の北端付近で輪郭の不明瞭な落ち込みとして確認した。トレンチを入れて輪郭を確認しようと試みたがわからず、わずかな土色と土質の違いをもとに埋上と思われる土を除去したところ、 $318 \times 269\text{cm}$ の隅丸の長方形プラン、検出面からの深さが中央で約20cmの斜面の立ち上がりが緩やかな浅い土坑となつた。遺物の出土量はごく少ない。

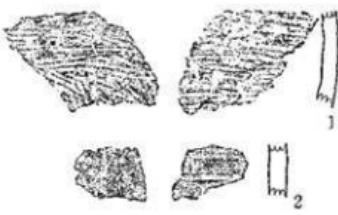
出土遺物は、土坑の時期を示すような特徴的なものが殆ど見られなかつたため、2点のみ



第82図 E地区SC10造構実測図

図化した(第83図)。1は、外面は貝殻条痕文の後、一部ヘラナデと思われる調整がなされ、内面は浅くて不明瞭な貝殻条痕文かあるいはヘラナデ調整かと思われる。外面にはススが付着している。特徴的なのは、胎土に2mm以下の黄色い降下軽石粒のような物質を多量に含んでいることである。

外面浅黄褐色、内面淡黄色を呈する。2は、両面ともに丁寧にナデ調整された土器である。内外ともに赤褐色を呈する。1～2ともに埋土の中から出土した。焼成や調整、胎土や色調など縄文時代早期や前期の遺物とは考えがたく、後期の遺物として報告した。



第83図 E地区SC10出土遺物実測図

### (3) 集石遺構

集石遺構はA地区で3基、B地区で27基検出された。

#### A地区

##### S I 1

S I 1は長さ172cm、幅126cm、深さ23cmの不定形プランの土坑に、石皿1と磨石1が1層の中位に集石している。埋土はI層が炭化物を含む黒褐色土層(Hue 7.5YR 3/2)、II層が炭化物を含まない褐色土層(Hue 10YR 4/6)である。

##### S I 2(第70図)

S I 2は長さ61cm、幅46cm、深さ18cmの楕円形プランの土坑に、割れている石皿や砂岩の円礫を配置している。石はすべて火を受けて、ひびが入っている。埋土には炭化粒を含んでいるが、焼土は含んでいない。

##### S I 3(第70図)

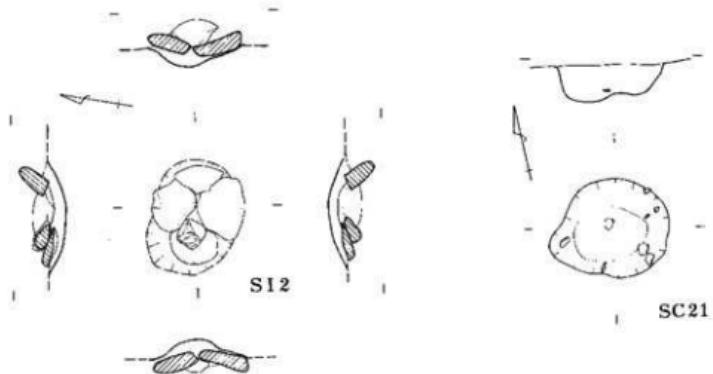
S I 3は長さ132cm、幅102cm、深さ28cmの不定形プランの土坑に、石皿や円礫を配置している。

#### E地区

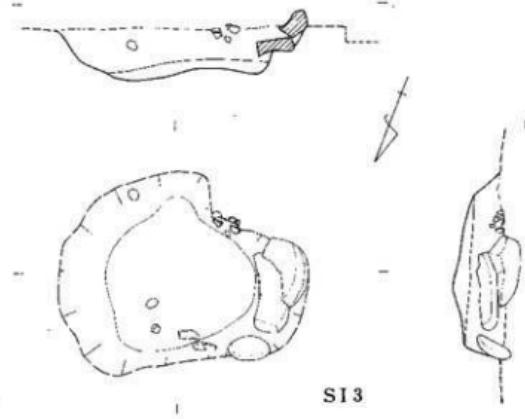
集石遺構は、土器密集区の中央北西端部から約10m以内に亘りに近接して大小25基、その東端から約10m東側に2基の計27基が検出された。地形的には、西向きのややくぼんだ緩斜面上に営まれている。これらは、大部分が加熱されて赤変したり脆くなったりしている大小の焼礫を用いて作られており、その形態上、次の3種類が見られる。1. ほぼ円形に並べたように焼礫が見られたり、石皿や台石状の大きな石を圍むように焼礫が見られるもの。2. この地方の縄文時代早期の一般的な集石遺構に類似して、焼礫が一箇所にかたまって見られるもの。3. 少量だが、ある程度焼礫がかたまって見られるものなどである。この焼礫自体は、包含層中にしばしば見られたが、かたまって検出されたものはない。また、集石遺構は、S I 1・2などアカホヤ火山灰層の残りが良いところでは、風化アカホヤ層の下部からアカホヤ火山灰層上面で検出され、そのほかの集石遺構は、遺物包含層下部からごく薄くしか残っていないアカホヤ火山灰層あるいはその下層の上面で検出されている。一方、集石遺構内あるいは直上で出土している遺物は後期前半代の土器であり、従ってこれらの集石遺構は、縄文時代後期のものと考えられる。

##### S I 1(第85図)

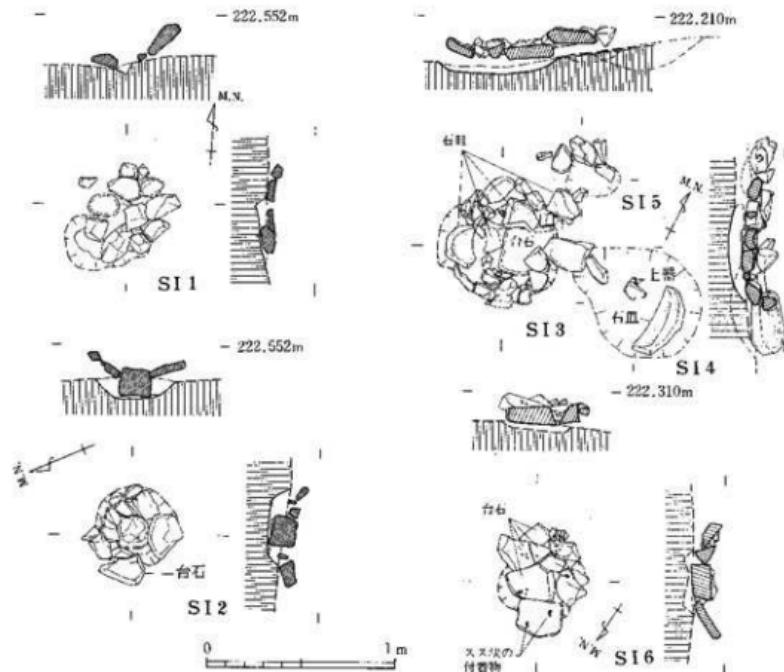
アカホヤ層直上で検出。覆土は風化したアカホヤである。わずかに赤変した比較的大きな石を用いる。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物粒を含む柔らかな風化アカホヤ土を除去すると不定形な土坑になった。この土坑と遺構の中心とは離れている。遺物は伴わない。



0 1m



第84図 A地区SC21・S12・S13実測図



第85図 E地区SI 1~6 遺構実測図

### SI 2 (第85図)

風化アカホヤ層の下部で検出。土器は伴わない。中央に大きめの石を置き、その周囲は偏平な石で囲まれている。いずれの石も赤変している。集石遺構の下部のアカホヤ層上面で掘り込みを確認した。埋土は、微量の炭化物を含んだ黒褐色土である。

第132図8は、遺構中出土の台石と思われるものである。

### SI 3~SI 5 (第85図)

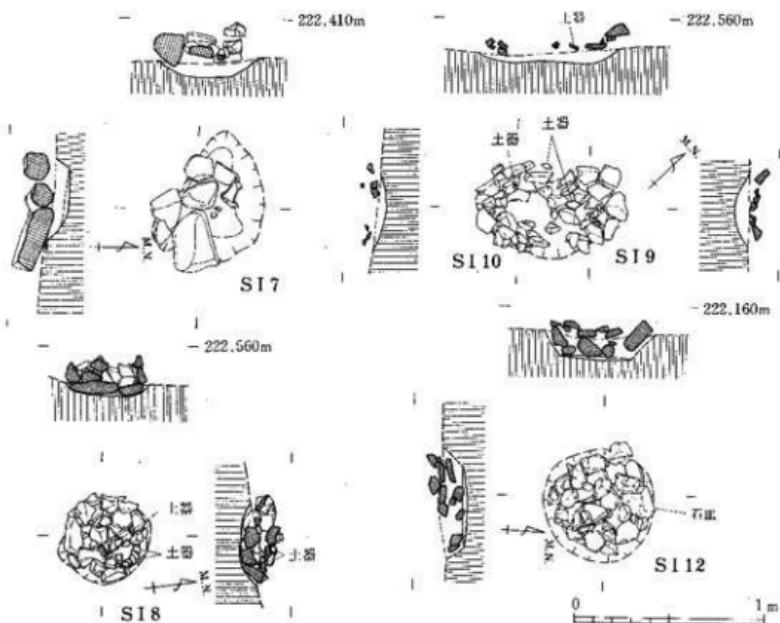
SI 3は、中央に石皿の破片が、そして周囲には大小の石が見られる。SI 4~5は、石の数は少ないが、ある程度のかたまりと見て番号を付けたものである。SI 4にも石皿片が見られる。これらは、いずれも下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物や微量の焼土を含む柔らかな黒褐色土が堆積していて、それを取り除くと不定形の浅い皿状の土坑になった。

遺物は、縄文土器と石器が出土している。第91図1は、SI 3の直上約5cmで出土したもので、器面は貝殻条痕文の上をナデ調整し、外面に太めの2条の沈線文が見られる。2は、

S I 3 の20数cm上で出土したもので、器面調整は、貝殻条痕文の上をナデ、口縁部先端がわずかに丸く肥厚し、外面の短くくびれたあたりには貝殻腹縁の連続刺突文が施されている。1がV c類、2はⅢ b類である。3は、S I 4 の数cm直上で出土したもので、器面は貝殻条痕文の上を横ナデし、外面には、強い凹線気味の横ナデの下に低い突帯の後と思われる刺離痕が見られる。4は、S I 4 の落ち込みの中から出土したもので、砂粒を多く含む胸部片である。一方、石器は、S I 3 から第130図1の石皿と2の石皿が出土している。1は4個に割れていたもので、2は中央が若干くぼんだ台石状のものである。第131図3は、S I 4 出土の石皿である。S I 5 は遺物を伴っていない。

#### S I 6 (第85図)

比較的大きめの石で構成されている。中央には第131図4の石皿と思われるものが置かれている。これらの石の上には、液状のものが垂れたような黒いシミが見られる。構造の下部には明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物を含んだ黒色土を取り除くと浅い土坑になった。



第86図 E地区S 17~10・12 遺構実測図

### S I 7 (第86図)

比較的大きめの濃淡の異なる赤変した石で構成される。遺物は伴わない。遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、炭化物を含んだ柔らかな黒色土を除去すると不定形の土坑になった。遺物は伴わない。

### S I 8～S I 10 (第86図)

土器密集区包含層下部で、互いに近接して検出された。S I 8は、大小の焼石で構成され、外周は偏平な横長の石を浅い円形の掘り込みに立て掛けるように置いてある。掘り込みの埋土は、炭化物を含んだ柔らかな暗褐色土である。石に接して第91図5～7の土器が出土している。5は貝殻条痕文の上をナデ調整し、外面のややくびれたところに貝殻腹縁の刺突文が見られる。口縁部の丸く肥厚した状態からⅤb類と思われる。6はナデ調整の厚手の無文土器、7は貝殻条痕文の上をナデ調整した土器である。

S I 9～10は互いに接している。中央部に石が少ないためか、石を円形に並べているよう見える。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、土の柔らかな部分を取り除くと浅い皿状の不定形の土坑となった。遺物は、S I 9の中央部から第91図8の網代底の無文土器の底部が、S I 10の石の下から9の太めの沈線文を施した土器が出土している。

### S I 11・S I 13 (第87図)

互いに近接している。S I 11は、明確な梢円形の掘り込みを持つもので大小の石で構成されている。中央部に比較的偏平な石が置かれ、その上にも小さな石がのっている。大きな石は脆くなっている。S I 13は、中央部に台石状の大きな石（第132図7）が見られ、その周囲は比較的大きめの石で取り囲んだように見られるものである。石は脆くなっているものが多く、台石直下の土は部分的に赤く焼けた焼土となっている。遺構の下部に明確な掘り込みは見られなかったが、炭化物を含んだ柔らかな土を取り除くと不定形の土坑になった。土器は伴っていない。

### S I 12 (第86図)

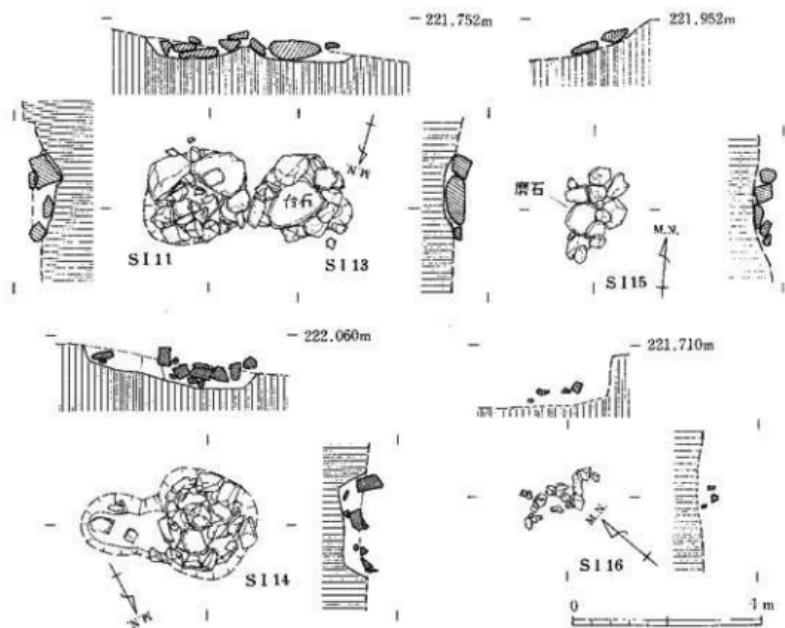
集石遺構の周間に黒褐色の埋土が見られ、明確な円形の掘り込みが確認できた。この土坑の中には、焼けた大小の石が詰まっており、第132図5の石皿片も混じっていた。

### S I 14 (第87図)

集石遺構の周間に黒褐色の埋土が見られ、明確なほぼ円形の掘り込みが確認できた。石は、大小の赤変した石のみを用いている。この遺構の南東側には、円形の掘り込みが統合しており、こちらは焼石の数は少ない。埋土はS I 14のよりもやや明るい黒褐色である。

### S I 15 (第87図)

やや大きめの石で構成されている。明確な掘り込みは見られなかったが、間の黄褐色パミス粒を含んだ暗褐色の覆土を取り除くと浅い皿状のくぼみになった。



第87図 E地区S 111・13~16遺構実測図

遺物は、中央から第133図9の石器が出土している。これは、擦り磨いた面と敲打痕とが見られるもので、磨石・敲石である。

#### S 116 (第87図)

試掘坑にかかったため、石をいくらか抜き取ったところで検出した。比較的小さな焼石が不定形にかたまっており、また、その下部は攪乱を受けていて土坑などの掘り込みは確認できなかった。遺物も伴っていない。

#### S 117~S 118 (第88図)

S 117は大きめの石で、S 118はそれよりやや小振りの石で構成され、互いに近接してそれでおまわりを見せている。S 117の下部には何等の遺構も見られず、S 118の下部にも微量の焼土や炭化物は見られたものの、遺構は確認できなかった。これらは、アカホヤ層下部の黄褐色バニスの上で検出された。遺物は伴わない。

#### S 119 (第88図)

遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、積み重なった大小の焼石を取り除くと、ほぼ精円形の浅い土坑になった。これらの石は脆くなっているものが多い。遺物は包含層下部で検出された。遺物は伴っていないが、周辺ではⅧb類やⅩ類の北久根山式精製鉢形上

器片などが出土している。

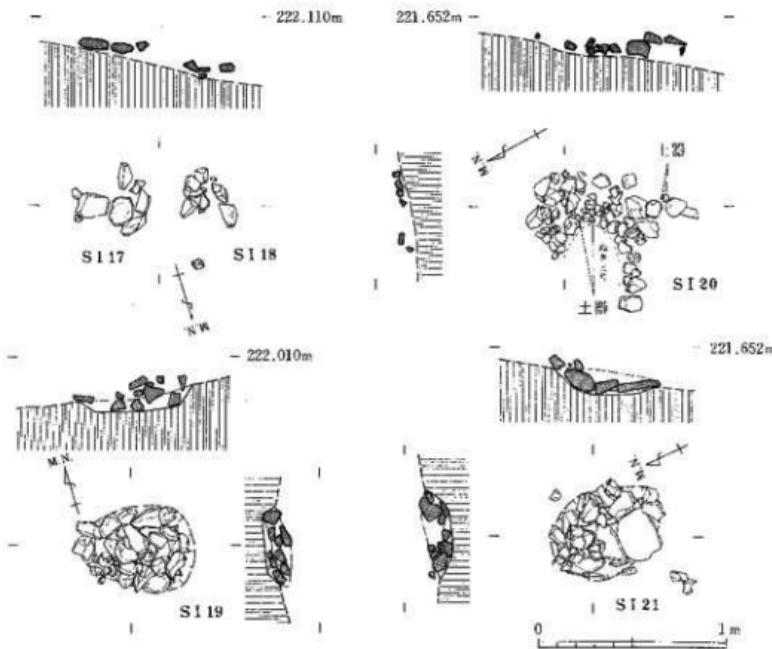
#### S I 20 (第88図)

発掘調査中に誤って石を抜き取ってしまったため、遺構の形態は不定形なものになっている。本来は、大小の焼石が梢円形状に集まっていたものと思われる。石は比較的小型のものが多い。遺構の下部は風化したアカホヤ層で掘り込みは確認できなかった。

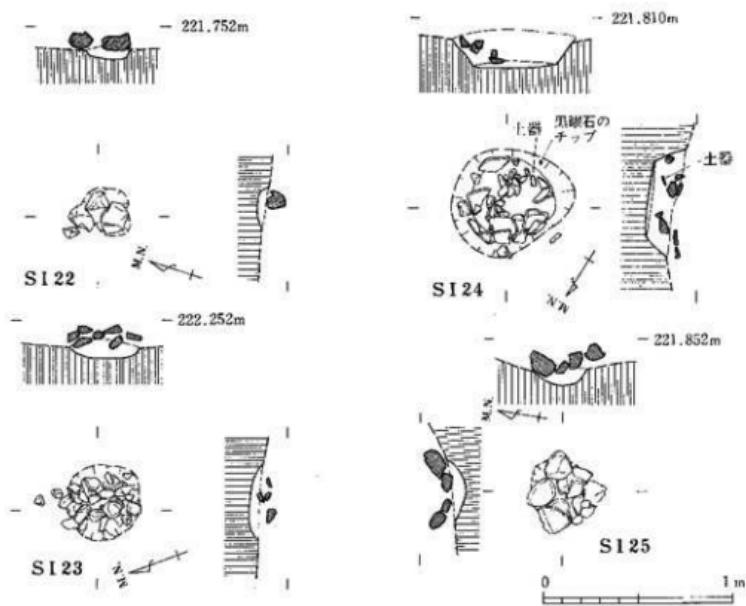
石の間から上器片が出上している。第91図10は、口縁部に縦方向の貝殻腹縁連續押圧文を施し、その下には沈線文が3条見られる。また、口唇部をまたいで粘土の貼付文も見られる。内面は貝殻条痕文の上をナデ、外面はナデである。II b類であろう。11は、外面丁寧な綱ナデ、内面横ナデの無文土器である。12は、内外とも貝殻条痕文の上をナデ調整した無文土器である。

#### S I 21 (第88図)

大小の焼石で構成されている。遺構の周囲に明確な掘り込みが見られた。土坑の埋土は、炭化物を含んだ暗褐色土である。遺物は伴わない。



第88図 E地区S I 17~21遺構実測図



第89図 E地区S122~25遺構実測図

#### S122(第89図)

大きめの焼石が4個のみである。周囲にはほかに焼石も見られなかったため、集石遺構として扱った。下部に明確な掘り込みは見られなかったが、柔らかな土を取り除くと不定形の浅い土坑になった。遺物は伴わない。

#### S123(第89図)

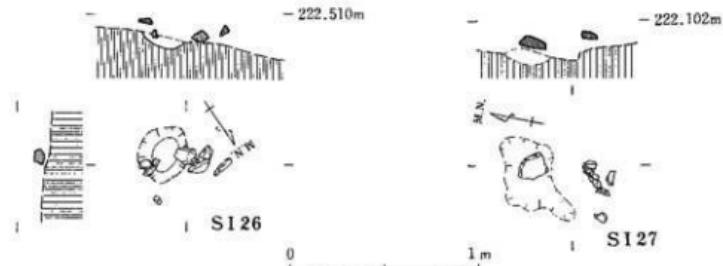
遺構の周囲に明確な掘り込みが確認でき、微量の炭化物を含んだ黒褐色の埋土を取り除くと円形の浅い皿状の土坑になった。遺物は伴なっていない。

#### S124(第89図)

大小の焼石がまばらに見られる明瞭な掘り込みが確認できた。この土坑は、梢円形気味のやや深めのもので、埋土は炭化物を含んだ黒褐色土である。石は脆くなっているものが多い。土坑の中から黒曜石のチップと土器片が出土している。第91図13は、浅い沈線文が2条見られる胴部片で、ナデ調整されている。

#### S125(第89図)

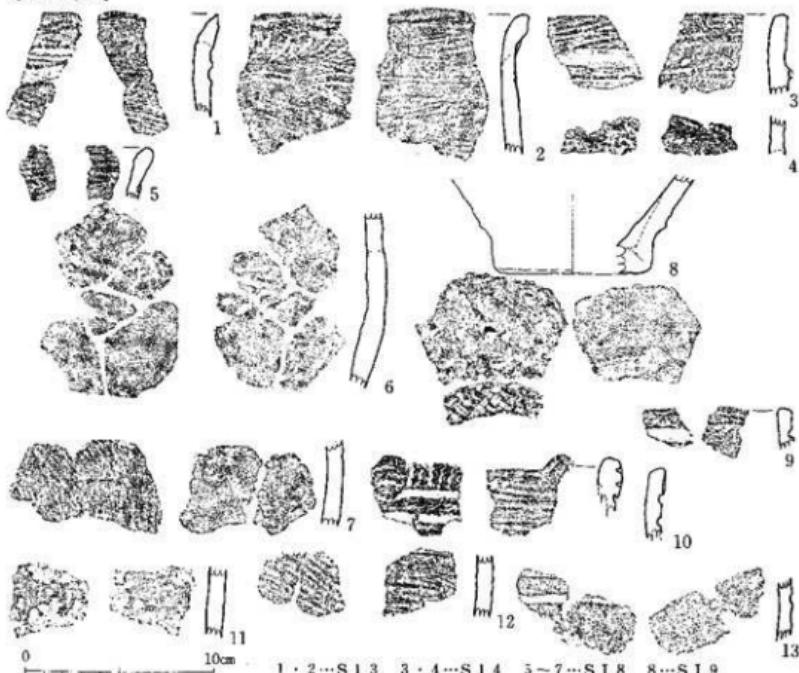
大きめの焼石で構成される。遺構の下部に明確な掘り込みは確認できなかったが、炭化物を含んだ柔らかな暗黄褐色土を取り除くと、円形で椀状の土坑になった。遺物は出土していない。



第90図 E地区S 1 26~27遺構実測図

### S 1 26 (第90図)

アカホヤ層下部で焼石の不定形なかたまりとして検出された。遺構の下部には、炭化物を含んだ柔らかな暗褐色土が見られ、それを除去すると、浅い掘り込みになった。遺物は出土していない。



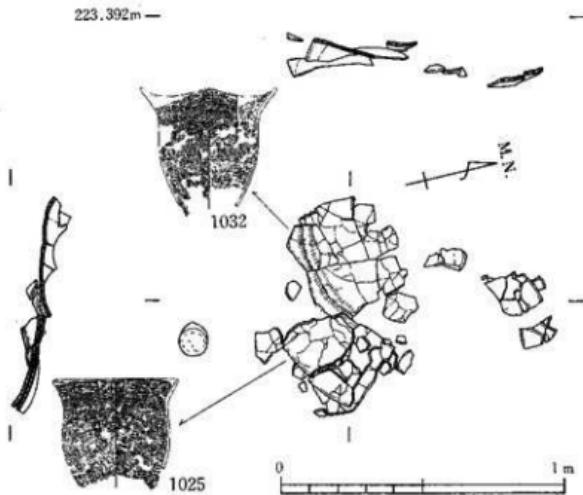
第91図 E地区集石遺構出土土器実測図

## S I 27 (第90図)

周囲に焼石が見られない中で、大小少量の焼石がかたまっていたため、集石遺構として取り扱った。遺構の下部は、わずかに黒っぽく見えるものの、掘り込みらしきものは確認できなかった。黒っぽい土を取り除くと不定形の浅い土坑となる。遺物は伴わない。

### (4) 土器密集区

本遺跡では、A・B各地区の遺構群の北側の包含層及びD地区（A地区の北端部）とそれに続くE地区の南東部の包含層で多量の遺物が出土した。中でもD地区及びE地区的南東部は、土器を中心に特に遺物が集中しており、一次調査では「土器溜り」、二次調査では「土器密集部」として概要報告している。この土器の密集した状態を遺構と見ると、次のような検出状況及び特徴が指摘できる。1. 地形的には、A～C地区などの南側傾斜面に営まれた堅穴住居跡群や土坑群の背後の尾根を隔てた北西斜面上部に位置している。2. 溝水の見られる谷間に面している。3. 集石遺構の一部やE地区SC 4などの上に覆いかぶさっている。4. 多量の上器片が積み重なっているが、完形品は殆どない。5. 数は少ないが、石器も破損品を中心に見られる。6. E地区の土器密集区包含層の中央下部付近では、比較的大きな半完形の土器が、セットと考えられる状態で出土している（第92図、土器は1025・1032）。これは、宮崎市平畠遺跡XXIV区遺物包含層最下部の一括出土の縄文土器及びその出土状況に類似している。



第92図 E地区土器密集区下部半完形土器出土状況実測図

## (5) 繩文土器

### 1. 出土状況

縩文土器は、A地区の北西部のa・b-6~9、c・d-8・9、e-9の土器密集区及びそれに続くE地区南東部の土器密集区から特に集中して出土しており、次にA地区的南部のi・j-2~7のSA1・2・3周辺に集中して出土している。B地区では、北部のe~g-31~33に少し集中している。逆にC地区ではほとんど出土していない。

### 2. 分類(第93図~第125図)

縩文土器は、まず、深鉢形土器・浅鉢形土器などの口縁部形態や文様、その他の諸特徴をもとに分類と説明を行い、その後、脚台付浅鉢・底部の順に説明することにしたい。

I類 口縁部外面にヘラ状工具による太い連続押圧文、その下に浅く太い凹線文を施すもの(738)。器面調整は、ナデである。

II類 口縁部外面に連続押圧(刺突)文、その下に沈線文を施すものである(739~742)。器形は直口またはやや外反する深鉢形土器で、器面調整には貝殻条痕文が多く見られる。施文の特徴によって次の2類に細分した。

a. 口唇部に指で押したような押圧刻みを持ち、口縁部は竹管状工具による太めの連続刺突文、その下に1条の沈線文を施すもの。これらの文様は深く、内面側に浮き出している(739)。

b. 口縁部にヘラ状工具または貝殻腹縁による連続押圧文、その下に2~4条の沈線文を施すもので、押圧文は浅く細い(740~742)。740は、口唇部に貝殻腹縁によるごく浅い連続押圧痕が見られる。

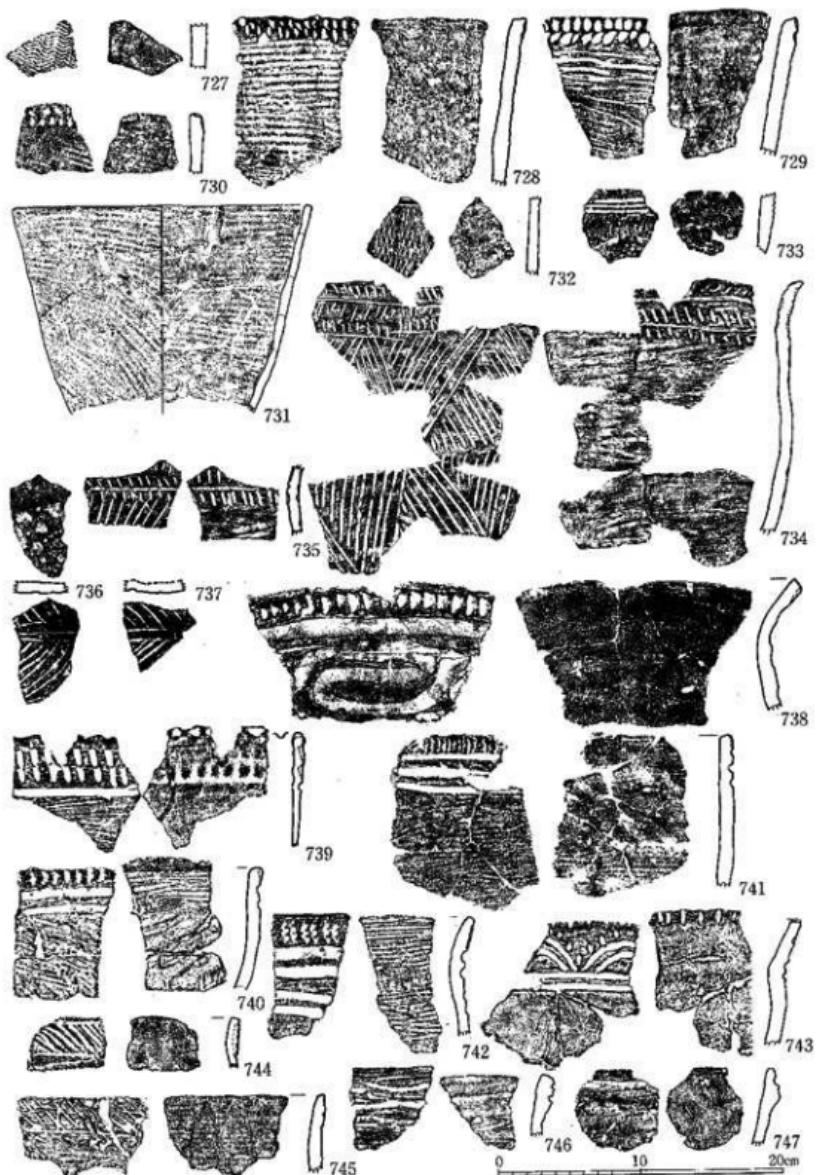
III類 口縁部をわずかに肥厚させて文様帶とするもの(744~774)で、V類との違いは口縁部断面を三角形に肥厚させるものが少ないと、文様帶下部の段があまりはっきりせずにしまりがないこと、口縁部は粘土帯を張り付けて肥厚させていると考えられることなどである。766~767は無文土器であるが、口縁部形態からこの類にいた。

a. 口縁部文様帶の下部を沈線文で区切り、その上は斜沈線を施すもの(744~745)。

b. 二枚貝腹縁または竹管状工具・ヘラ状工具などによる沈線文・短沈線文・刺突文・押引き文などを施すもの(746~765・768~774)がある。

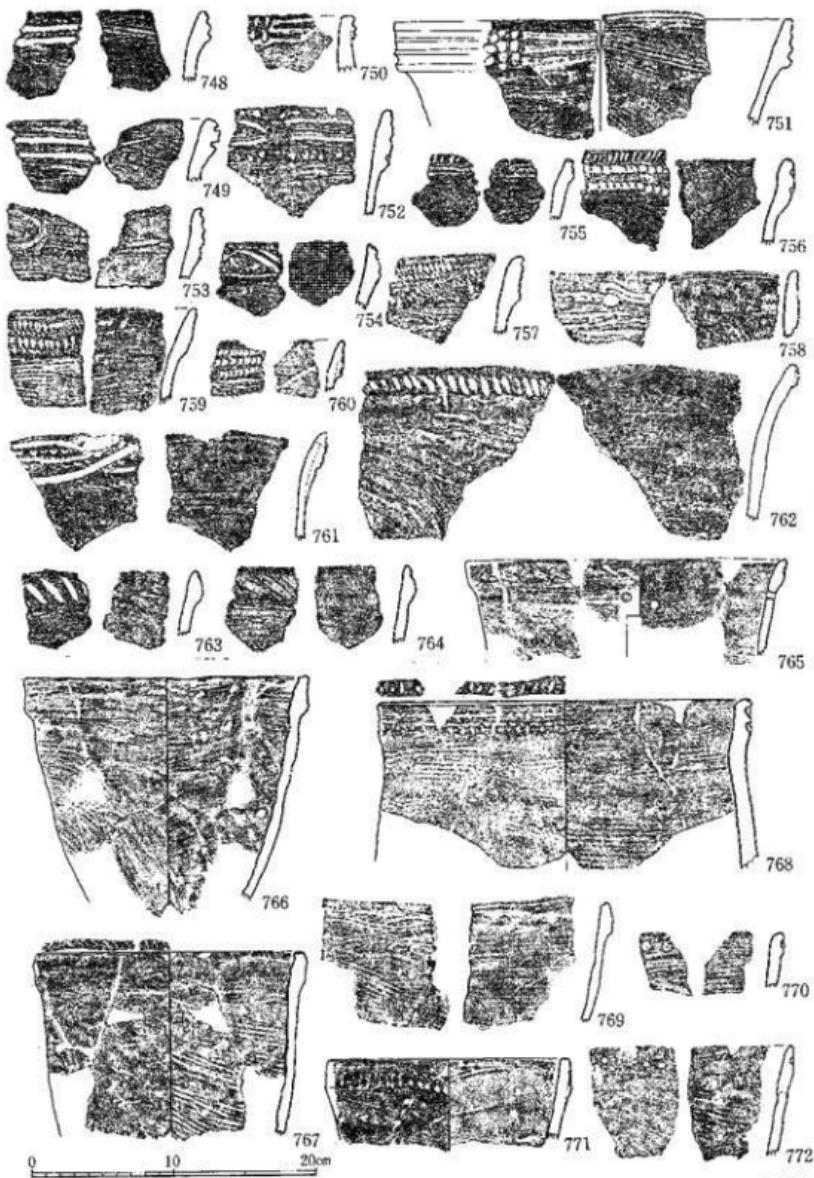
IV類 口縁部文様帶が厚く肥厚し、大部分が段を有している。文様は、沈線文と刺突文・押圧刻みのみを組み合わせ、最終的な器面調整は殆どナデである(775~789・859~860・1132)。平口縁のほかに波状口縁も見られ、口唇部に沈線文を施すものと無いものがある。また、このうち、沈線文間に連続刺突文を施すもの(782・784・786・789)は磨消縩文土器の影響を受けたものであろう。文様帶の特徴によって2類に分けた。

a. 口縁部文様帶と胴部文様帶との間に若干の無文帶を有するもの(775~784・859)。



第93図 繩文土器実測図 (33)

728~730・746~747 A地区  
727・732~733 B地区  
744 D地区 731~734・745 E地区  
745 0 10 20cm



第94図 縄文土器実測図 (34)

748・752・754～758・762～765・768～770 A地区  
749～751・753～759・761・767～771～772 E地区

766 B地区



第95図 桶文土器実測図 (35) 774~780・786・789・791~792 A地区 782・785 B地区  
773・783 D地区 781・784・787~788・790 E地区

b. 口縁部から胴部にかけて文様が続くもの（785～789・860・1132）がある。

V類 沈線文または平行沈線文を主文様として用いる一群である（790～836）。口縁部はやや外反するものが殆どで、強く外反するものは少ない。833～836はこの類の胴部片である。文様によって次の3類に区分した。

a. 2本の沈線文間に連続刺突文を施すもの（790～795）で、磨消繩文土器の影響を受けていると思われる。平口縁と波状口縁がある。このうち、795は他と異なり、貝殻腹縁ではなく棒状工具による刺突文を施す。また、794は上部の沈線文間にのみ刺突文が施され、E地区SC8出土土器の第81図1はII b類とこの類との中間的な様相の土器である。

b. 口縁上部に連続刺突文、その下に沈線文を施すものである（796～802）。平口縁と波状口縁があり、波頂部に刻みを持つものもある。

c. 沈線文を主文様とするもの（803～832）で、波状口縁と平口縁が見られる。波状口縁の土器（803～813）は波頂部に刻みを持つものが多く、平口縁の土器は口唇部に刻みのあるもの（814～821）と無いもの（822～832）がある。このうち、812～813は口縁部内面側に屈曲を有するもので、831～832は口縁部が強く外反するものである。

VI類 口縁部の内面上部あるいは口唇部に施文される土器の一群である（837～859・861～866）。平口縁と波状口縁が見られる。これらは、施文部位によって次のように細分できよう。

a. 口縁部内面上部にのみ文様があるもの（837～846・848～852・863）。

内面は段をなして文様帯を作るものと段のないものがあり、口唇部付近は肥厚するものとしないものがある。しかし、いずれも前者が多い。837～838は同一個体である。

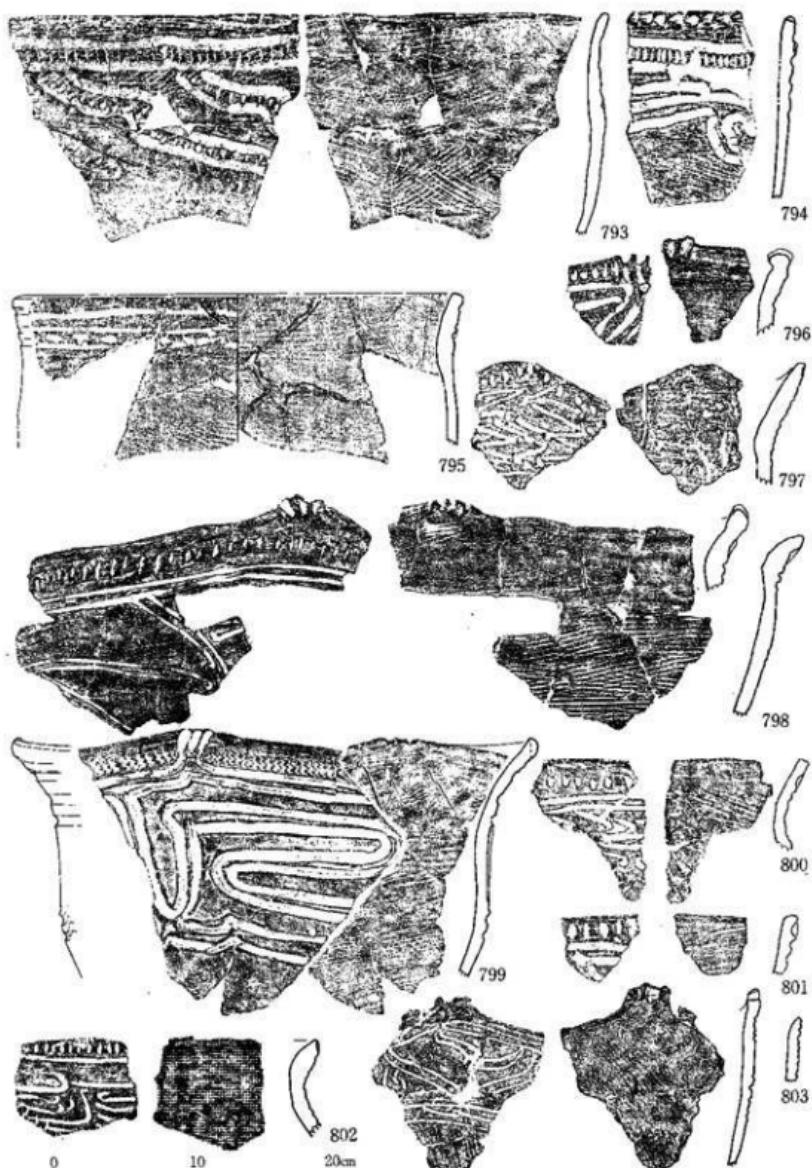
b. 口縁部内面上部及び外面口唇部に文様があるもの（847・853～856）。854～856は同一個体であるが、波頂部付近の855は内面に段をなさず、854・856には段がある。また、この854・856は段の下にも文様が広がるものである。

c. 口唇部に施文されるもの（858）。この類は殆ど出土していない。

d1. ほかの類のもので内面上部にも文様のあるもの（859・861～862・864・866）。859はV a類、864はVI a類の特徴を持つものである。

d2. ほかの類のもので口唇部にも文様のあるもの（857・865）。

VII類 口縁部を肥厚させ、断面が三角形または逆「く」字形に成形されるもの（867～1024）。いわゆる「市米式土器」である。文様には、貝殻腹縁の連続刺突文や竹管状工具による爪形あるいは「D」字形の連続刺突文や単独の刺突文、沈線文や凹線文などが見られ、口縁部文様帶あるいはその下部の胴上部にまで施文されたものがある。文様は、單一文の繰り返しや単純な組み合わせのものが多い。平口縁と波状口縁があるが、一般に波状口縁の方がやや装飾的である。口縁部文様帶の幅や施文の特徴、口縁部断面の形態などによって大



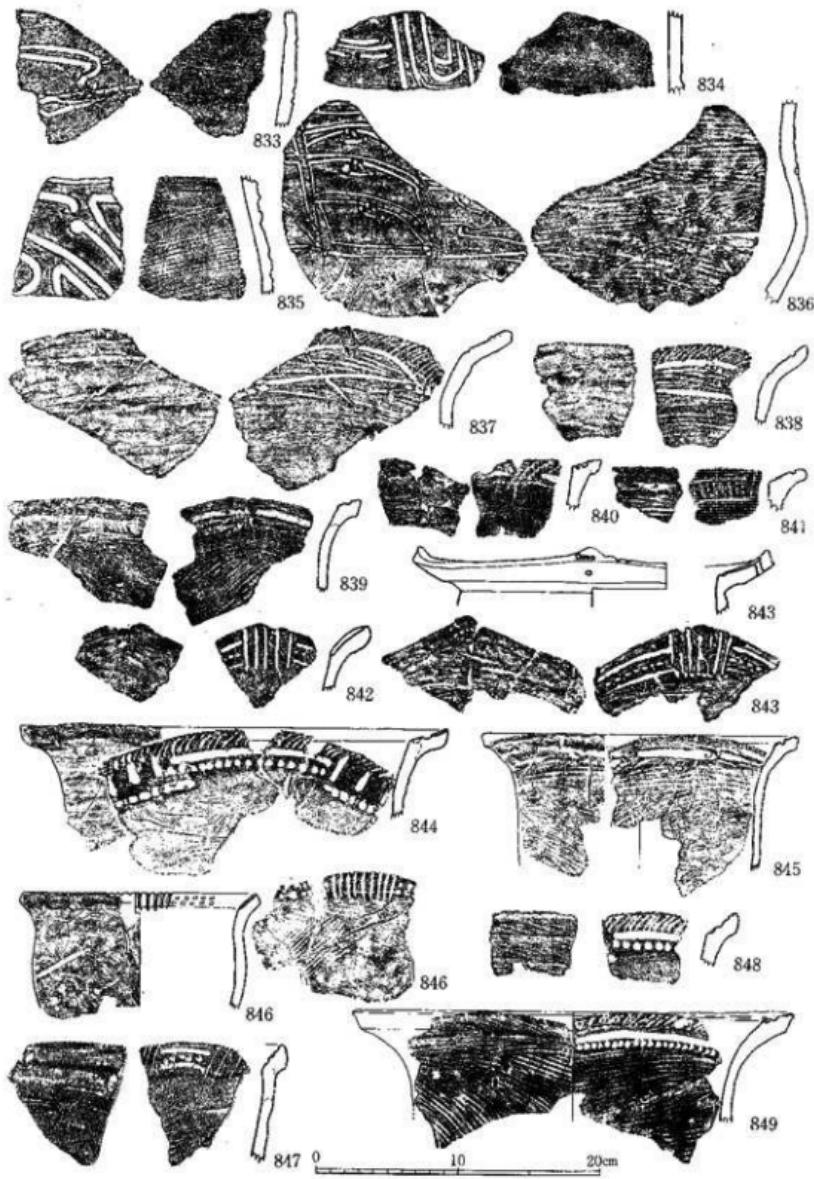
第96図 繪文土器実測図 (36)

793・796～798・803 A地区  
795・802 D地区 794・799 E地区  
800～801 B地区

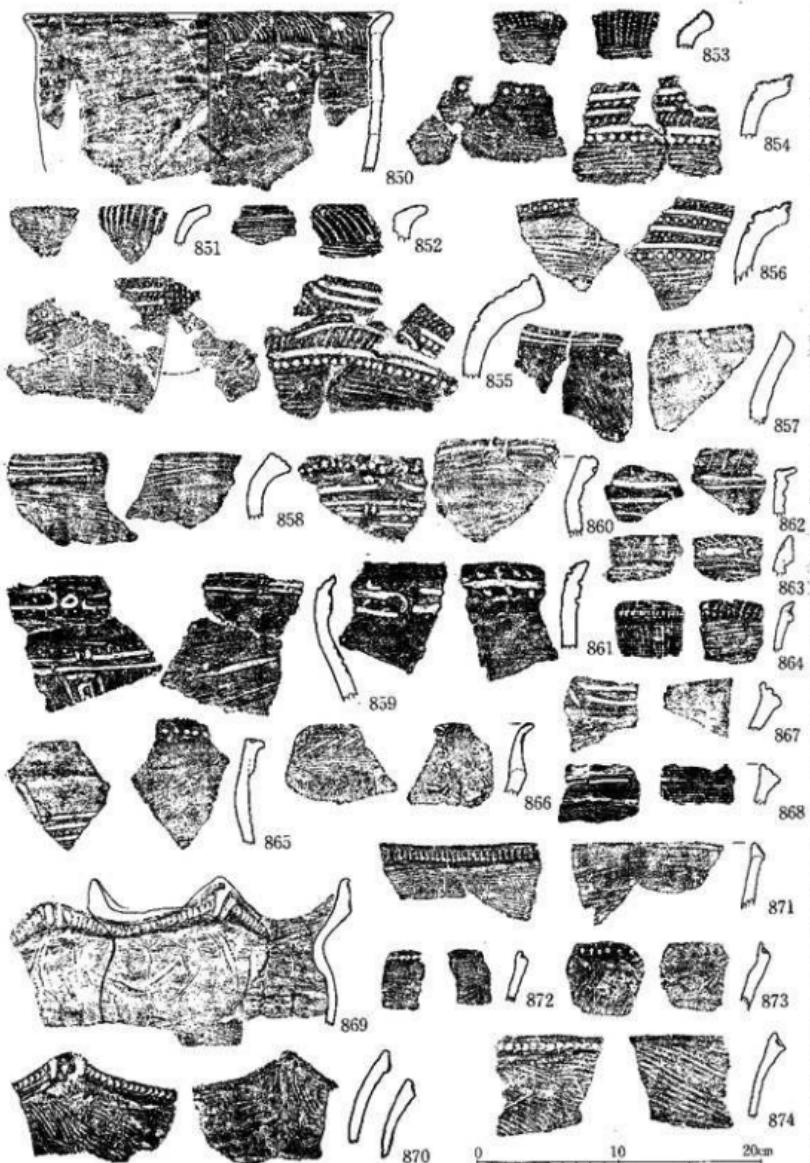


第97図 繩文土器実測図 (37)

804~805・810~816・820・822~826・828~829 A地区  
 807~809・817~819・830 日地区  
 821 D地区  
 806・827・831~832 E地区



第98図 繩文土器実測図 (38)  
 834～835・837～838・840～842・848 A地区  
 833・836・839・843 B地区 845 D地区  
 844・846～847・849 E地区



第99図 横文土器実測図 (39) 851~855・857~858・861~865・867・869~870・874 A地区  
856・871~872 D地区 850・859~860・866・868・873 E地区

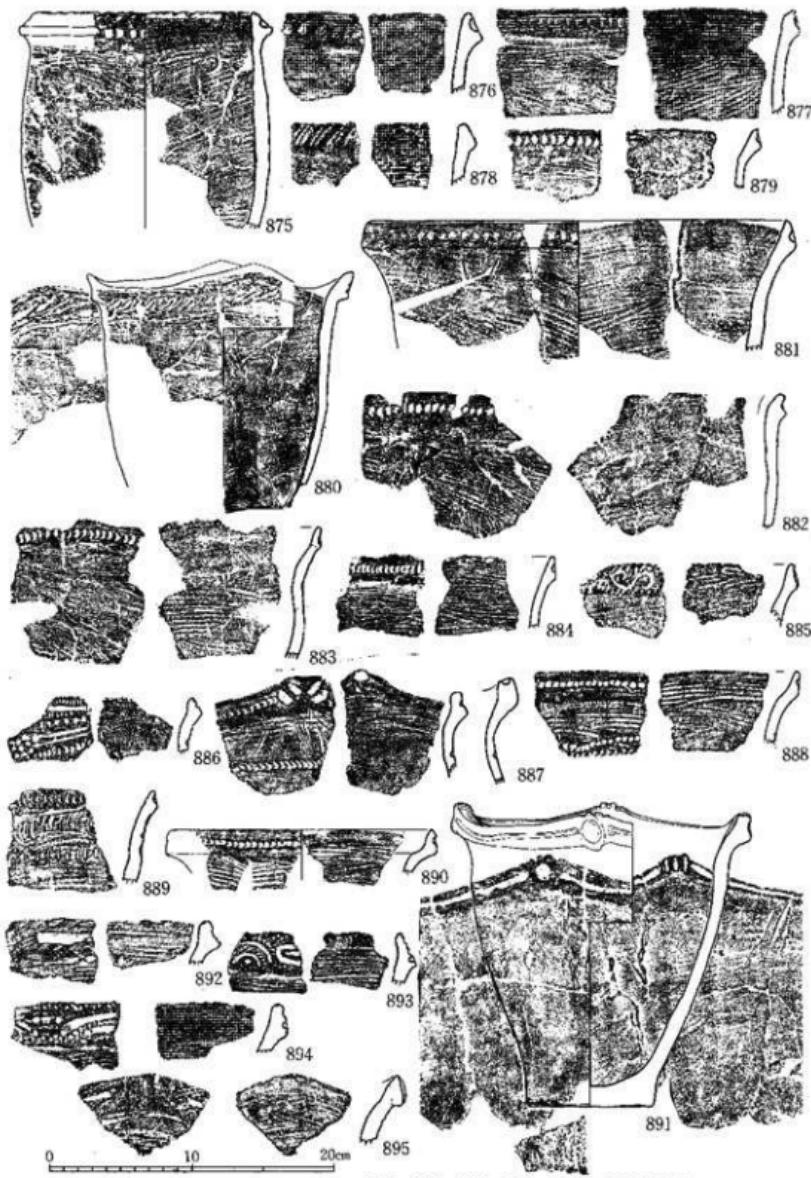
まかに次の4類に分けて掲載した。

a . 864・867～891・1166～1167。口唇部をわずかに拡張させたような、口縁部文様帯幅の比較的狭いもので、文様は「D」字形連続刺突文などの単純なものが多い。波状口縁土器においても波頂部の文様は簡素なものである。886～889のように口縁部文様帶の下の胴部にも文様が見られるものがある。1166～1167は、無文土器で口縁部の肥厚はわずかであるが、全体のプロポーションからこの類に入れた。

b . 892～982・1173・1176～1177・1181。aより口縁部文様帯幅がやや広く次のcよりは狭いものをまとめた。892～923は、口縁部文様帶の沈線文間またはその上下に、貝殻腹縁や棒状工具による連続刺突文を充填させたもので、充填細文を施した口縁部のイメージがある。924～970は、前者に比べてやや単純かつ簡素な文様を持つ。aで見られた「D」字形連続刺突文のはかに貝殻腹縁の単純な連続刺突文も見られる。しかし、波状口縁土器の波頂部においては、文様帯幅がaより広い分だけ、若干複雑な文様のものが見られる。また、971～982は、口縁部文様帶の下にも文様が施されるもので、特に979～980は丁寧な施文の精製品と思われるものである。この類では、908・921・944・978～982のように、口縁部断面が逆「く」字形に屈曲するものが、少量だが見られる。1173・1176～1177・1181は、無文土器であるが、口縁部断面の形態からこの類のものと思われる。

c . 983～1011・1174～1175・1179～1180。口縁部文様帯幅がⅦ類の中で最も広いものである。口縁部文様帶下部の肥厚部分は明瞭で著しく張り出す。また、その内面が畳曲し、口縁部断面が顕著な逆「く」字形を呈するものが目立つ多い。口縁部文様帯幅が広いにもかかわらず、平口縁土器にはそれほど文様の複雑さや華美さは見られない。bに比べると浅い凹線文が多用され、間延びした感のある文様構成である。しかし、波状口縁土器の波頂部においては、端部を刺突で止めた凹線文（太めの沈線文）と貝殻腹縁の連続刺突文とを組み合わせて、1005・1011などのように、横方向の短凹線文の左右に斜方向の短凹線文、さらにその左右に横方向の凹線文を施し、これらの上下には貝殻腹縁の連続刺突文を施すという文様のパターン化が見られる。1003は口縁部文様帶の肥厚部分に、1005～1011は、口縁部文様帶及びその下部の胴部と頸部のくびれ付近にも施文されるものである。また、1174～1175・1179～1180は無文土器であるが、口縁部断面の形態からこの類に入れた。

d . 1012～1024。口縁部文様帶下部の肥厚が強調されず、形骸化したような低い段になり、口縁部断面の逆「く」字形の屈曲も間延びし、その下にくびれが生じない。その結果、肥厚させたり、あるいは屈曲させることによって保たれた従来の口縁部文様帶がその意味を薄れさせてしまっている土器の一群である。文様は、肥厚部分の上下にcで見られたパターン化された文様や貝殻腹縁の単純な連続刺突文を施している。外面文様帶中央の段の上部が比較的狭いものと広いものの二者が見られる。

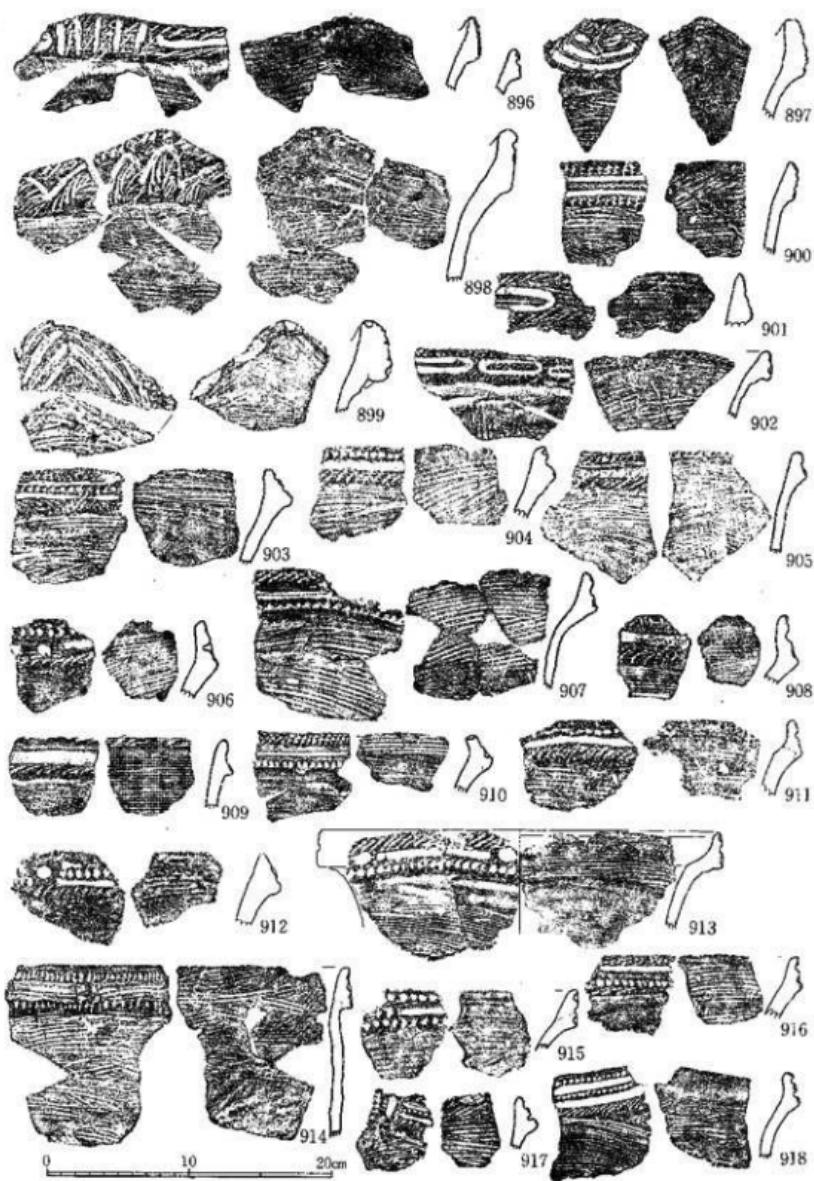


第100図 繩文土器実測図 (40)

875~877・881・889・892~895 A地区

878~879・882・886・891 B地区

880・883・887~888 D地区 884~885・890 E地区



第101図 繩文土器実測図 (41)

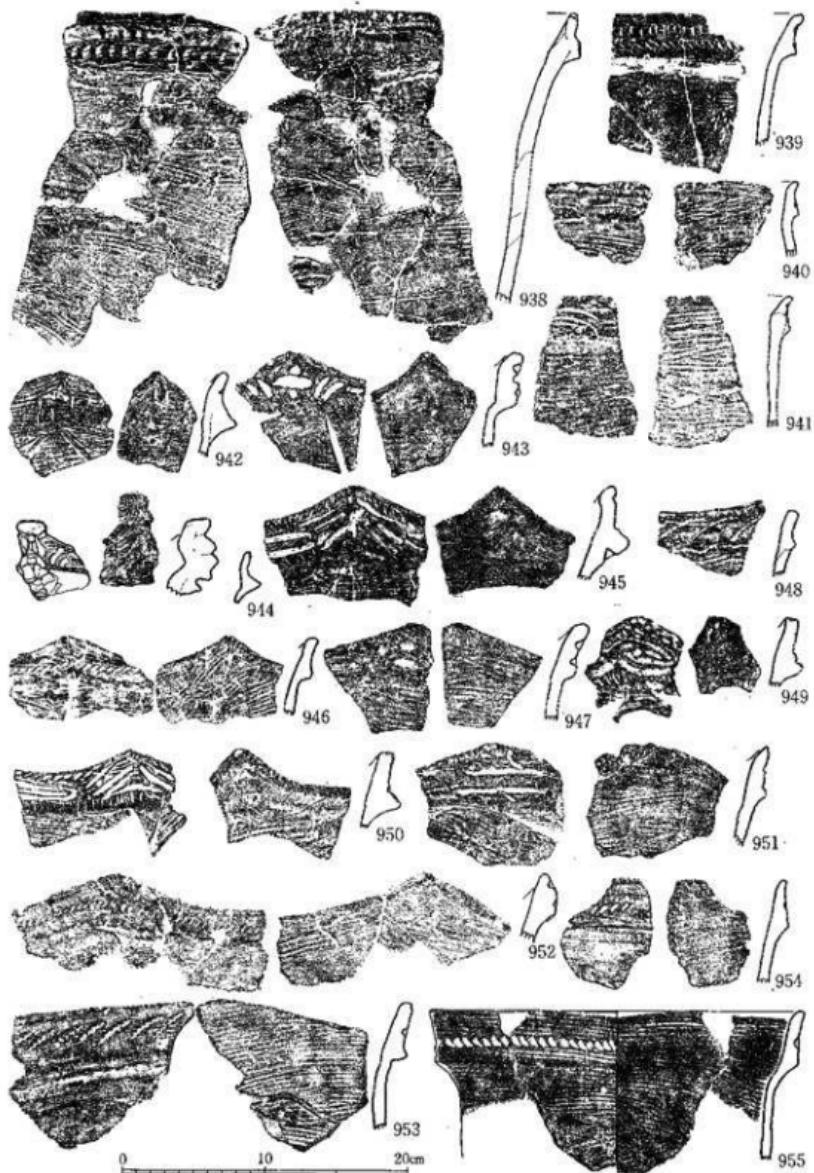
896～910・917～918 A地区  
913～916 E地区

911～912 日地区

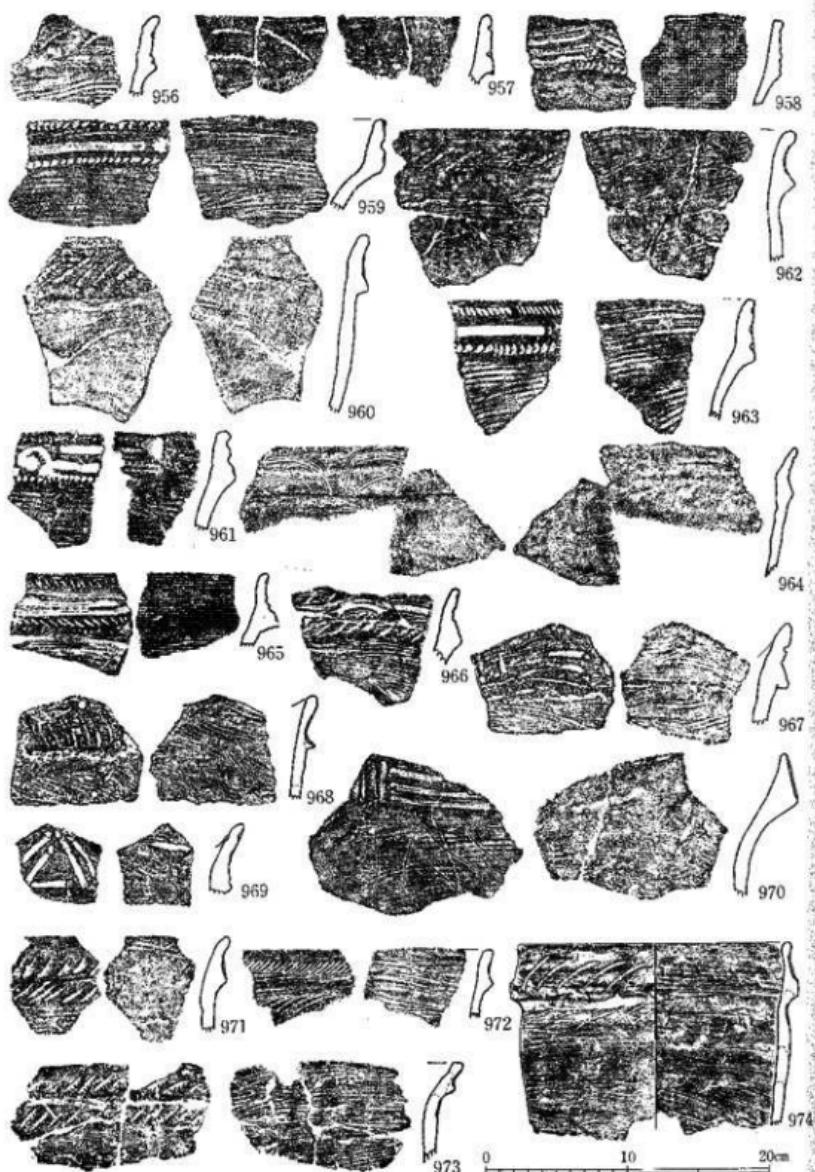


第102図 繩文土器実測図 (42)

919~921・923~931 A地区  
922・932 B地区  
933~934 D地区  
935~937 E地区



第103図 繩文土器実測図 (43) 942~948・951・953~955 A地区 938~941・949~950・952 E地区



第104図 桶文土器実測図 (44)

956~959・965~966 A地区  
960~961・967~969~971 B地区  
962~964・968~972~974 C地区